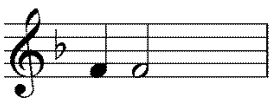司祭) 光榮(こうえい)は一性(いつせい)にして生命(いのち)を施(ほどこ)す分(わか)れざる聖三者(せいさんしゃ)に歸(き)す、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、
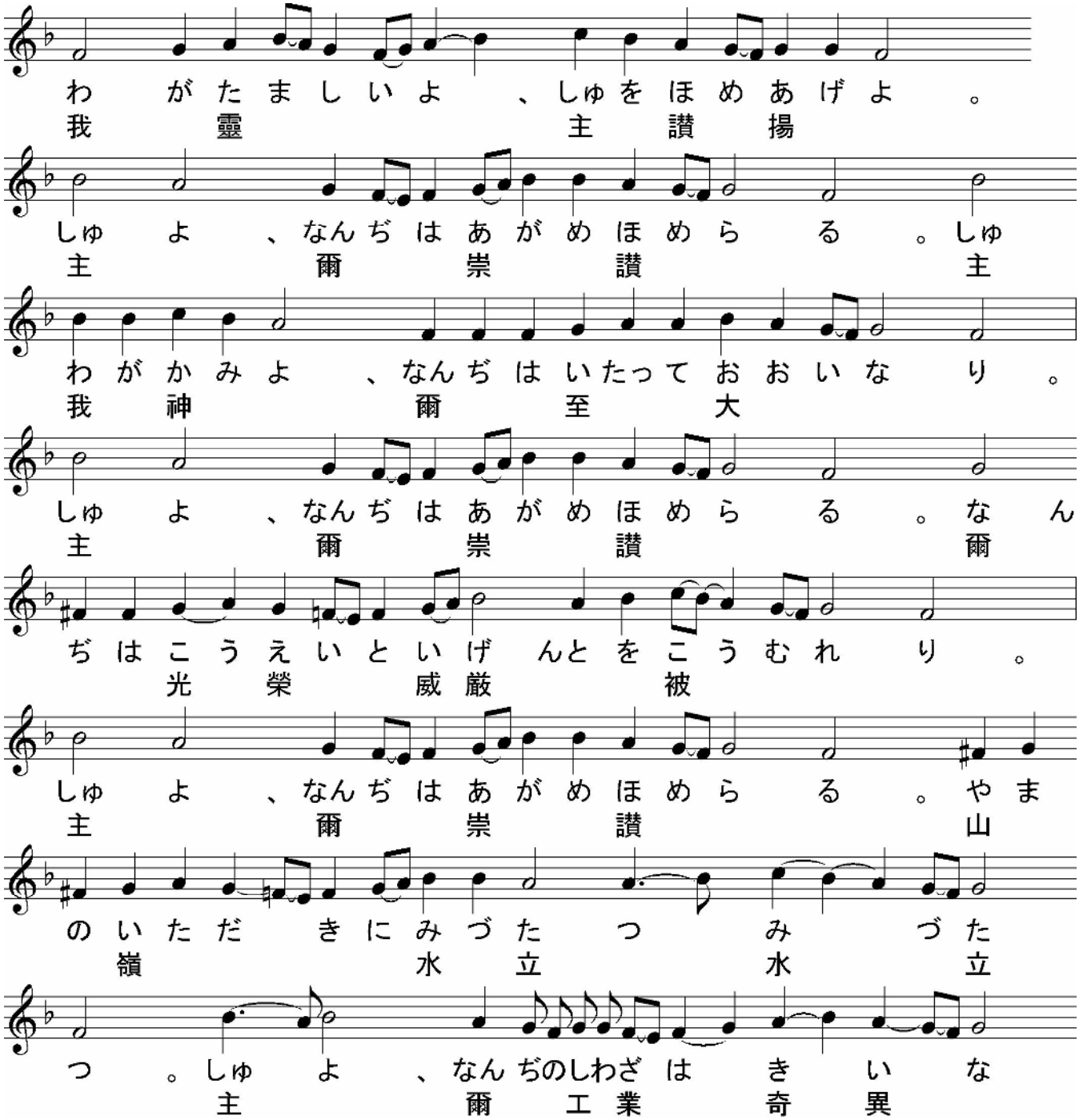


司祭) 來(きた)れ、我等(われら)の王(おう)・神(かみ)に叩拜(こうはい)せん、
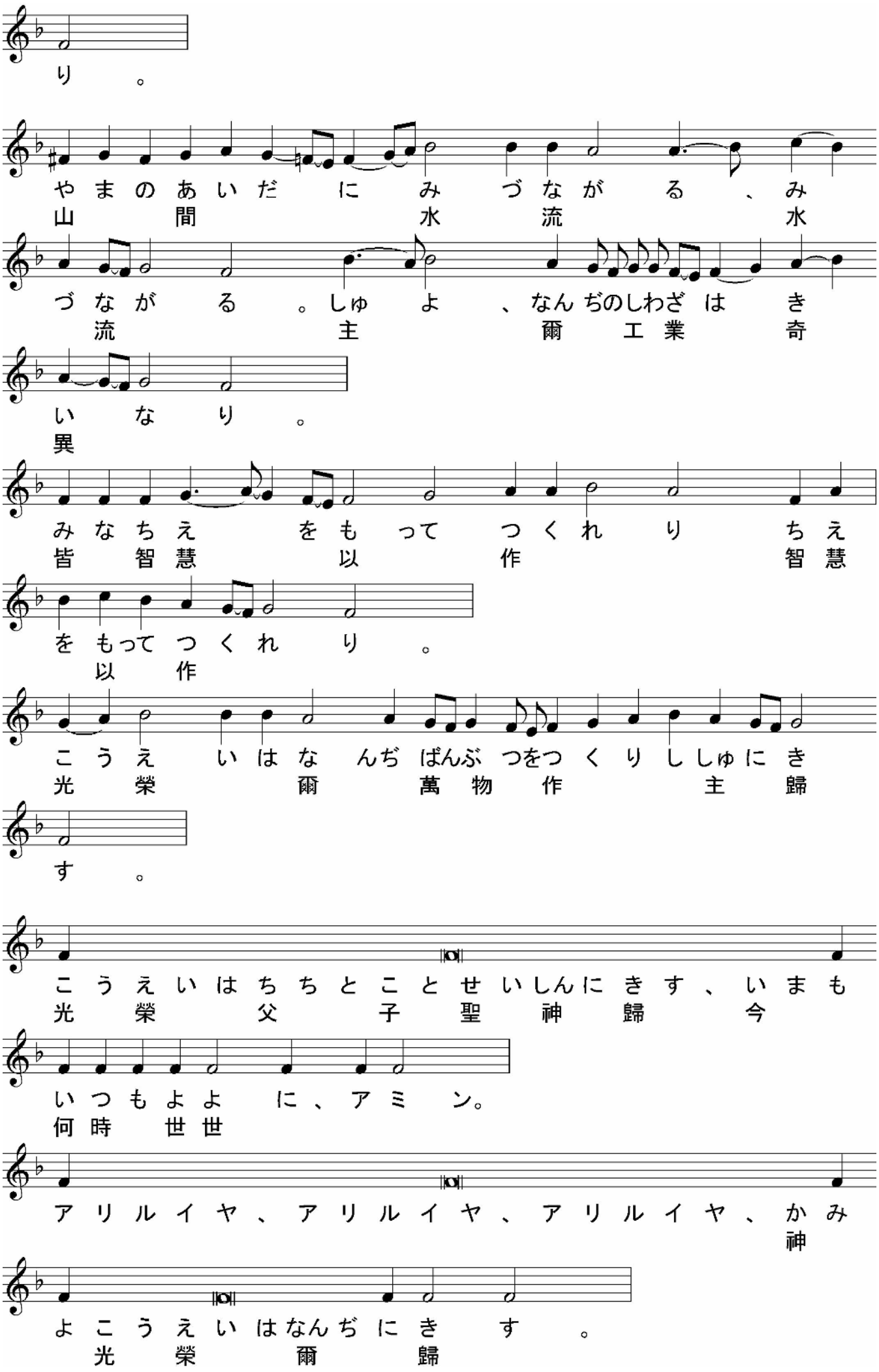
來(きた)れ、ハリストス・我等(われら)の王(おう)・神(かみ)に叩拜俯伏(こうはいふふく)せん、
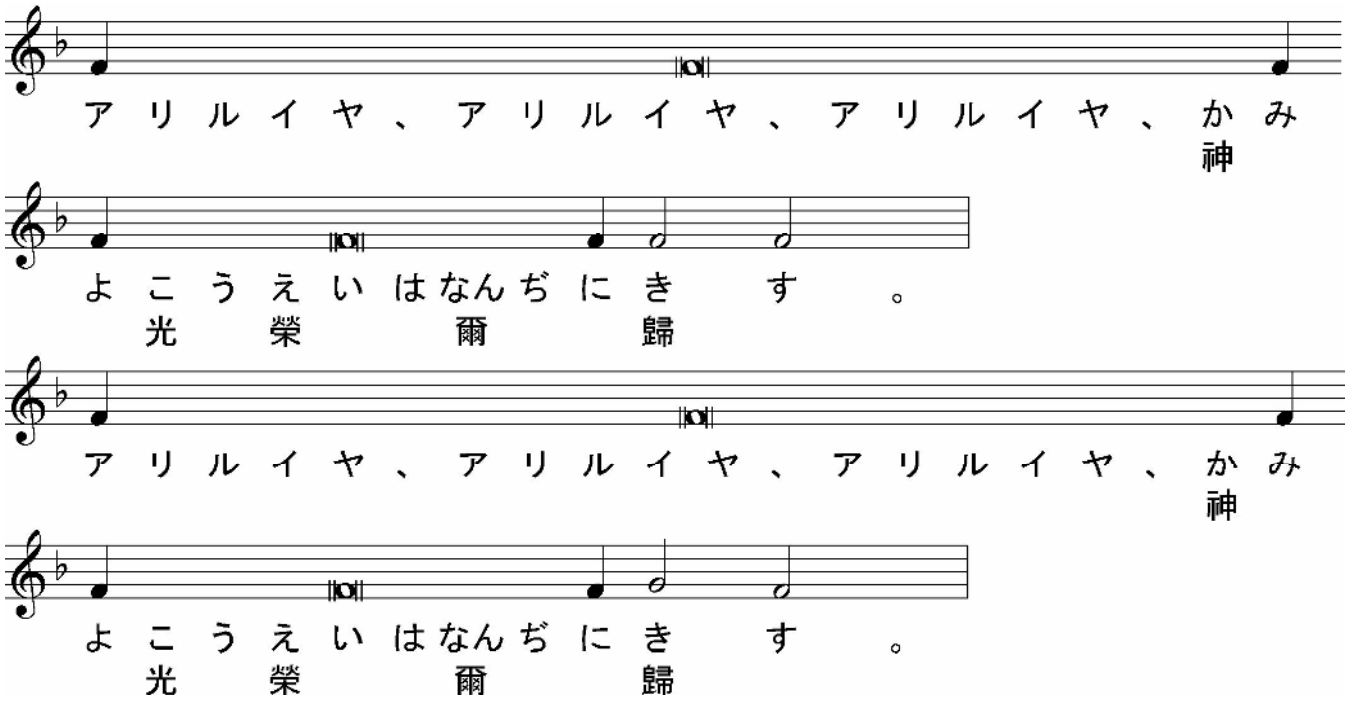
來(きた)れ、ハリストス・我等(われら)の王(おう)と神(かみ)の前(まえ)に叩拜俯伏(こうはいふふく)せん、

來(きた)れ、彼(かれ)に叩拜俯伏(こうはいふふく)せん、

【　第 103 聖詠（首誦聖詠：我が靈よ主を讃め揚げよ）　】
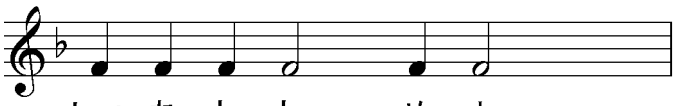



り 。
やまのあいだ にみづながる 、み
山間 水流 水
づながる 。しゅよ 、なんぢのしわざは き
流 主 爾 工業 奇
いなり 。
異
みなちえ をもって つくれり ちえ
皆 智慧 以 作 智慧
をもってつくれり 。
以 作
こうえ いはなんぢばんぶつをつくりししゅにき
光榮 爾 萬物 作 主歸
す 。
こうえいはちちとことせいしんにきす 、いまも
光榮 父 子 聖神 歸 今
いつもよよ に、アミン。
何時 世世
アリルイヤ 、アリルイヤ 、アリルイヤ 、かみ
神
よこうえいはなんぢにき す 。
光榮 爾 歸
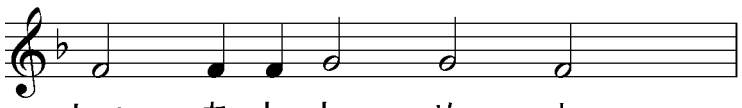


【　大聯禱　】

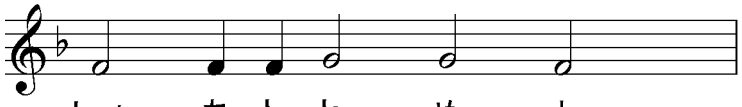
司祭）我等安和にして主に禱らん、



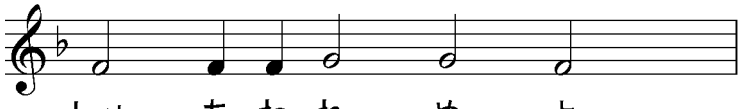
司祭）上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、
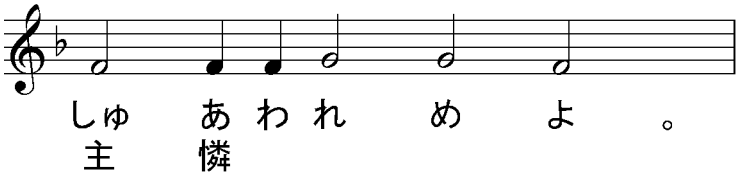


司祭）全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、
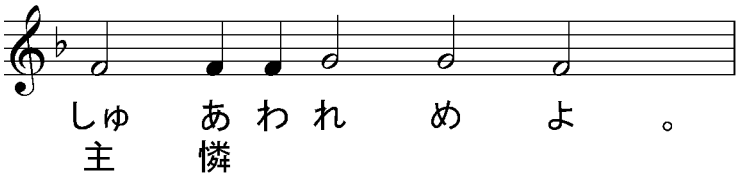


司祭）此の聖堂、及び信と愼と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、
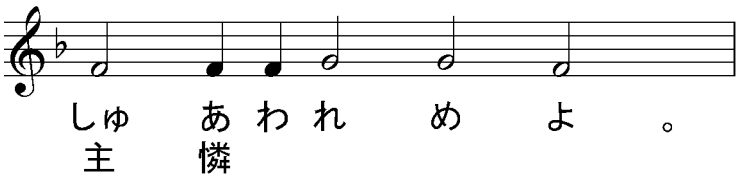


司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、
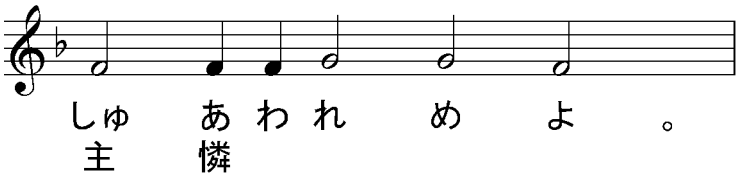


司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、
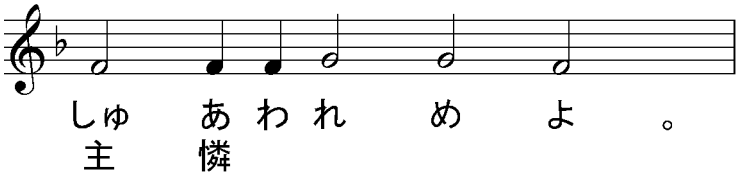


司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、
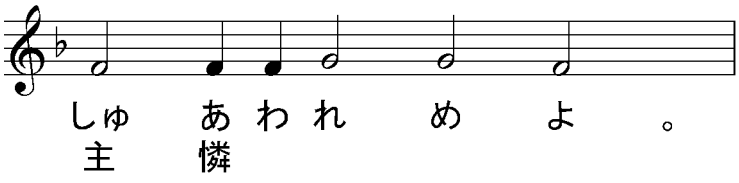


司祭) 氣候順和、五穀豐穰、天下泰平の爲に主に禱らん、
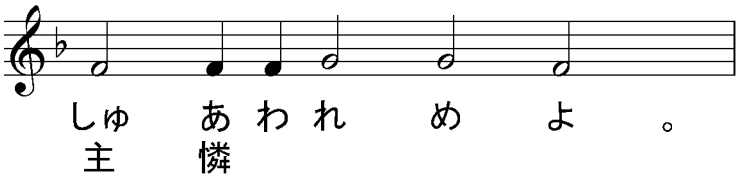


司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び彼等の救の爲に主に禱らん、
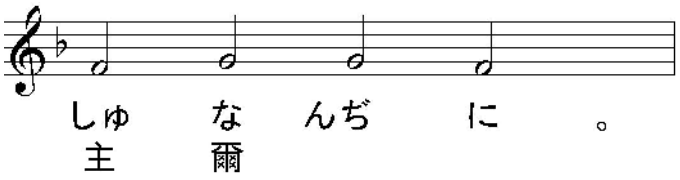


司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、
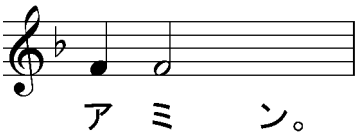


司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、
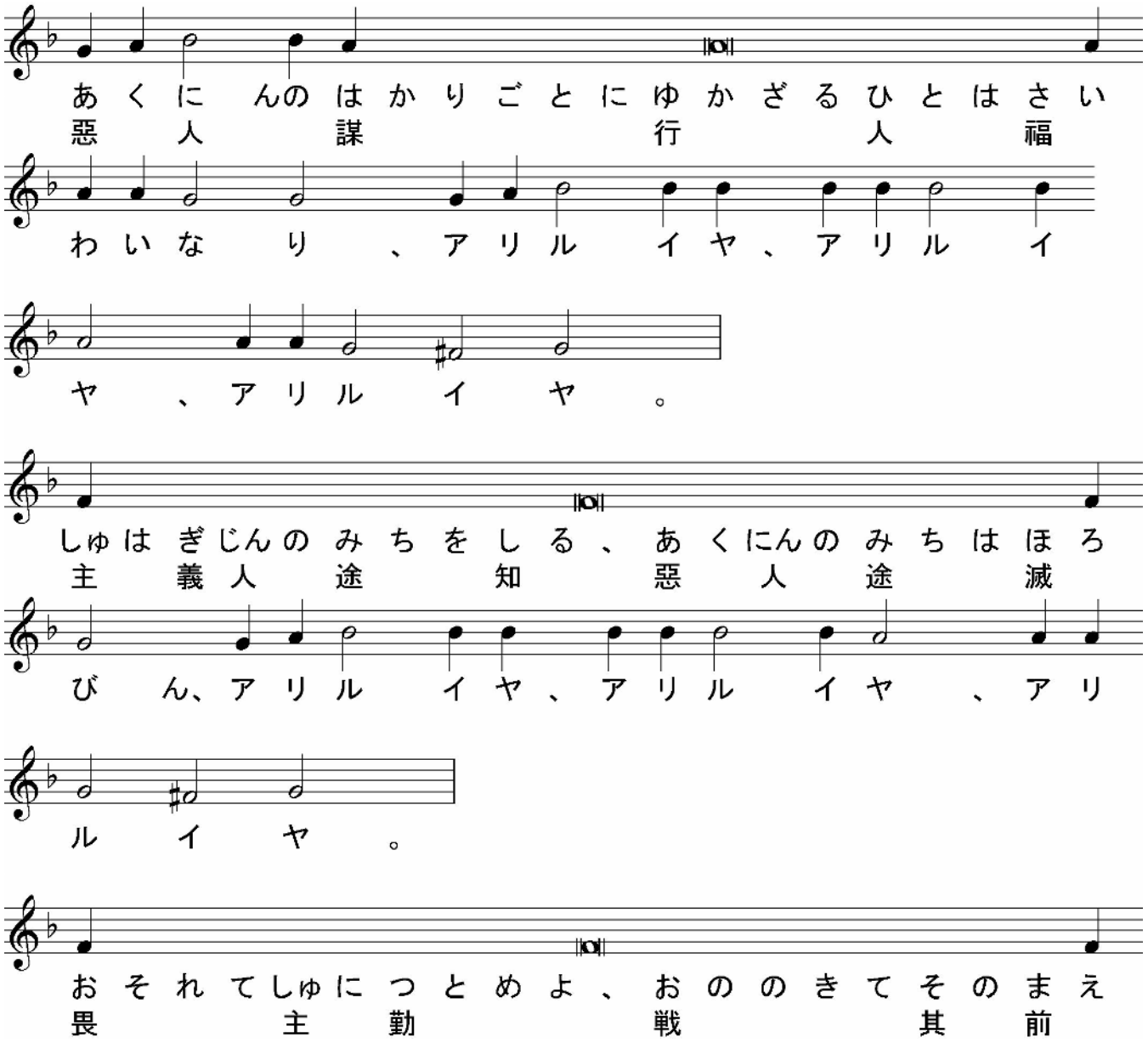


司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤ
と、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの
我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
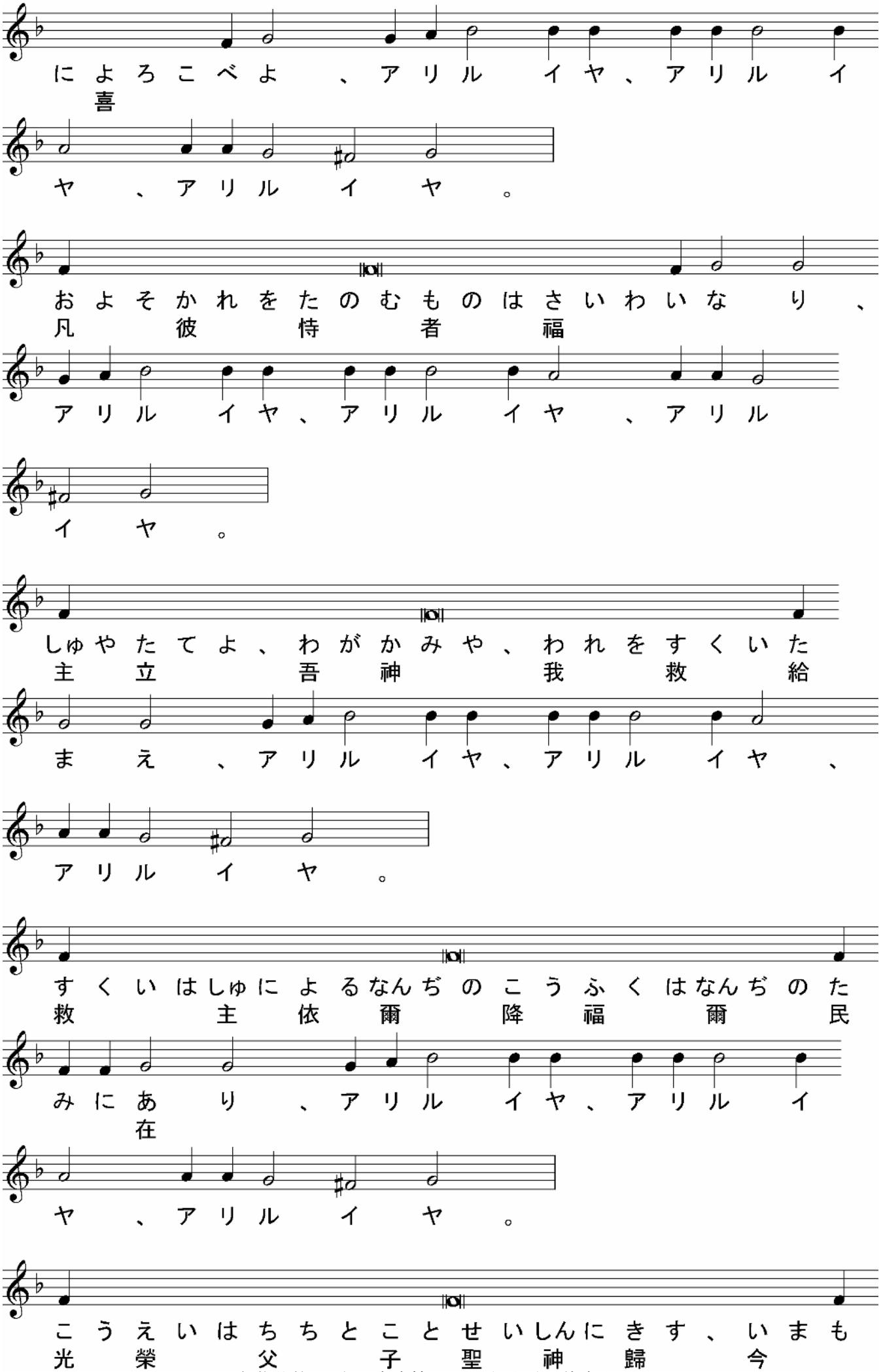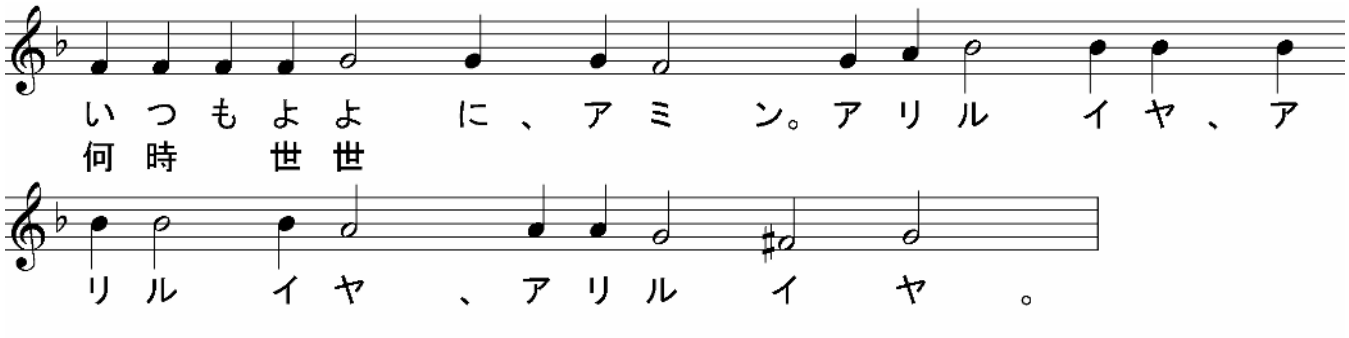


司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【 第一カフィズマ 第一段 (第１、２、３聖詠) 】

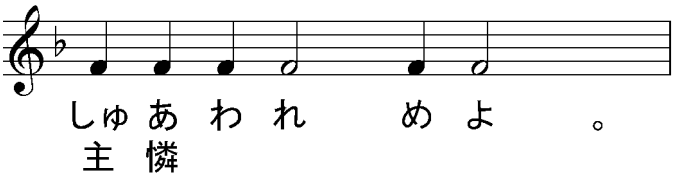



よろこべよ、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。
喜
おそれをたのむものはさいわいなり、
凡彼恃者福
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。
しゅやたてよ、わがかみや、われをすくいたまえ、
主立吾神我救給
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。
すくいはしゅによるなんぢのこうふくはなんぢのたみにあり、
救主依爾降福爾民在
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。
こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮父子聖神歸今
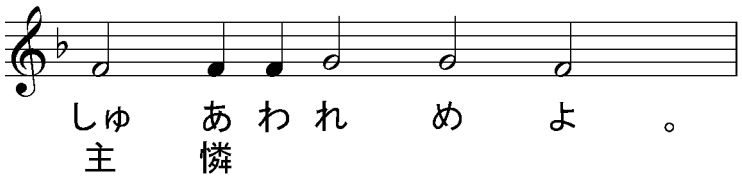


【　小聯禱　】
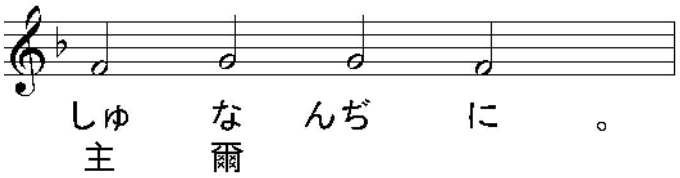
司祭）我等復又安和にして主に禱らん、
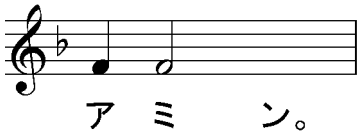


司祭）神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、
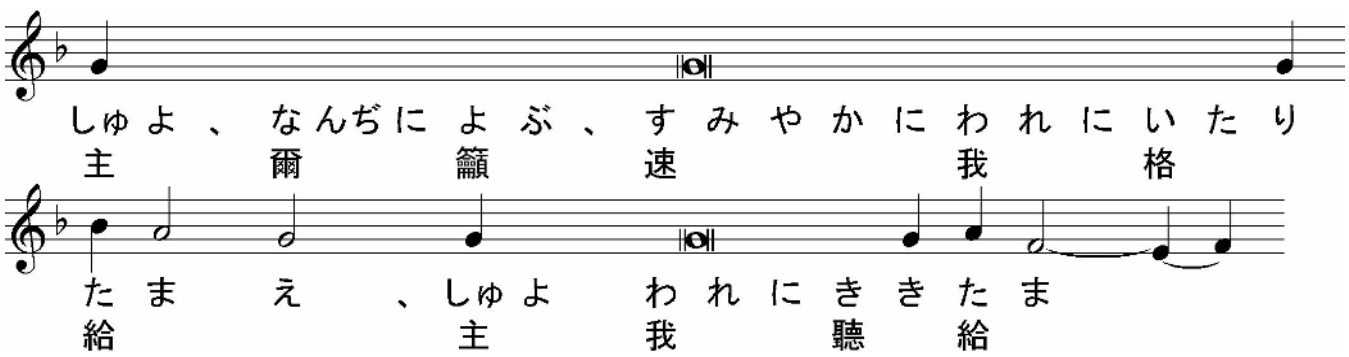


司祭）至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

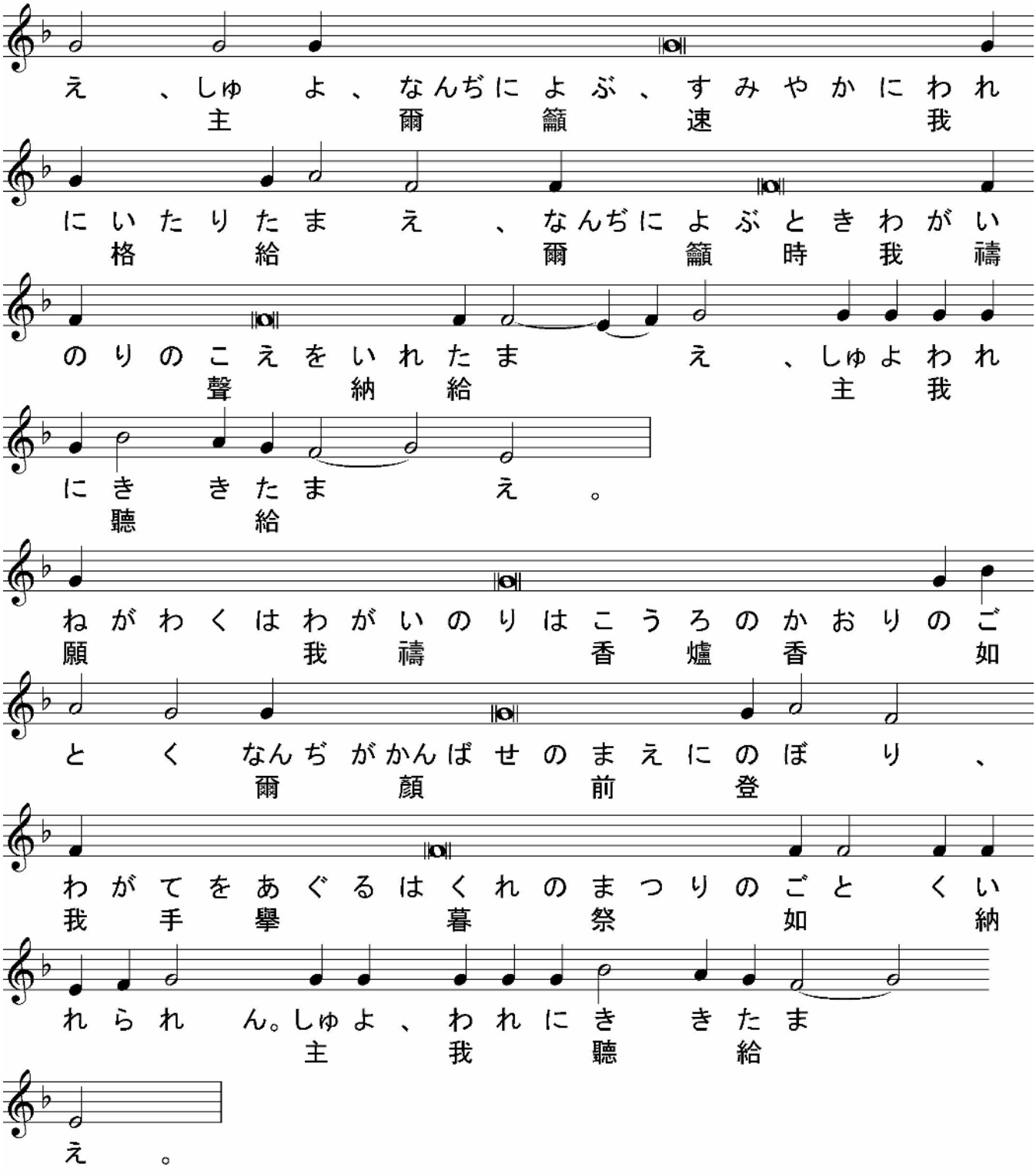


司祭）蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【　第１４０聖詠（主よ爾に籲ぶ）　第２調　】





誦經① 主(しゅ)よ、我(わ)が口(くち)に衛(まもり)を置(お)き、我(わ)が唇(くちびる)の門(もん)を扞(ふせ)ぎ給(たま)え、我(わ)が心(こころ)に邪(よこしま)なる言(ことば)に傾(かたぶ)きて、不法(ふほう)を行(おこな)う人(ひと)と共(とも)に、罪(つみ)の推諉(いいわけ)せしむる毋(なか)れ、願(ねが)わくは我(われ)は彼等(かれら)の甘味(あまみ)を嘗(な)めざらん。義人(ぎじん)は我(われ)を罰(ばつ)すべし、是(これ)矜(きょうじゅつ)恤なり、我(われ)を譴(せ)むべし、是(これ)極(い)と美(うるわ)しき膏、我(わ)が首(こうべ)を悩(なや)ます能(あた)わざる者(もの)なり、唯我(ただわ)が禱(いのり)は彼等(かれら)の惡事(あくじ)に敵(てき)す。彼等(かれら)の首(しゅ)長は巖石の間(いわお あいだ)に散(さん)じ、我(わ)が言(ことば)の柔和(にゅうわ)なるを聽(き)く。我等(われら)を土(つち)の如(ごと)く斫(き)り碎(くだ)き、我(わ)が骨(ほね)は地獄(ちごく)の口(くち)に散(ち)りて落(お)つ。主(しゅ)よ、主(しゅ)よ、唯我(ただわ)が目(め)は爾(なんぢ)を仰(あお)ぎ、我(われ)爾(なんぢ)を恃(たの)む、我(わ)が

靈を退くる母れ。我が爲に設けられし弶、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第１４１聖詠 】

誦經②我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を其前に顯せり。我が靈の衰に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は我の避所なり、生ける者の地に於いて我の分なり。我が呼ぶを聽き給え、我甚く弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

誦經①我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讃榮せしめ給え。

誦經②來りて、世の無き先に父より生れし神の言、童貞女マリヤより身を取りし者に伏拜せん。蓋彼は親ら望みし如く、十字架を忍びて、葬に付されたり、死より復活して、我迷える人を救い給えり。

誦經① 爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

誦經②ハリストス吾が救世主は我等を罪する書券を十字架に釘うちて之を抹し、死の權を空しくし給えり。我等其三日目の復活に伏拜す。

誦經①主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聽き給え、

誦經②我等は天使首と共にハリストスの復活を讃め歌わん。蓋彼は我等の靈の贖罪主及び救世主なり、且畏るべき光榮と勁き能力とを以て還來りて、其造りし世界を審判せん。

誦經①願わくは爾の耳は我が禱の聲を聽き納れん。

誦經②天使は爾十字架に釘せられて葬られたる主宰を傳えて、女等に言えり、來りて、主の臥したる處を觀よ、蓋彼は言いし如く復活せり、全能者なればなり。故に我等爾惟一不死の者に伏拜す。生命を賜うハリストスよ、我等を憐み給え。

誦經① 主よ、若し 爾 不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども 爾 に 赦 あり、人の 爾 の前に 敬 まん爲なり。

誦經② 爾 の 十 字架にて木に縁る 詛 を空しくし、 爾 の 葬 にて死の權を 滅 し、 爾 の 復 活にて人 類を照し給えり。故に我等 爾 に籲ぶ、恩 主ハリストス吾が神よ、光 榮 は 爾 に歸す。

誦經① 我 主を望み、我が 靈 主を望み、我 彼の 言 を恃む。

誦經② 主よ、死の門は畏懼に因りて 爾 の爲に啓け、地獄の門 衛は 爾 を見て懼れたり、 蓋 爾 は 銅 の門を破り、 鐵 の 柱 を折き、我等を幽 闇と死の蔭より引き出し、我等の 縛 を截ち給えり。

誦經① 我が 靈 主を待つこと、番 人の旦を待ち、番 人の旦を待つより 甚 し。

誦經② 救 の歌を歌いて、口を齋しくして籲ばん、皆 來りて、主の家に伏 拜して曰わん、木の上に釘せられて、死より復 活し、父の 懷 に在す主よ、我等の罪を淨め給え。

誦經① 願わくはイズライリは主を恃まん、 蓋 憐 は主にあり、 大 なる 贖 も彼にあり、彼はイズライリを其 悉 くの不法より 贖 わん。

誦經② 倚頼なき者の堅固なる憑恃、罪に 陥 る者の拯救たる讃め歌わるるマリヤ、 潔 き 生 神 女よ、我が此の 禱 を受けて、 爾 の母たる祈禱を以て我に 生 涯 犯 しし諸 罪 の 赦 を獲しめ給え。女 宰よ、 爾 の 大 なる 憐 に由りて、我を危難 及び 将 來の 定 罪より救い給え。

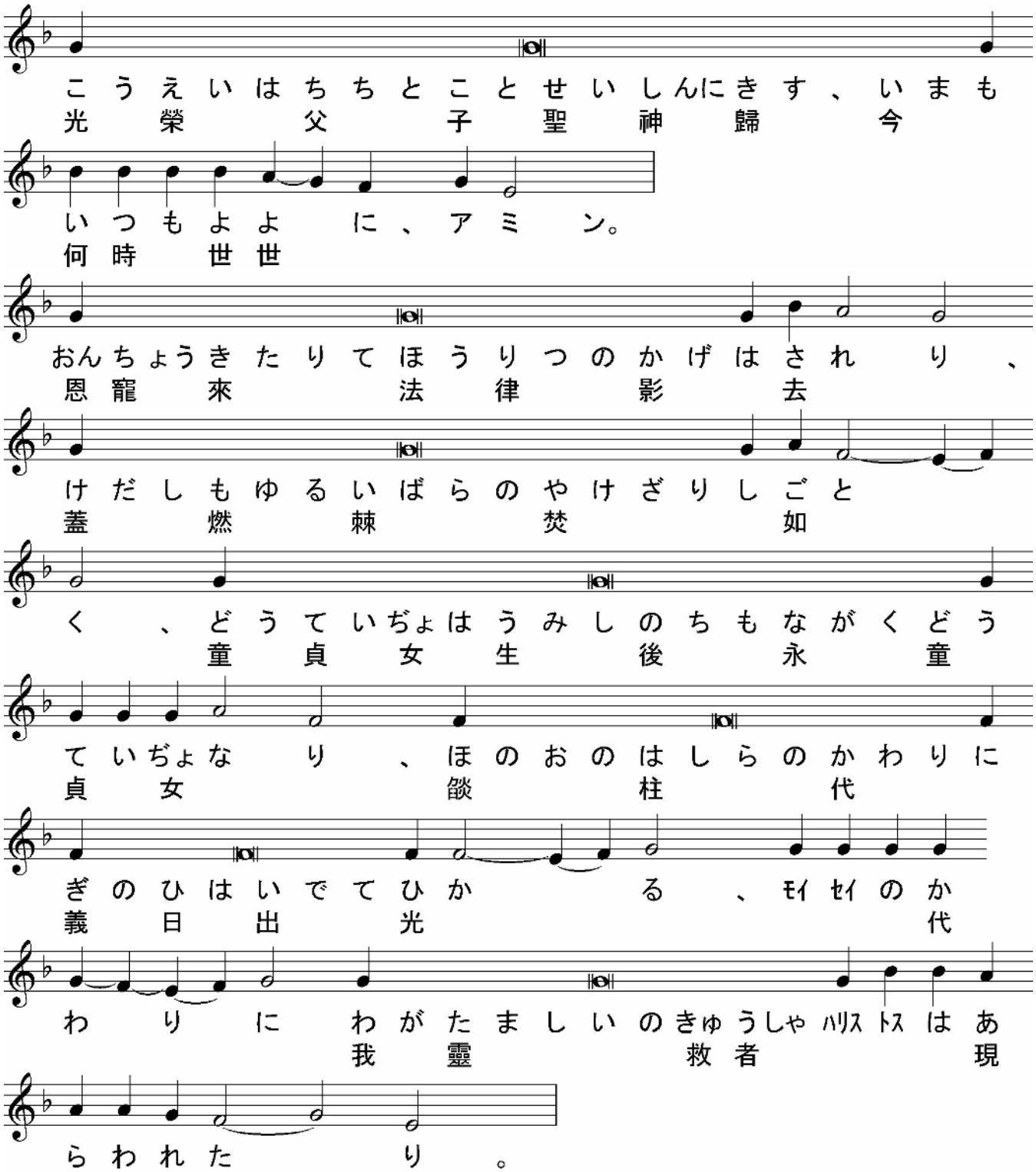
誦經① 萬 民よ、主を讃め揚げよ、萬 族よ、彼を崇め讃めよ、

誦經② 我が在 世の日は惡し、惡しくして罪 惡に充つ、 凶 惡なるサタナ 甚 しく我を擾すに因る。神の母よ、 爾 我を其 害より 免 れしめ、至聖なる者よ、 爾 我を其 口より脱し給え、我 悉 くの憑恃を 爾 に負わせたればなり。 爾 の熱 切なる祈禱を以て我を救い給え。

誦經① 蓋 彼が我等に 施 す 憐 は 大 なり、主の眞 實は永く存す。
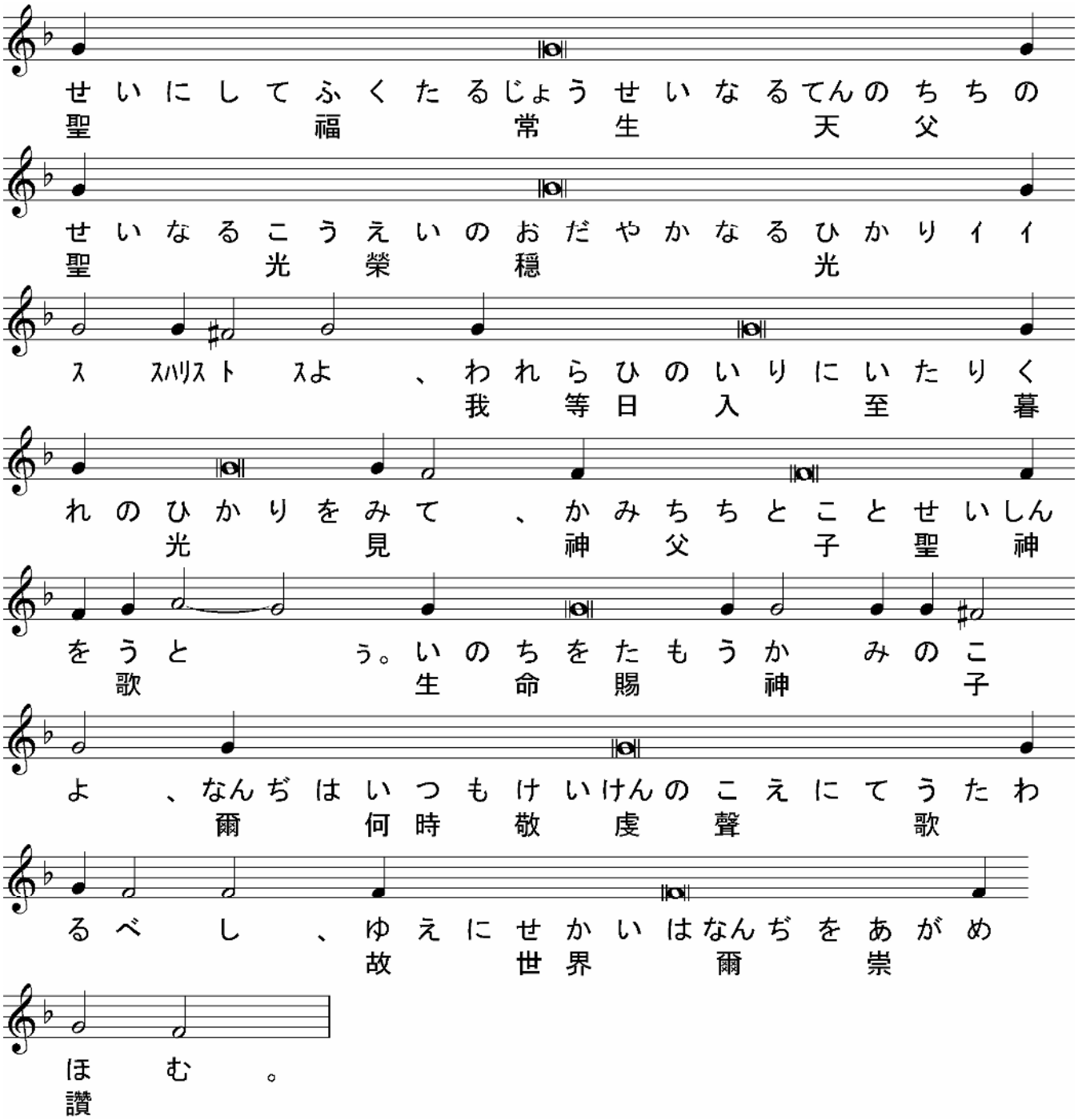
誦経② 恥を得ざる轉達者よ、慶べ、至善なる生神女よ、慶べ、世界の蠲潔よ、慶べ、悲しむ者の喜、颶風に遭う者の停泊よ、慶べ、凡そ危難に在る者の扶助者よ、慶べ。童貞女・純潔なる女宰よ、我をも悉くの苦難より護り給え。

【　ドグマチカ（生神女讃詞）第２調　】



司祭） 睿智、粛みて立て、
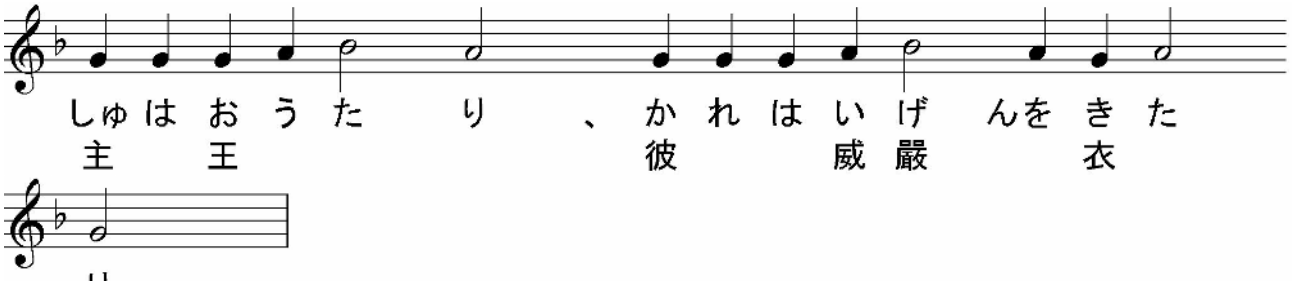
【　聖ソフロニイの祝文　】
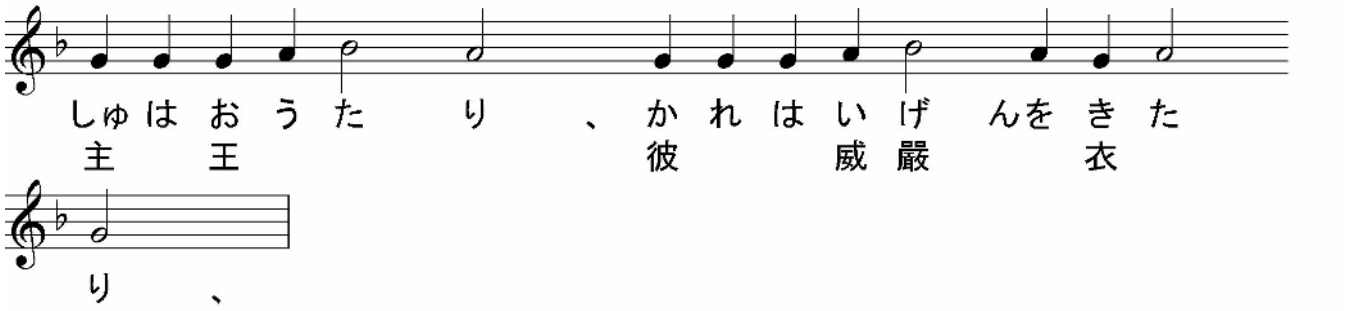


【　大プロキメン　第６調　】

司祭)　謹(つつし)みて聽(き)くべし、衆人(しゅうじん)に平安(へいあん)、睿智(えいち)、
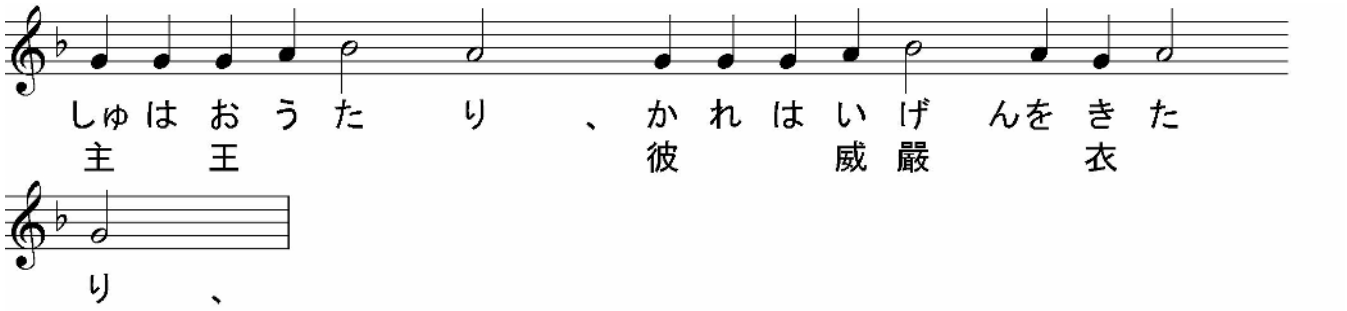
誦經③ 提綱(プロキメン)、主(しゅ)は王(おう)たり、彼(かれ)は威嚴(いげん)を衣(き)たり、
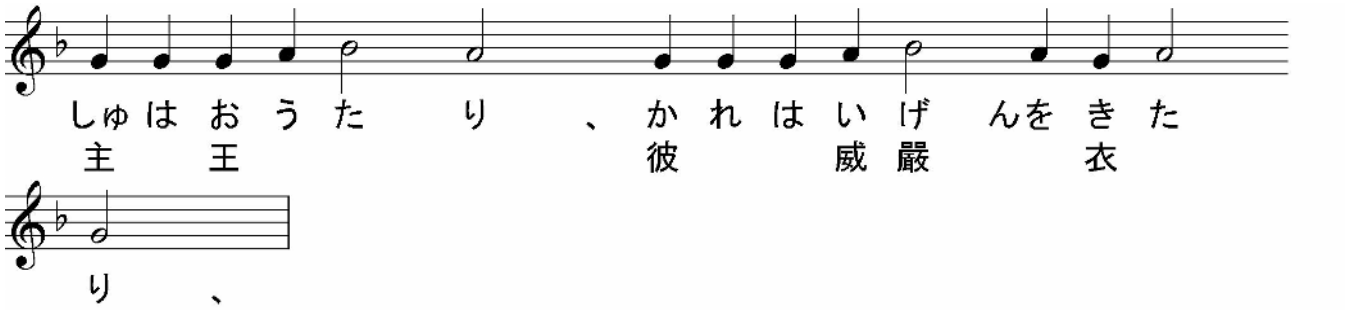


誦經③主(しゅ)は能力(のうりょく)を衣(き)、又之(またこれ)を帯(おび)にせり、
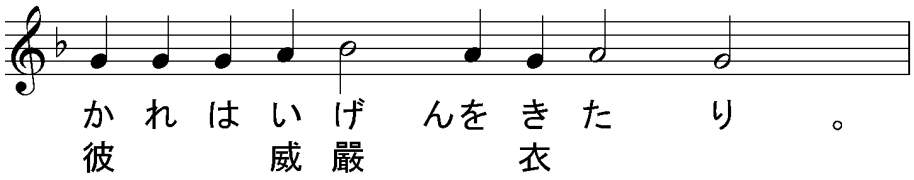


誦經③故(ゆえ)に世界(せかい)は堅固(けんご)にして動(うご)かざらん、



誦經③主(しゅ)よ、聖徳(せいとく)は爾(なんぢ)の家(いえ)に屬(ぞく)して永遠(えいえん)に至(いた)らん、
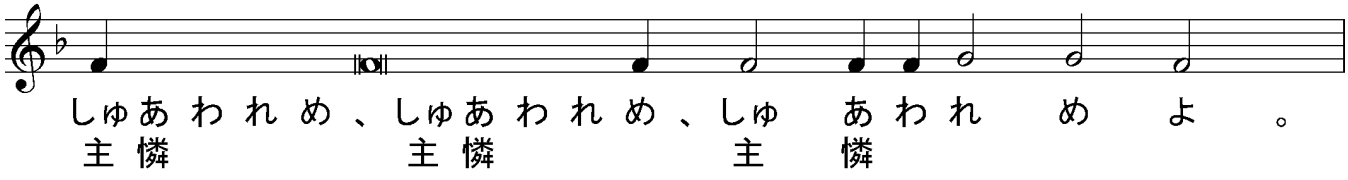


誦經③主(しゅ)は王(おう)たり、

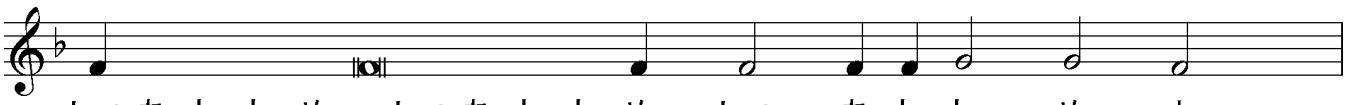


【　重聯禱　】
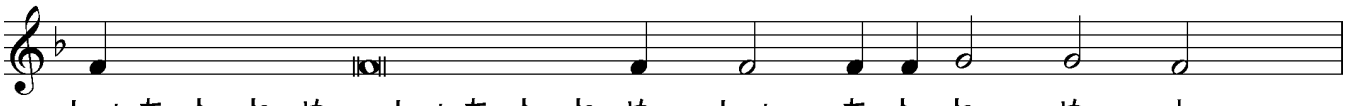
司祭) 神(かみ)よ、爾(なんぢ)の大(おおい)なる憐(あわれみ)に因(よ)りて我等(われら)を憐(あわれ)めよ、爾(なんぢ)に禱(いの)る、聆(き)き納(い)れて憐(あわれ)めよ、
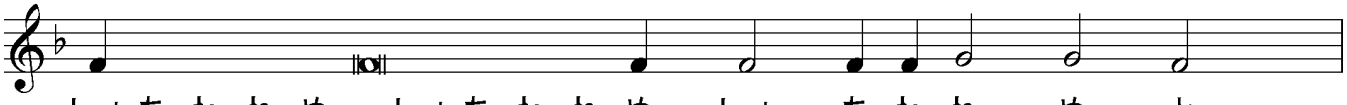


司祭) 又我國(またわがくに)の天皇及(てんのうおよ)び國(くに)を司(つかさど)る者(もの)の爲(ため)に禱(いの)る、
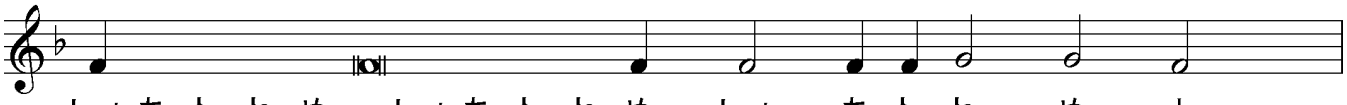


司祭) 又 教 曾を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主 教 セラフィム、及びハリストスに 於ける 悉 くの我等の兄 弟の爲に禱る、
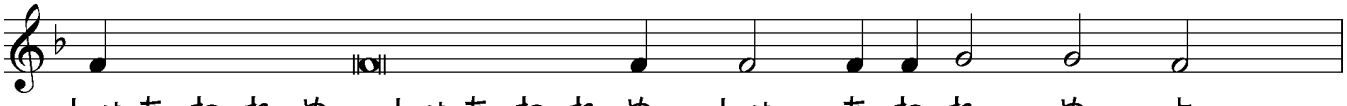


司祭) 又 恒に記憶せらるる福たる此の聖 堂の建 立 者、及び既に寝りし 悉 くの父祖兄 弟、此の 處 と諸 方とに 葬 られたる正 教 の者の爲に禱る、
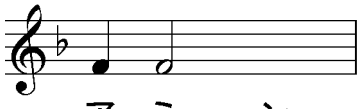


司祭) 又 神の諸 僕此の聖 堂の兄 弟に、慈憐、生 命、平 安、壮 健、 救 贖 、眷顧、 寛 宥、及び諸 罪の 赦 を賜わんが爲に禱る、



司祭) 又此の聖 堂に物を 獻 り、善 業 を 行 い、之に労し、之に歌い、及び此に立ち て 爾 の 大 にして 豐 なる 憐 を仰ぎ望む者の爲に禱る、



司祭) 蓋 爾 は慈憐にして人を愛する神なり、我等光 榮を 爾 父と子と聖 神に獻ず、 今も何時も世世に、
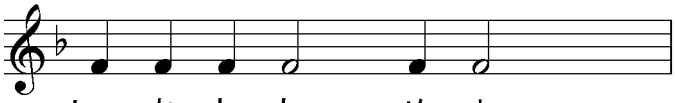


誦經④主よ、我等を守り罪なくして此の晩を度らせ給え、主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ爾の名は世世に尊み歌わる、アミン。

主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え、主よ、爾は崇め讃められる、爾の誡を我に訓え給え、主宰よ、爾は崇め讃められる、爾の誡を我に悟らせ給え、聖なる者よ、爾は崇め讃められる、爾の誡にて我を照し給え。

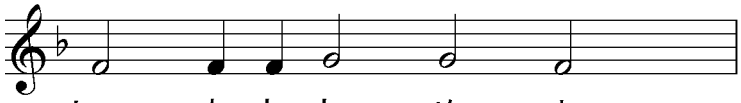
主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ、讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

【　增聯禱　】
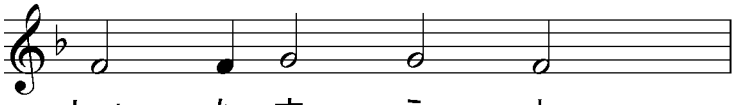
司祭) 我等主の前に吾が晩の禱を增し加えん、
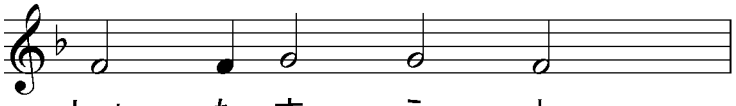


司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、
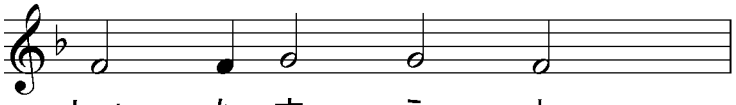


司祭) 此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、
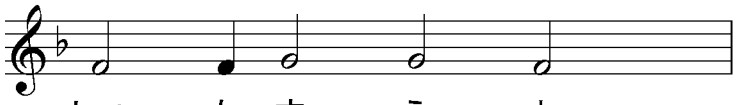


司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、
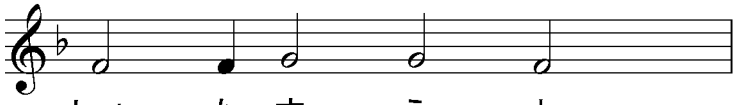


司祭) 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、
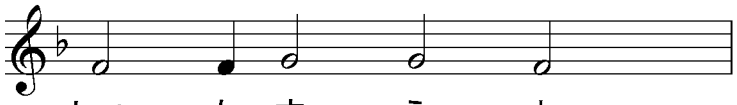


司祭) 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



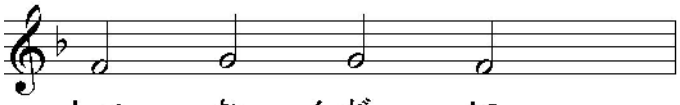
司祭）我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、
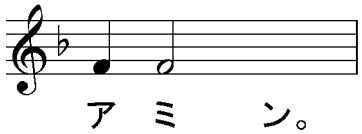


司祭）我等の生命の終がハリスティアニンに適い、疾なく、恥なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、
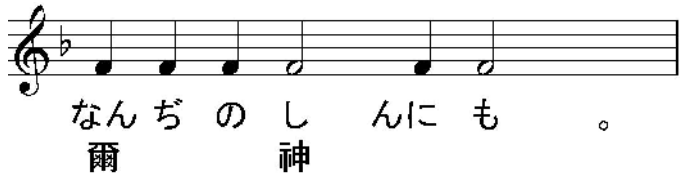


司祭）至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



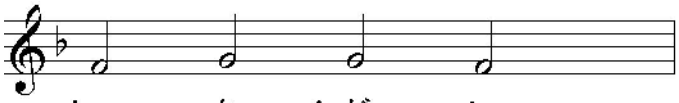
司祭）蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



司祭）衆人に平安、
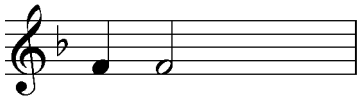


司祭）我等の首を主に屈めん



司祭)　(默經　主我が神、天を屈めて人類を救うが爲に降りし者よ、爾の諸僕と爾の嗣業とを顧み給え、蓋し爾の諸僕は、爾を畏るべくして人を愛する審判者に首を屈め、己の頸を伏し、人の助を俟たず、乃ち爾の救を仰ぐ、求む彼等を恒に護り、彼等を此の夕にも、次て至る夜にも、凡の敵凡の惡魔の姦謀と虛しき思慮と悪しき意念とより護り給え、)

願わくは爾父と子と聖神の國の權柄は讃揚讃榮せられん、今も何時も世世に、



【　挿句讃頌　第2調　】

誦經⑤ハリストス救世主よ、爾の復活は全世界を照せり、爾は己の造物を召し給えり。全能の主よ、光榮は爾に歸す。

誦經⑥主は王たり、彼は威厳を衣たり。

誦經⑤救世主よ、爾は木にて木に縁る詛を空しくし、爾の葬にて死の權を滅し、爾の復活にて吾が族を照し給えり。故に我等爾に呼ぶ、生命を施すハリストス我が神よ、光榮は爾に歸す。

誦經⑥故に世界は堅固にして動かざらん。

誦經⑤ハリストスよ、爾は十字架に釘せらるる者と顯れて、造物の美しきを變易せり。惟兵卒は殘忍にして戈を以て爾の脅を刺し、エウレイ人は爾の權を知らずして墓を封印せんことを求めたり。慈憐に由りて葬を受け、三日目に復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

誦經⑥主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

誦經⑤生命を施すハリストスよ、爾は死に屬する者の爲に甘じて苦を受けて、有能者として地獄に降り、彼處に爾の降臨を待つ者を強き者の手より奪いて、地獄に易えて樂園に住むを賜えり。故に爾の三日目の復活を讃揚する我等にも諸罪の潔淨と大なる憐とを與え給え。

誦經⑥光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

誦經⑤嗚呼新なる奇跡、古の悉くの奇跡に勝る者や、誰か夫なき母が萬物を有つ主を生みて、其手に抱くを知りたる、此の産は神の旨なり。至りて潔き者よ、爾が嬰児として己の手に抱きし主の前に母の勇を以て、我等爾を尊む者の靈を憐みて救わんことを常に祈り給え。

誦經⑥主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝かしむ。蓋我が目は爾の救を見たり。爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人を照すの光、及び爾の民イズライリの榮なり。

誦經⑤聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。
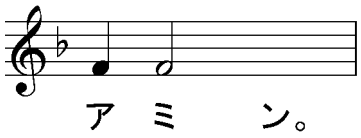
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。
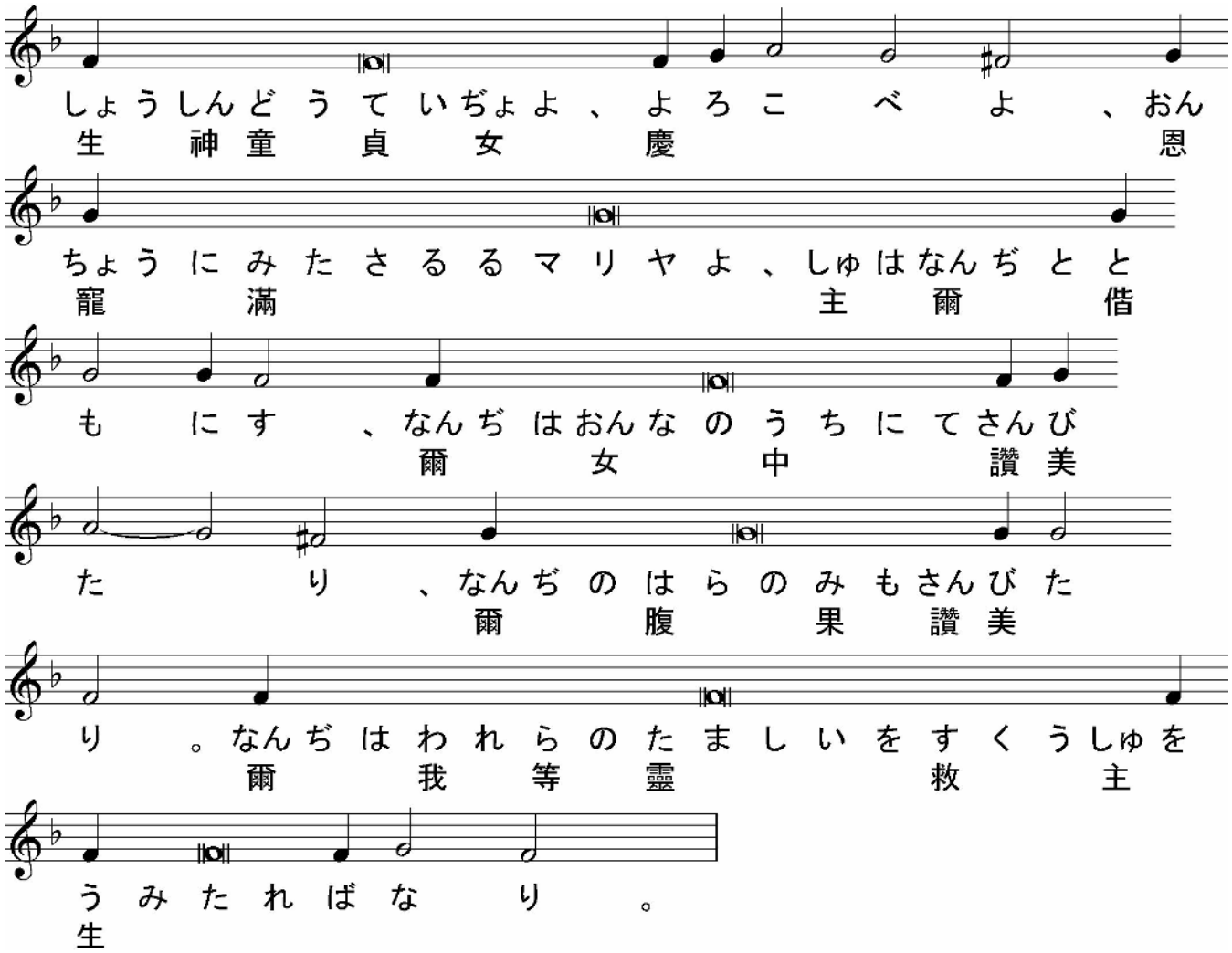
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の国は來り、爾の旨は天に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救い給え。
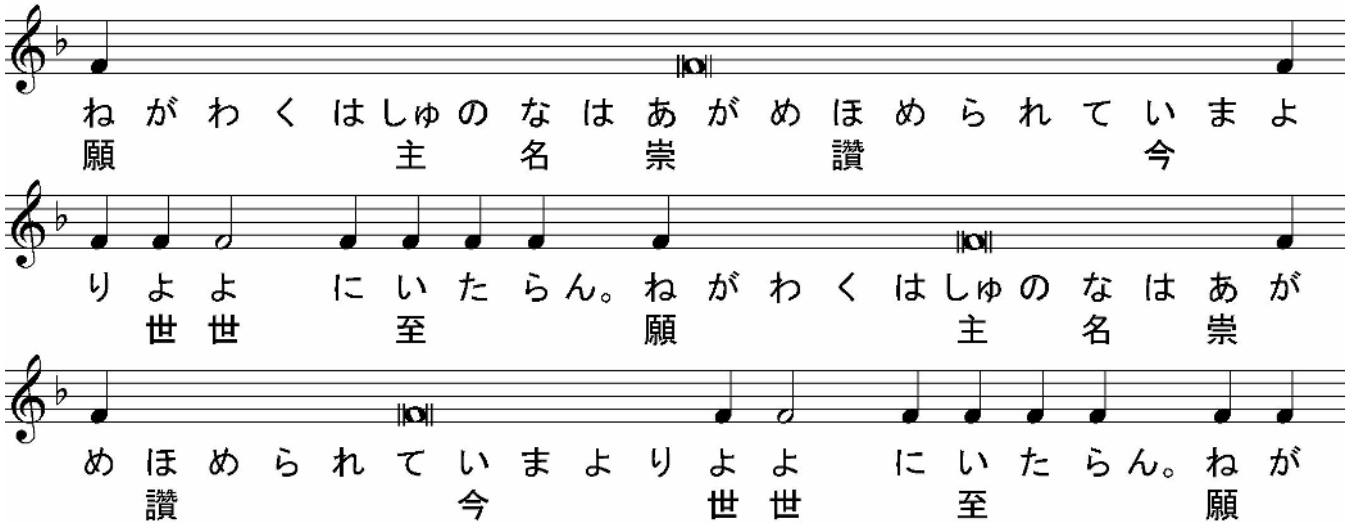
司祭) 蓋 國と權能と光榮は爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。
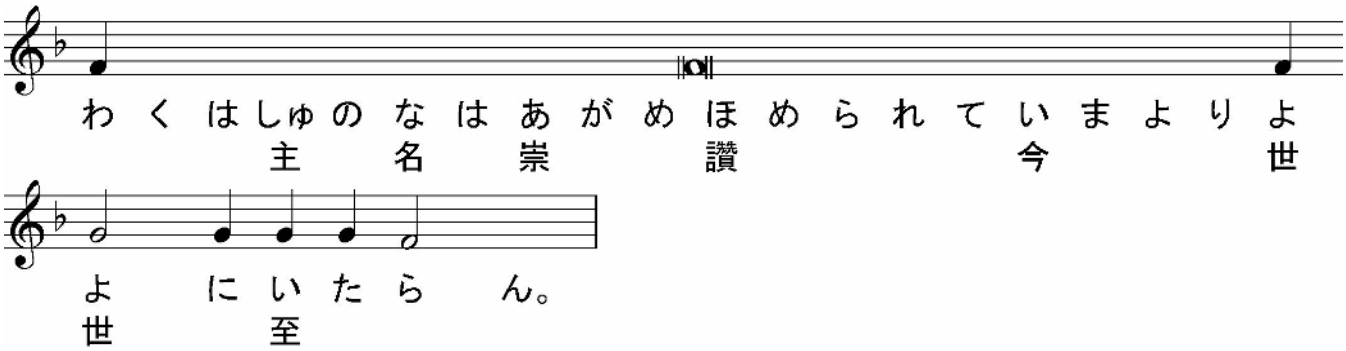


【 生神女の發放讃詞 第４調 】

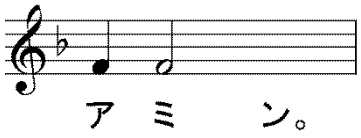


【 大晩課の終結 】





司祭）願くは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も世世に、



【　早課　六段聖詠　】

誦經⑦至高には光榮神に歸し、地には平安降り、人に惠は臨めり。

至高には光榮神に歸し、地には平安降り、人に惠は臨めり。

至高には光榮神に歸し、地には平安降り、人に惠は臨めり。

主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讃美を揚げんとす。

主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讃美を揚げんとす。

【　第３聖詠　ダヴィドの詠、其子アヴサロムを避くる時に作りし所なり。　】

主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が靈を指して、彼は神より救を得ずと云う。然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、我の榮なり、爾は我が首を擧ぐ、我が聲を以て主に呼ぶに、主は其聖山より我に聽き給う。我臥し、寢ね、又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。環りて我を攻むる萬民は、我之を懼れざらん。主よ、起きよ、吾が神よ、我を救い給え。蓋爾は我が諸敵の頬を批ち、惡人の齒を折けり。救は主に依る、爾の降福は爾の民に在り。

我臥し、寢ね、又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。

【　第３７聖詠　ダヴィドの詠。（「スボタ」の）記念の爲に此を作れり。　】

主よ、爾の憤を以て我を責むる毋れ、爾の怒を以て我を罰する毋れ、蓋爾の矢は我に刺さり、爾の手は重く我に加わる。爾の怒に依りて我が肉に傷まざる所なく、我の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、重任の如く我を圧す、我の無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂いて行く、蓋我が腰は熱に惱まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰えて痛く憊れ、我が心の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が悉くの願は爾の前に在り、我が歎息は爾に隱るるなし。我が心は戰い栗き、我が力は我より脱け、我が目の光も已に我にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を覓むる者は網を設け、我を害わんと欲する者は

我が淪亡のことを言いて、毎日惡しき謀を圖む、然れども我は聾の如く聽かず、唖の如く己の口を啓かず、是に於いて我は聞くなく、其口に答うる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を恃む、主我が神よ、爾聽き給わん。我言えり、願わくは敵は我に勝たざらん、我が足の跌く時、彼等は我に向いて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、我の憂は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の爲に甚く哀む。我が敵は生きて愈強く、故なくして我を疾む者は益多し、惡を以て我の善に報ゆる者は、我が善に從うに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遺つる毋れ、我に遠ざかる毋れ、主我の救主よ、速に來りて我を救い給え。主我が神よ、我を遺つる毋れ、我に遠ざかる毋れ、主我の救主よ、速に來りて我を救い給え。

【 第６２聖詠　ダヴィドの詠。イゥデヤの野に在りて此を作れり。 】

神よ、爾は我の神なり。我暁より爾を尋ぬ、我が靈は渇きて爾を望み、我が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕う、爾の能力と爾の光榮とを見ん爲なり、我が曾て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に愈る。我が口爾を讃美せん。是くの如く我生ける時爾を崇め讃め、爾の名に依りて我が手を擧げん。我が靈の飽かさるること脂油を以てするが如く、我が口歓の聲にて爾を讃美す、榻にて爾を記憶し、夜更に爾を思う時に在り。蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に附き、爾の右の手は我を扶く。彼の我が靈を害わんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃に攫りて、狐の獲物とならん。惟王は神の爲に樂まん、凡そ彼を以て誓う者は譽を得ん、蓋謊を言う者の口は塞がれんとす。

夜更に爾を思う、蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に附き、爾の右の手は我を扶く。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す。

誦経⑧主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

【　第８７聖詠　歌。コレイの諸子の詠。伶長に「マハラフ」を以て歌わしむ。エズラり裔エマンの教訓。】

主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ、願わくは我が禱は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ、蓋我が靈は苦難に飽き、我が生命は地獄に近づけり。我は墓に入る者と等しくなり、力なき人の如くなれり、死人の中に投げられて、猶殺されて柩に臥し、爾に復記憶せられず、爾の手より絶たれし者の如し。爾我を深き坎に、闇冥に、淵に置けり。爾の憤は重く我に加わり、爾の波を傾けて我を擊てり。爾我が識る所の者を遠ざけ、我を彼等の惡むべき者となせり、我閉されて出づるを得ず。我が目は愁苦に因りて痛く疲れたり、主よ、我終日爾を呼び、手を伸べて爾に向えり。爾豈に死せし者に奇跡を施さんや、死せし者豈に起ちて爾を讃揚せんや、爾の憐は墓の中に、爾の眞は腐敗の地に、豈に傳えられんや、爾の奇跡は闇冥に、爾の義は遺忘の地に、豈に識られんや。主よ、我爾に呼ぶ、我の禱は晨に爾の前に在り。主よ、爾は何爲れぞ我が靈を棄て、爾の顔を我に隱し給う。我少きより禍に遭い、幾ど消え亡せんとし、爾の恐嚇を受けて我が疲は極れり。爾の憤は我を度り、爾の恐嚇は我を砕けり、毎日水の如くに我を環り、齊しく集りて我を圍む。爾は我が友と親しき者とを我より遠ざけたり、我が識る所の者は見えず。

主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ、願わくは我が禱は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ。

【　第１０２聖詠　ダヴィドの詠。　】

我が靈よ、主を讃め揚げよ、我が中心よ、其聖なる名を讃め揚げよ。我が靈よ、主を讃め揚げよ、彼が悉くの恩を忘るる毋れ。彼は爾が諸の不法を赦し、爾が諸の疾を療す、爾の生命を墓より救い、憐と惠とを爾に冠らせ、幸福を爾の望に飽かしむ、爾が若復さるること鷲の如し。主は凡そ迫害せらるる者の爲に義と審判とを行う。彼は己の途をモイセイに示し、己の作爲をイズライリの諸子に示せり。主は宏慈にして矜恤、寛忍にして鴻恩なり、怒りて終あり、憤を永く懷かず。我が不法に因りて我等に行わず、我が罪に因りて我等に報いず、蓋天の地より高きが如く、斯く主を畏るる者に於ける其憐は大なり、東の西より遠きが如く、斯く主は我が不法を我等より遠ざけたり、父の其子を憐むが如く、斯く主は彼を畏るる者を憐む。蓋彼は我が何より造られしを知り、我等の塵なるを記念す。人の日は草の如く、其の榮ゆること田の華の如し。風之を過ぐれば無に歸し、其有りし處も亦之を識らず。唯主の憐は彼を畏るる者に世より世に至り、彼の義は其約を守り、其誡を懷いて、之を行う子子孫孫に及ばん。主は其寶座を天に建て、其國は萬物を統べ治む。主の諸の天使、能力を具え、其の聲に遵いて其言を行う者よ、主を讃め揚げよ。主の悉くの軍、其旨を行う役者よ、主を讃め揚げよ。凡そ主の悉くの造工よ、其一切治むる處に於て主を讃め揚げよ。我が靈よ、主を讃め揚げよ。

其一切治むる處に於て、我が靈よ、主を讃め揚げよ。

【　第１４２聖詠　ダヴィドの詠。（其子アヴサロムに逐われし時に此を作れり。）　】

主よ、我が禱を聆き、爾の眞實に依りて我が願に耳を傾けよ、爾の義に依りて我に聽き給え。爾の僕と訟を爲す毋れ、蓋凡そ生命ある者は、一も爾の前に義とせられざらん。敵は我が靈を逐い、我が生命を地に蹂り、我を久しく死せし者の如く暗に居らしむ、我が靈は我の衷に悶え、我が心は我の衷に曠しきが如し。我

古の日を想い、凡そ爾の行いしことを考え、爾が手の工作を計る。我が手を伸べて爾に向かい、我が靈は渇ける地の如く爾を慕う。主よ、速に我に聽き給え、我が靈は衰えたり、爾の顔を我に隱す毋れ、然らずば我は墓に入る者の如くならん。我に夙に爾の憐を聽かしめ給え、我爾を賴めばなり。主よ、我に行くべき途を示し給え、我が靈を爾に擧ぐればなり。主よ、我を我が敵より救い給え、我爾に趨り附く。我に爾の旨を行うを教え給え、爾は我の神なればなり、願わくは爾の善なる神は我を義の地に導かん。主よ、爾の名に依りて我を生かし給え、爾の義に依りて我が靈を苦難より引き出し給え、爾の憐を以て我が敵を滅し、凡そ我が靈を攻むる者を夷げ給え、我は爾の僕なればなり。

主よ、爾の義に依りて我に聽き給え。爾の僕と訟を爲す毋れ、主よ、爾の義に依りて我に聽き給え。爾の僕と訟を爲す毋れ、願わくは爾の善なる神は我を義の地に導かん。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

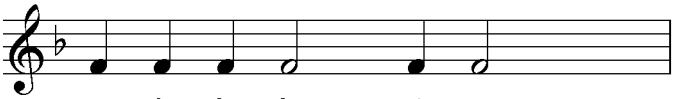
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す。
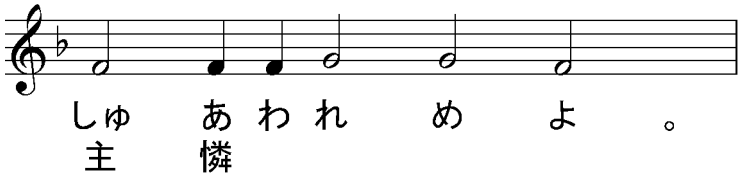
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す。

【 大聯禱 】

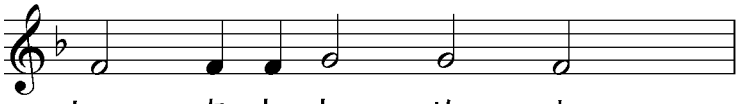
司祭) 我等安和にして主に禱らん、



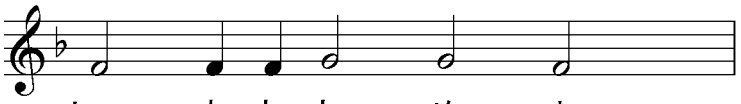
司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、
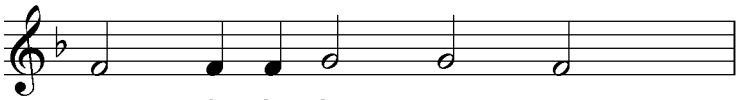


司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、
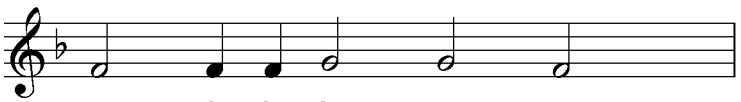


司祭) 此の聖堂、及び信と愼と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、



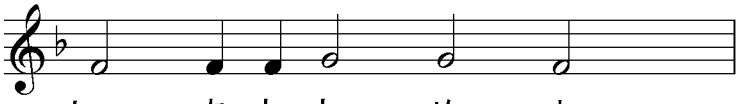
司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



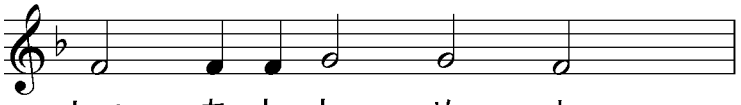
司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



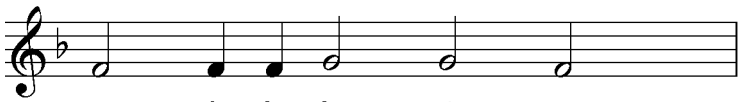
司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



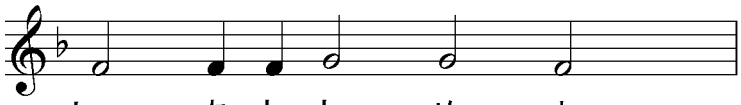
司祭) 氣候順和、五穀豐穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



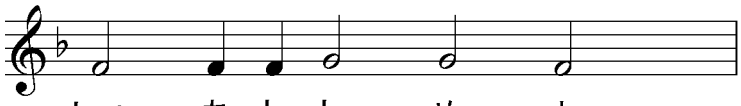
司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び彼等の救の爲に主に禱らん、
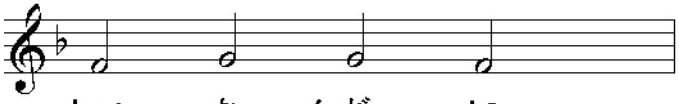


司祭) 我等(われら) 諸(もろもろ) の憂愁(うれい)と忿怒(いかり)と危難(あやうき)とを免(まぬが)るるが爲(ため)に主(しゅ)に禱(いの)らん、
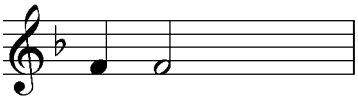


司祭) 神(かみ)よ、爾(なんぢ)の恩寵(おんちょう)を以(もつ)て、我等(われら)を佑(たす)け救(すく)い憐(あわれ)み護(まも)れよ、



司祭) 至聖至潔(しせいしけつ)にして至(いた)りて讃美(さんび)たる我等(われら)の光榮(こうえい)の女宰(ぢょさい)、生神女(しょうしんぢょ)、永貞童女(えいていどうぢょ)マリヤと、諸聖人(しょせいじん)を記憶(きおく)して、我等己(われらおのれ)の身及(みおよ)び互(たがい)に各(おのおの)の身(み)を以(もつ)て、並(ならび)に悉(ことごと)くの我等(われら)の生命(いのち)を以(もつ)て、ハリストス神(かみ)に委託(いたく)せん、
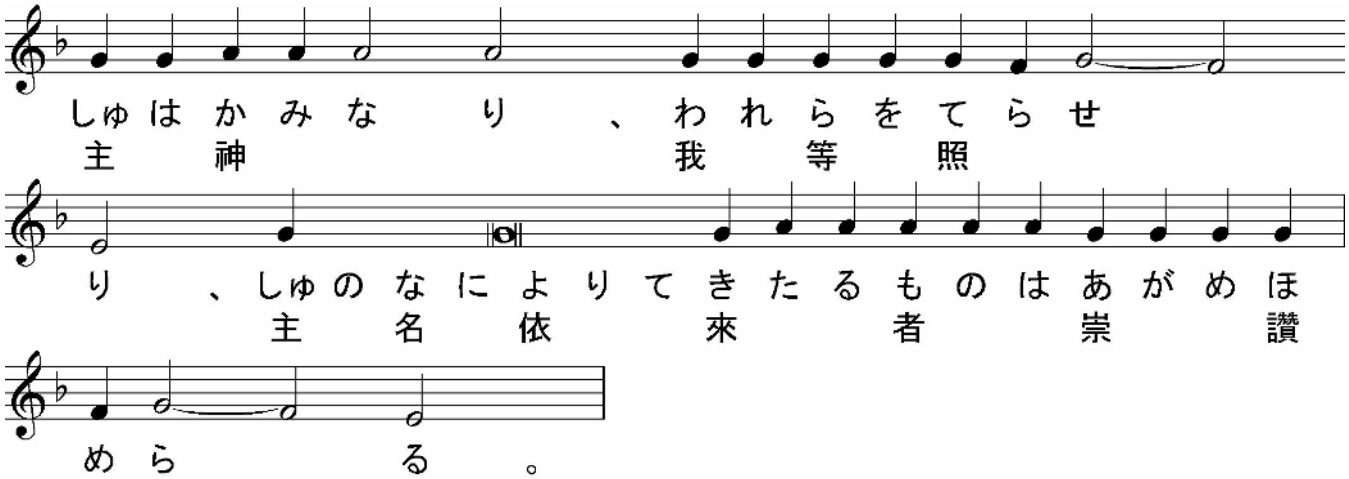


司祭) 蓋(けだし)、凡(およ)そ光榮尊貴伏拜(こうえいそんきふくはい)は爾(なんぢ)父と子と聖神(せいしん)に歸(き)す、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、
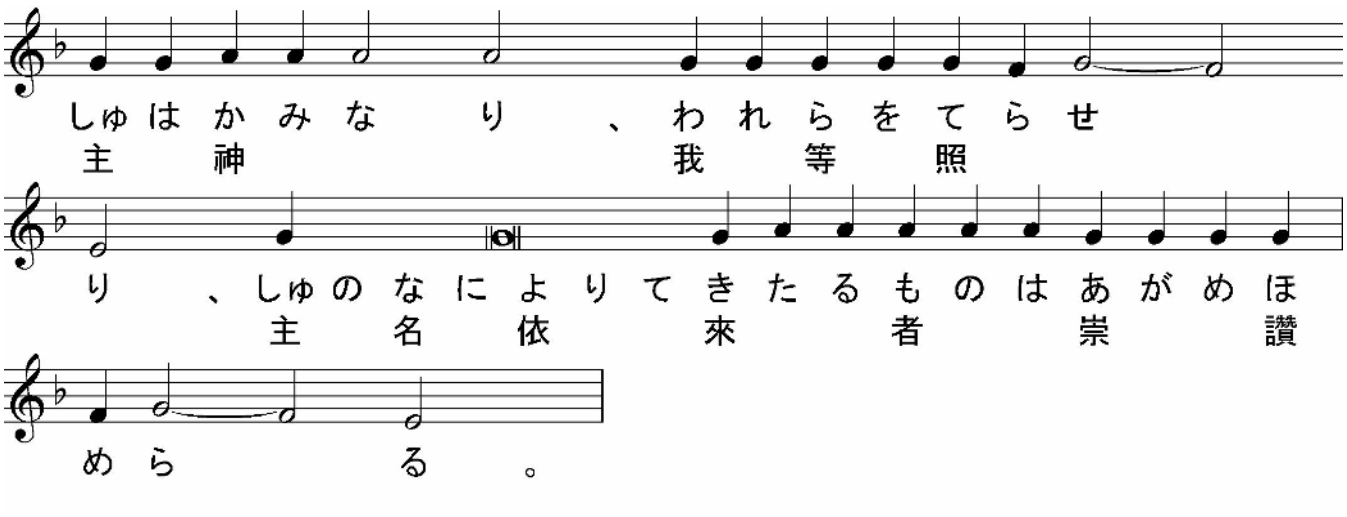


【 第１１７聖詠（主は神なり我等を照らせり） 第２調 】
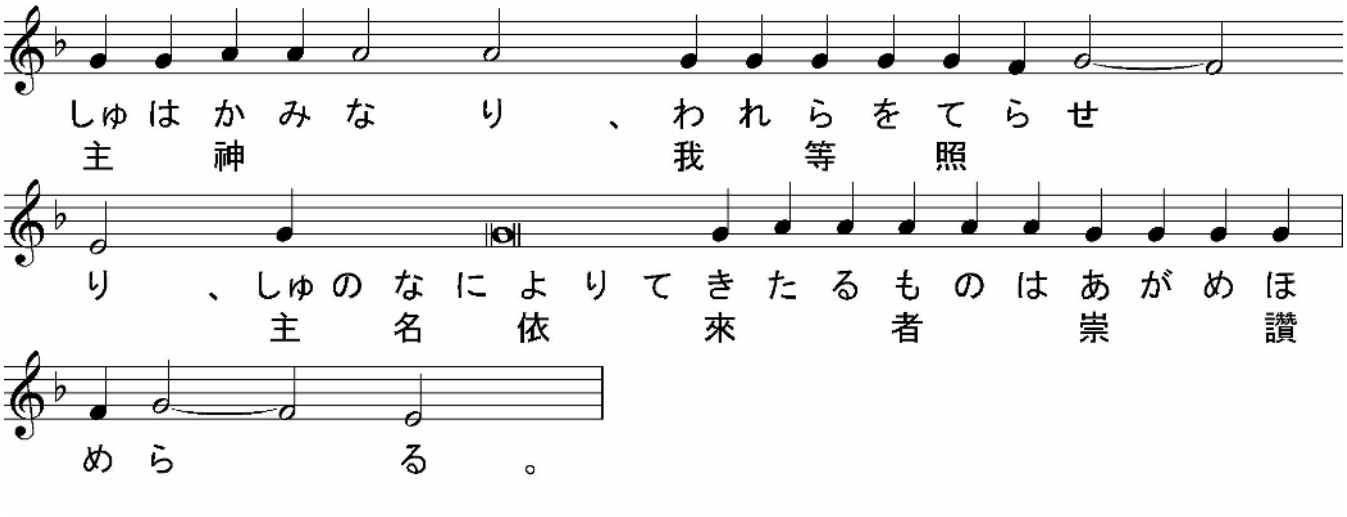
司祭) 主(しゅ)は神(かみ)なり我等(われら)を照(てら)せり、主(しゅ)の名(な)に依(より)て來(きた)る者(もの)は崇(あが)め讃(ほ)めらる、
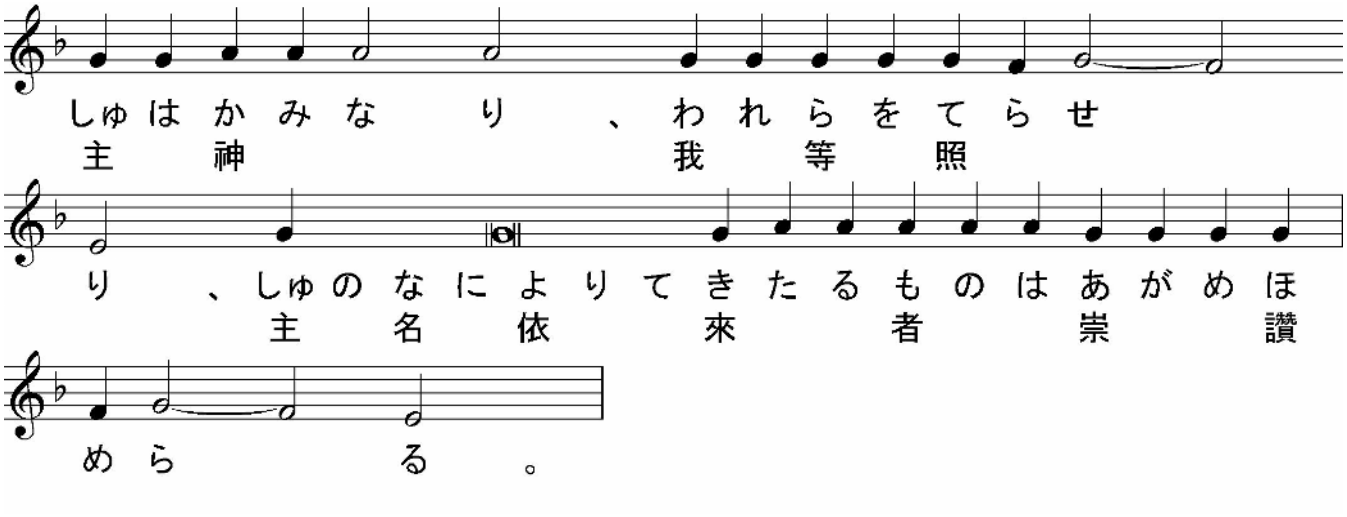


司祭) 主(しゅ)を尊(とおと)み讃(ほ)めよ、彼(かれ)は仁慈(じんじ)にして其(そのあわれみ)憐(よよ)は世世にあればなり、



司祭) 彼等我(かれらわれ)を圍(かこ)み我(われ)を環(めぐ)れども、我主(われしゅ)の名(な)を以(もっ)て之(これ)を敗(やぶ)れり、

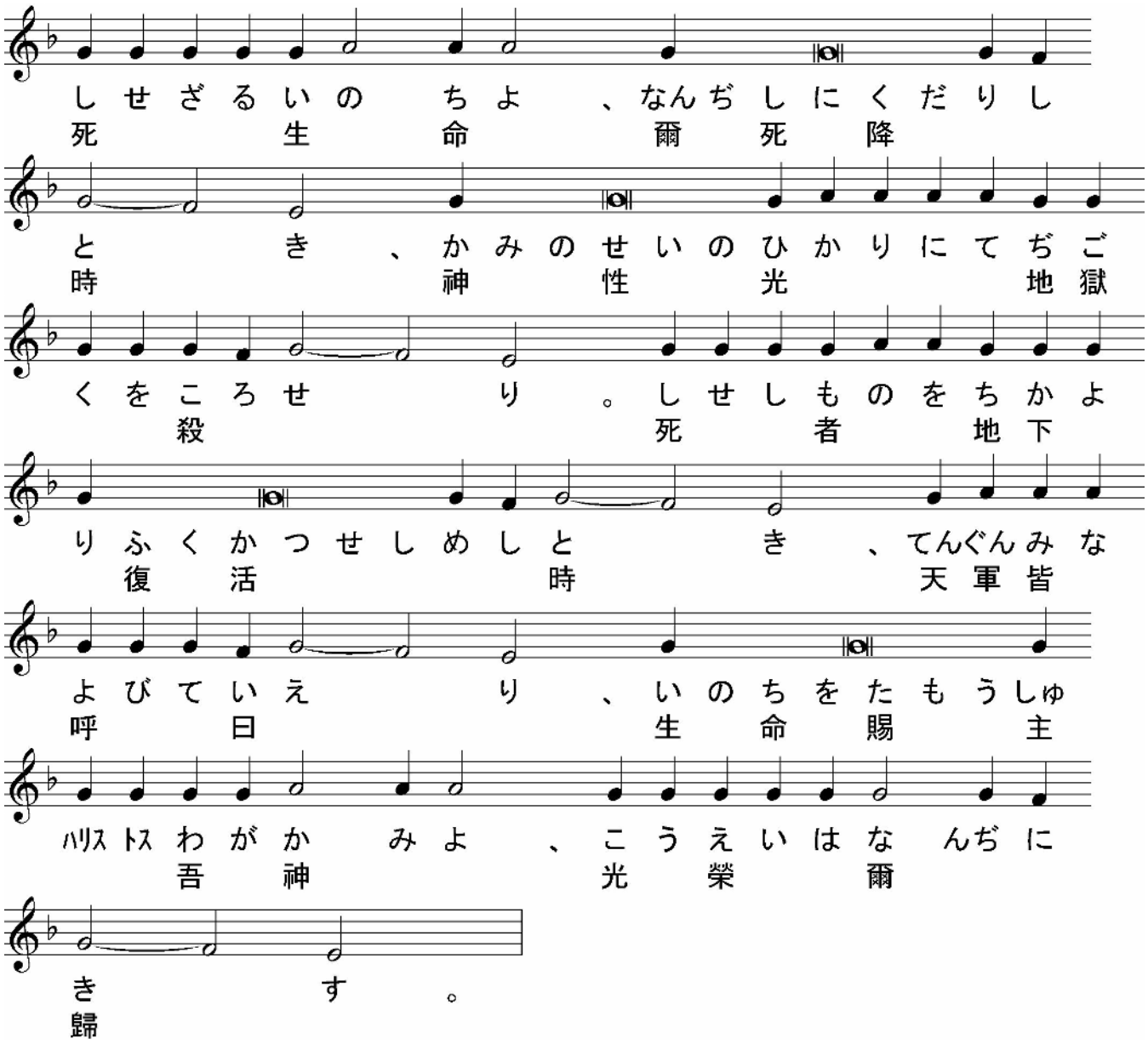


司祭) 我(われし)死せず、猶(なおい)生きて主(しゅ)の行(おこな)う所(ところ)を傅(つた)えん、
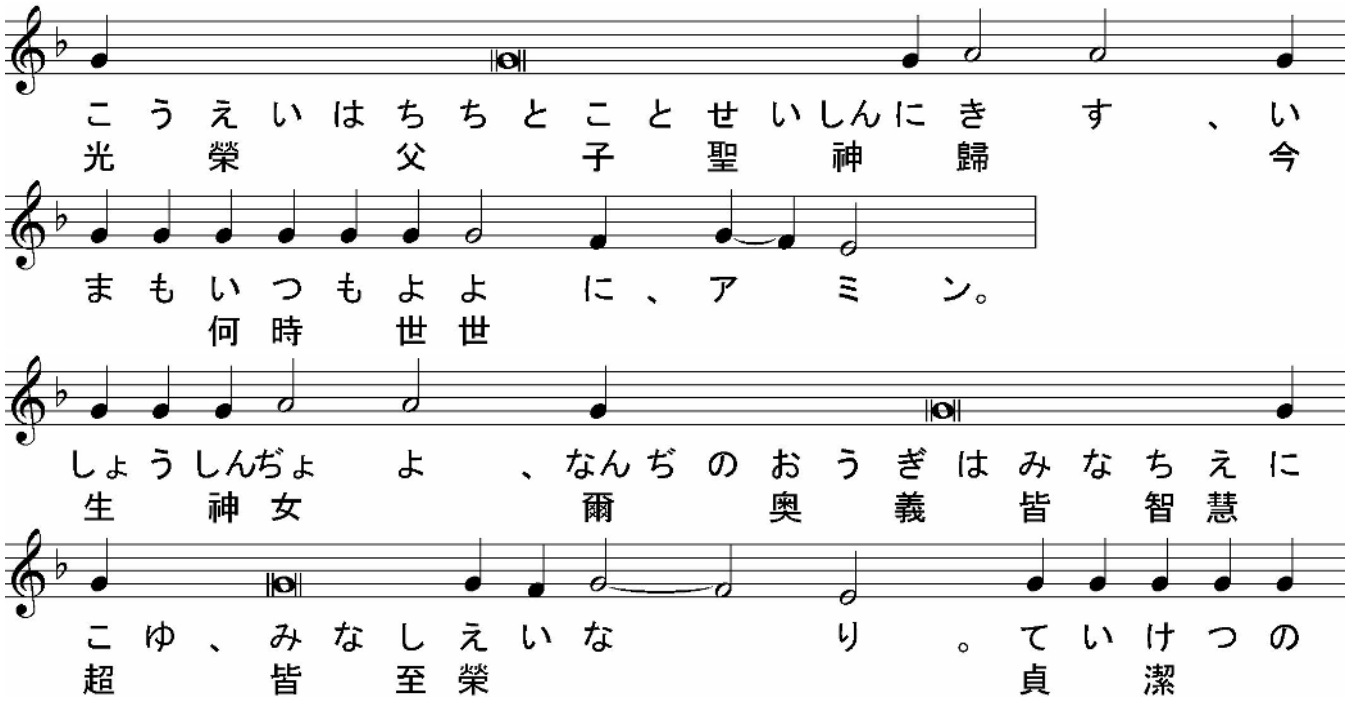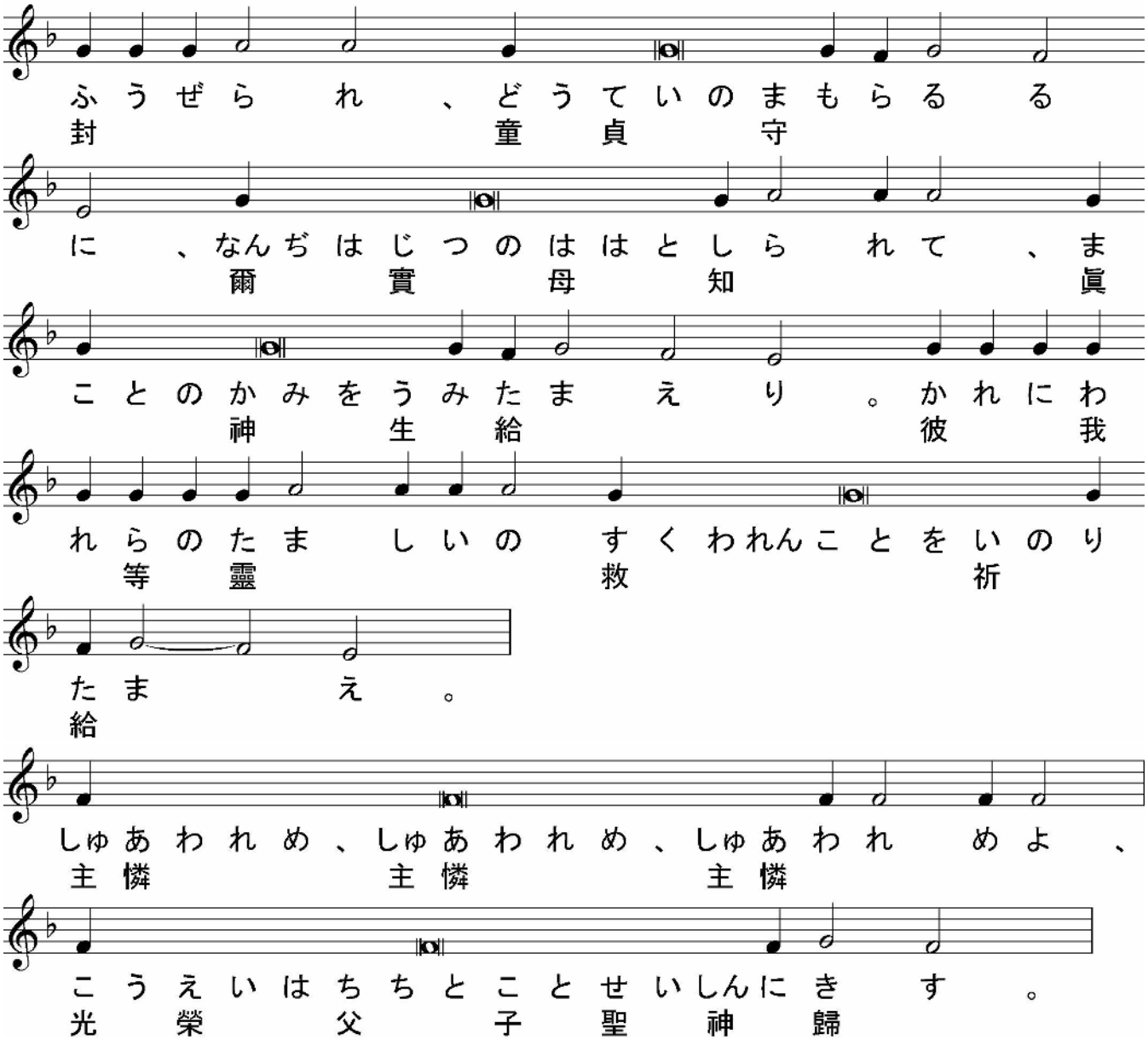


司祭) 工師(こうし)が棄(す)てし所(ところ)の石は屋隅の首石となれり、是(これしゅ)主のなす所(ところ)にして我等(われら)の目(め)に奇異(きい)なりとす、

【　復活のトロパリ　第２調　】


しせざるいの ちよ 、なんぢしにくだりし
死 生 命 爾 死 降
と き 、かみのせいのひかりにてぢご
時 神 性 光 地 獄
くをころせ り 。しせしものをちかよ
殺 死 者 地 下
りふくかつせしめしと き 、てんぐんみな
復 活 時 天 軍 皆
よびていえ り 、いのちをたもうしゅ
呼 曰 生 命 賜 主
ハリストスわがかみよ 、こういはなんぢに
吾 神 光 榮 爾
き す 。
歸

【　生神女讃詞　第２調　】


こういはちちとことせいしんにき す 、い
光 榮 父 子 聖 神 歸 今
まもいつもよよ に、ア ミ ン。
何 時 世 世
しょうしんぢょ よ 、なんぢのおうぎはみなちえに
生 神 女 爾 奥 義 皆 智 慧
こゆ、みなしえいな り 。ていけつの
超 皆 至 榮 貞 潔



【　第２カフィズマ　※省略して第 14 聖詠のみ　】

誦經⑨今も何時も世世に、アミン。

【　第１４聖詠　ダヴィドの詠　】

主よ、孰か爾の住所に居るを得る、孰か爾の聖山に在るを得る。玷なきを行い、義をなし、其心に眞實を言う者、其舌にて讒せず、其親しき者に惡を爲さず、其隣を謗る言を受けず、邪僻なる者を藐んじ、主を畏るる者を尊み、誓を發すれば惡人に於てすと雖變えず、銀を貸して利を取らず、賂を受けて辜なき人を責むることをせざる者なり。此くの如く行う者は永く撼かざらん。

【　光榮讚詞　】

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。
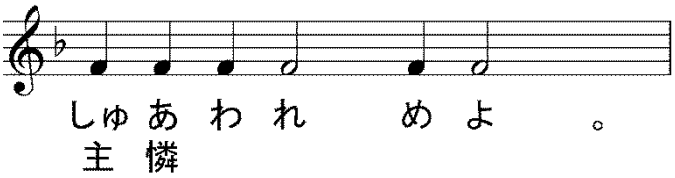
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神(かみ)よ、光榮(こうえい)は爾(なんぢ)に歸(き)す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神(かみ)よ、光榮(こうえい)は爾(なんぢ)に歸(き)す、

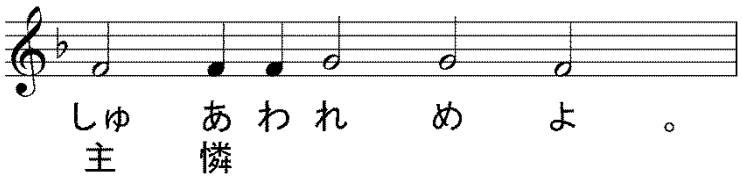
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神(かみ)よ、光榮(こうえい)は爾(なんぢ)に歸(き)す。

【　小聯禱　】

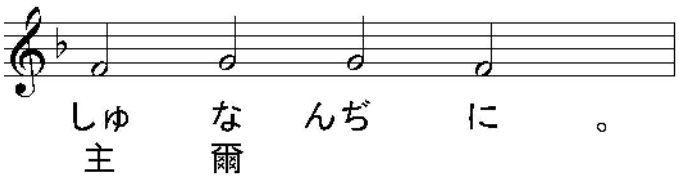
司祭) 我等復(われらまたまた)又安和(あんわ)にして主(しゅ)に禱(いの)らん、
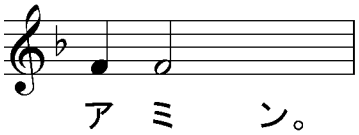


司祭) 神(かみ)よ、爾(なんぢ)の恩寵(おんちょう)を以(もつ)て、我等(われら)を佑(たす)け救(すく)い憐(あわれ)み護(まも)れよ、



司祭) 至聖至潔(しせいしけつ)にして至(いた)りて讃美(さんび)たる我等(われら)の光榮(こうえい)の女宰(ぢょさい)、生神女(しょうしんぢょ)、永貞童女(えいていどうぢょ)マリヤと、諸聖人(しょせいじん)を記憶(きおく)して、我等己(われらおのれ)の身及(みおよ)び互(たがい)に各(おのおの)の身(み)を以(もつ)て、並(ならび)に悉(ことごと)くの我等(われら)の生命(いのち)を以(もつ)て、ハリストス神(かみ)に委託(いたく)せん、



司祭) 蓋權柄及(けだしけんぺいおよ)び國と權能と光榮は爾父と子と聖神(せいしん)に歸(き)す、今も何時(いつ)も世世(よよ)に、



【　主日の坐誦讃詞(セダレン)　第２調　】

誦經⑩ 尊(とうと)きイオシフは爾(なんぢ)の潔(いさぎよ)き身(み)を木より下(おろ)し、浄(きよ)き布(ぬの)に裹(つつ)み、香料(こうりょう)にて覆(おお)い、新(あらた)なる墓(はか)に蔵(おさ)めたり。然(しか)れども主(しゅ)よ、爾(なんぢ)は三日目に復活(みつかめふくかつ)して、世界(せかい)に大(おおい)なる憐(あわれみ)を賜(たま)えり。

句) 主我(しゅわ)が神(かみ)よ、起(お)きて爾(なんぢ)の手を擧(あ)げよ、苦(くる)しめらるる者(もの)を永(なが)く忘(わす)るる毋(なか)れ。

天使は香料を攜うる女に墓の側に現れて呼べり、香料は死者に適う、ハリストスは朽壞に與らざる者なり、乃ち籲べ、主は復活して、世界に大なる憐を賜えり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

【 生神女讃詞 】

生神童貞女よ、爾は至りて讃美たる者なり、我等爾を歌う、蓋爾の子の十字架にて地獄は滅され、死は殺され、我等殺されし者は興きて生命を得、復古の樂なる樂園を受けたり。故に我等ハリストス吾が神に感謝して、其權能ありて獨大仁慈なるを讃榮す。

【 第３カフィズマ ※省略して第23聖詠のみ 】

誦經⑪主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

【 第２３聖詠 ダヴィドの詠。（七日の首日） 】

地と之に滿つる者、世界と凡そ之に居る者は、皆主に屬す。蓋彼は之を海に基け、之を河に固めたり。孰か能く主の山に陟る、孰か能く其聖所に立つ。唯罪なき手、潔き心ある者、嘗て己の靈を以て虛しく矢わず、己の隣に偽の誓をなさざりし者なり。彼は主より降福を受け、神其の救者より矜恤を受けん。主を尋ぬる族、イァコフの神よ、爾の顔を尋ぬる族は此くの如し。門よ、爾の首を擧げよ、世世の戸よ、擧れ、光榮の王入らんとす。此の光榮の王は誰たる、勇毅能力の主、戰に能力ある主是なり。門よ、爾の首を擧げよ、世世の戸よ、擧がれ、光榮の王入らんとす。此の光榮の王は誰たる、萬軍の主、彼は光榮の王なり。

【 光榮讃詞 】

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。
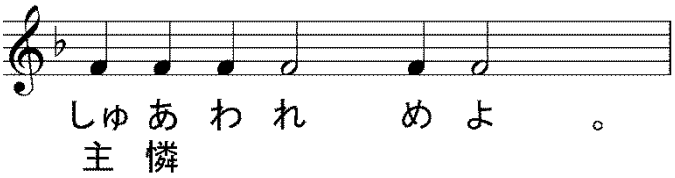
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

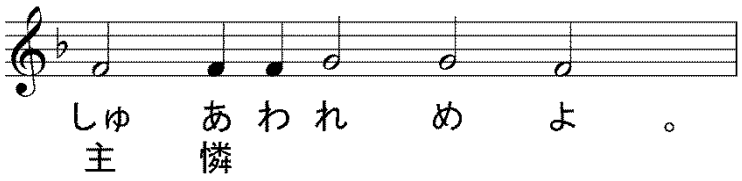
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す。

【　小聯禱　】

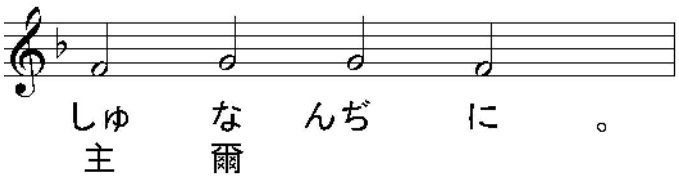
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、
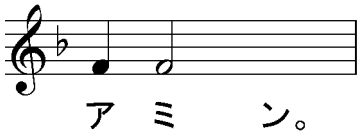


司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、



【　主日の坐誦讃詞　第２調　】

誦經⑫ 墓の石に封印するを禁ぜずして、爾は復活して、信の石を衆に賜えり。主よ、光榮は爾に歸す。

句) 主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳えん。
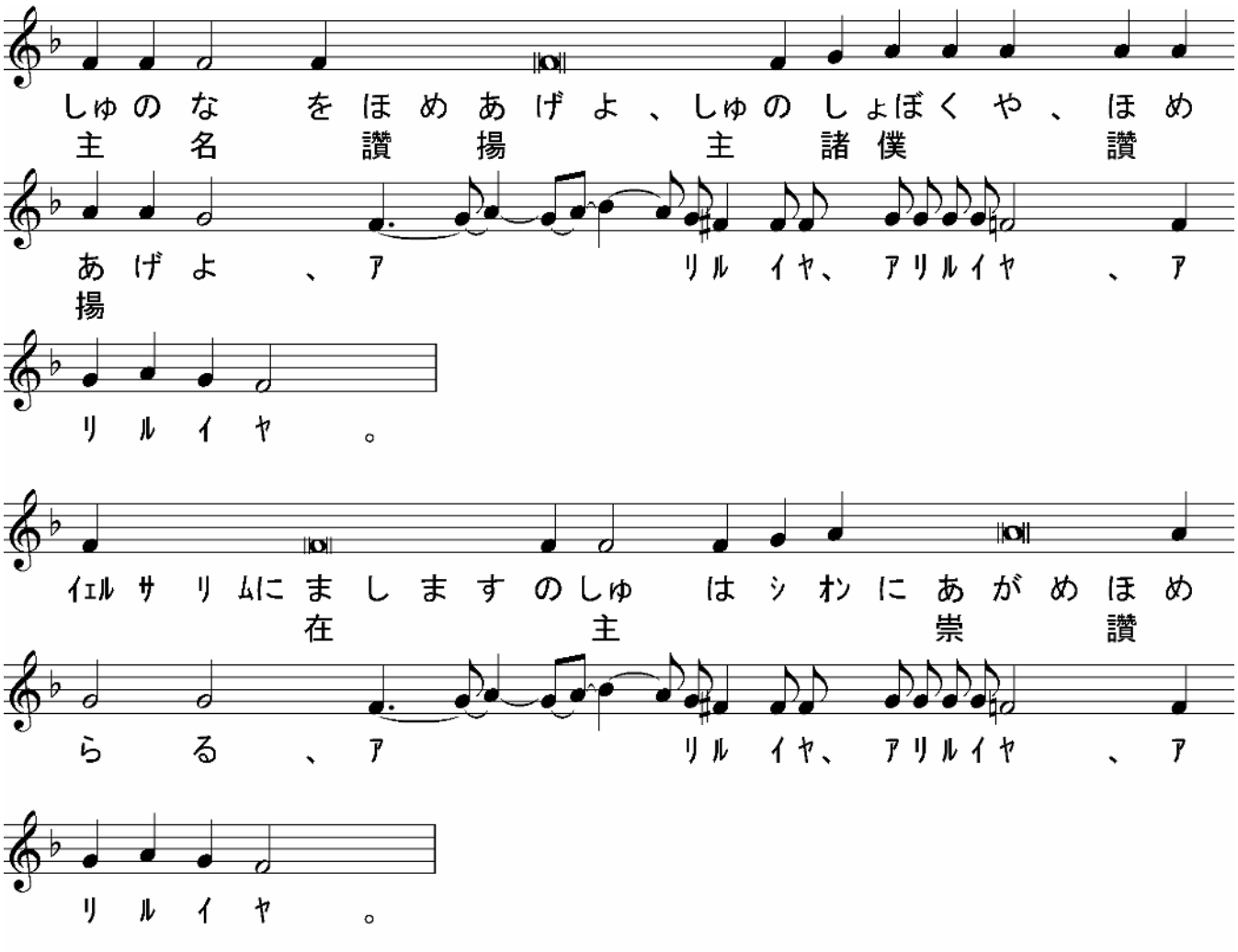
爾の門徒の會は攜香女と偕に同心に喜ぶ。我等も彼等と偕に共與の祭を祝い、爾の復活を讃榮尊敬して爾に呼ぶ、人を愛する主よ、爾の民に大なる憐を垂れ給え。
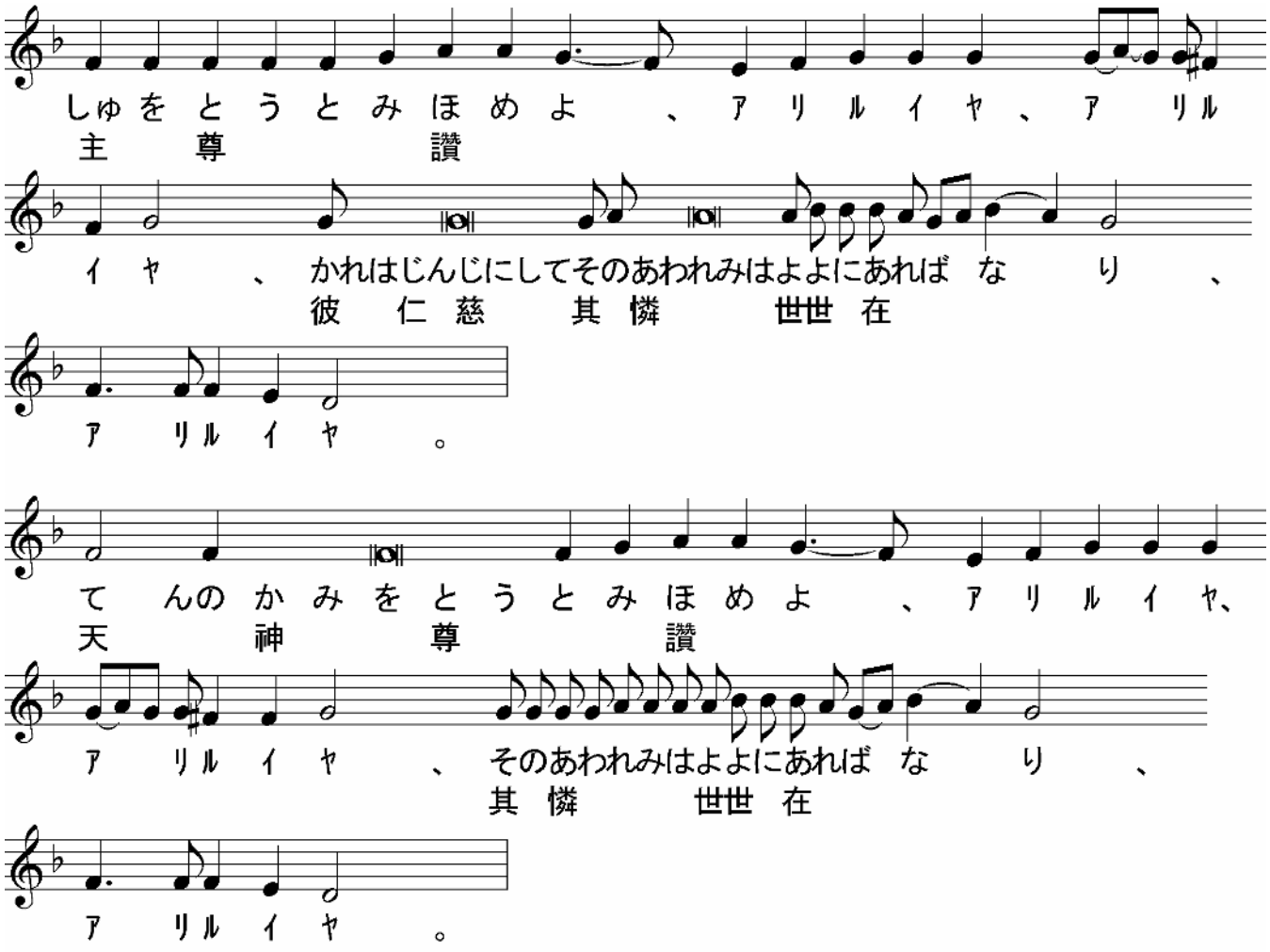
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

【　生神女讃詞　（坐するにあらずして、立ちて、畏と敬とを以て之を歌う）　】
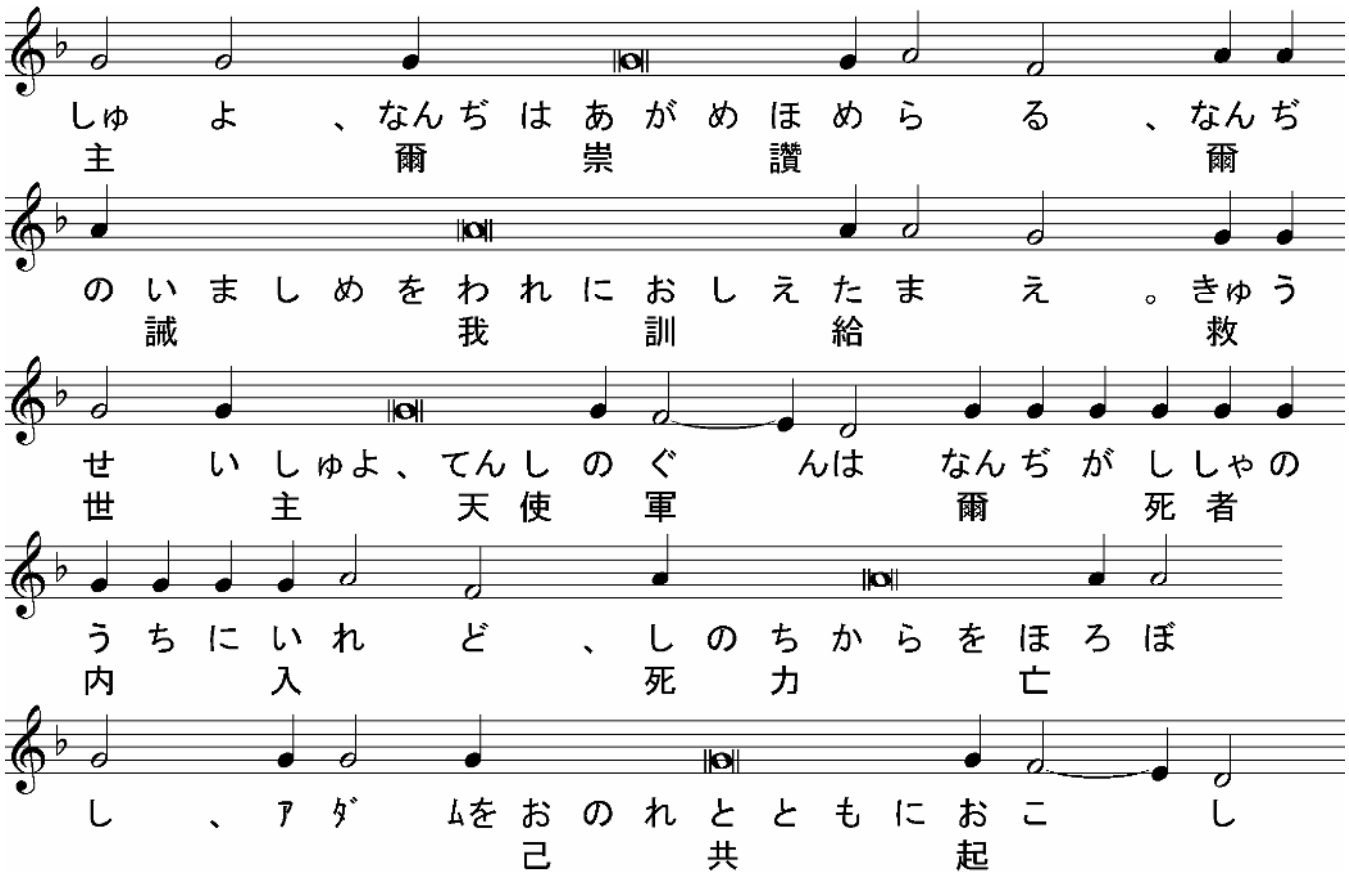
生神童貞女よ、爾は至りて讃美たる者なり、蓋爾より身を取りし主は地獄を虜にし、アダムを喚び起し、詛を破り、エヴァを赦し、死を滅し、我等を生かせり。故に我等歌いて呼ぶ、斯く行い給いしハリストス神は崇め讃めらる、光榮は爾に歸す。
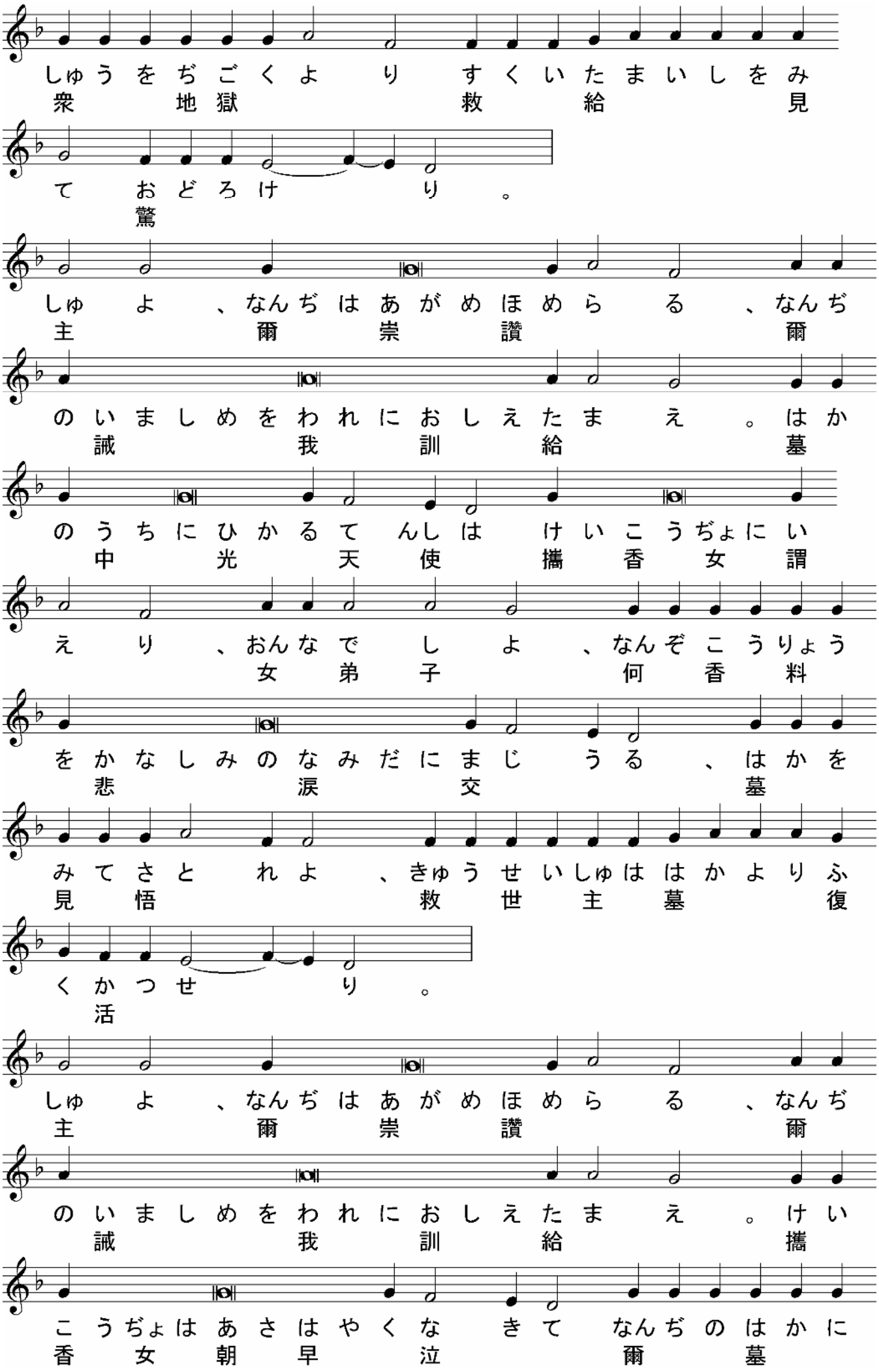
【　第１３４及び１３５聖詠（ポリエレイ、主の名を讃め揚げよ）　】
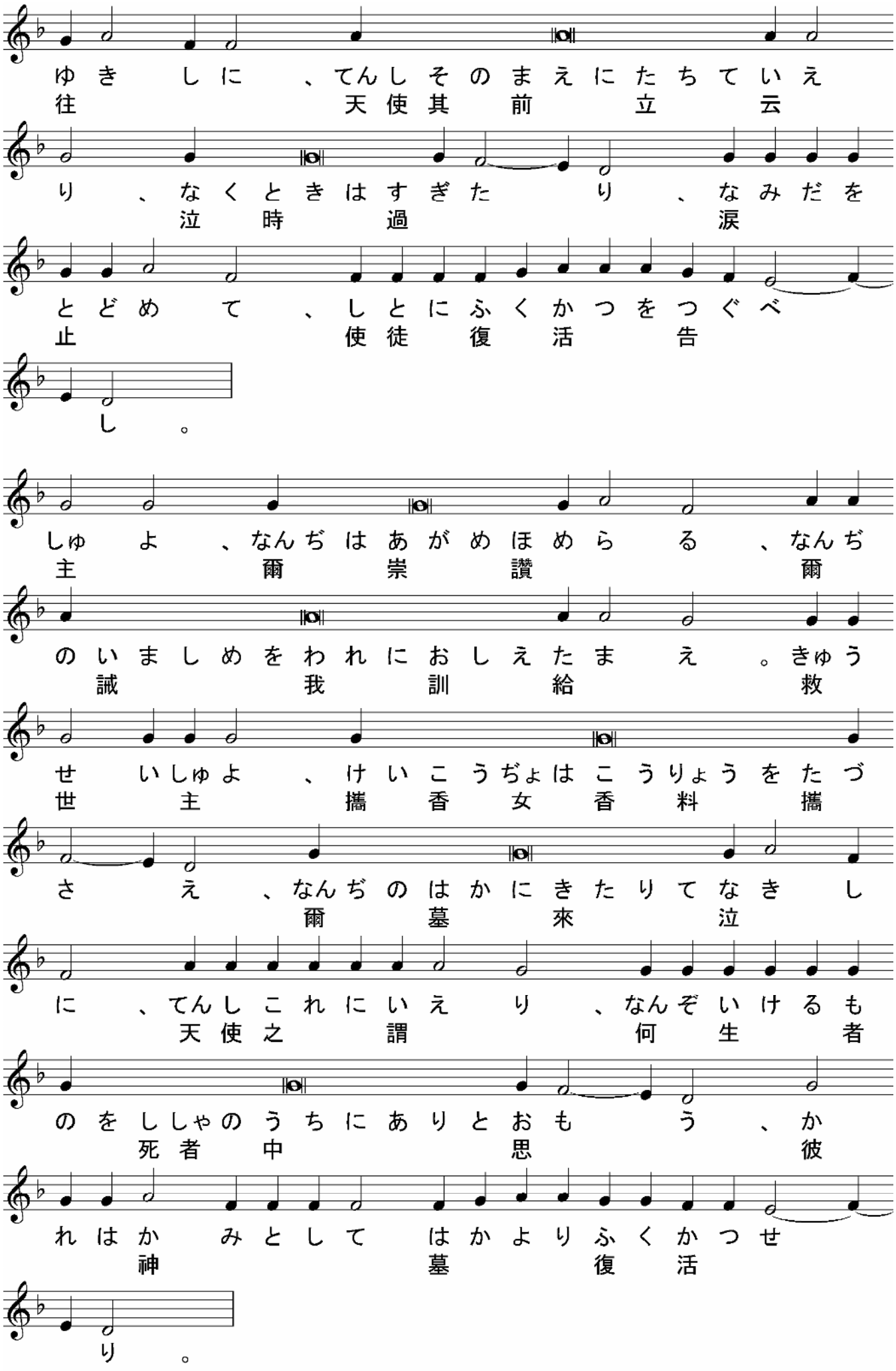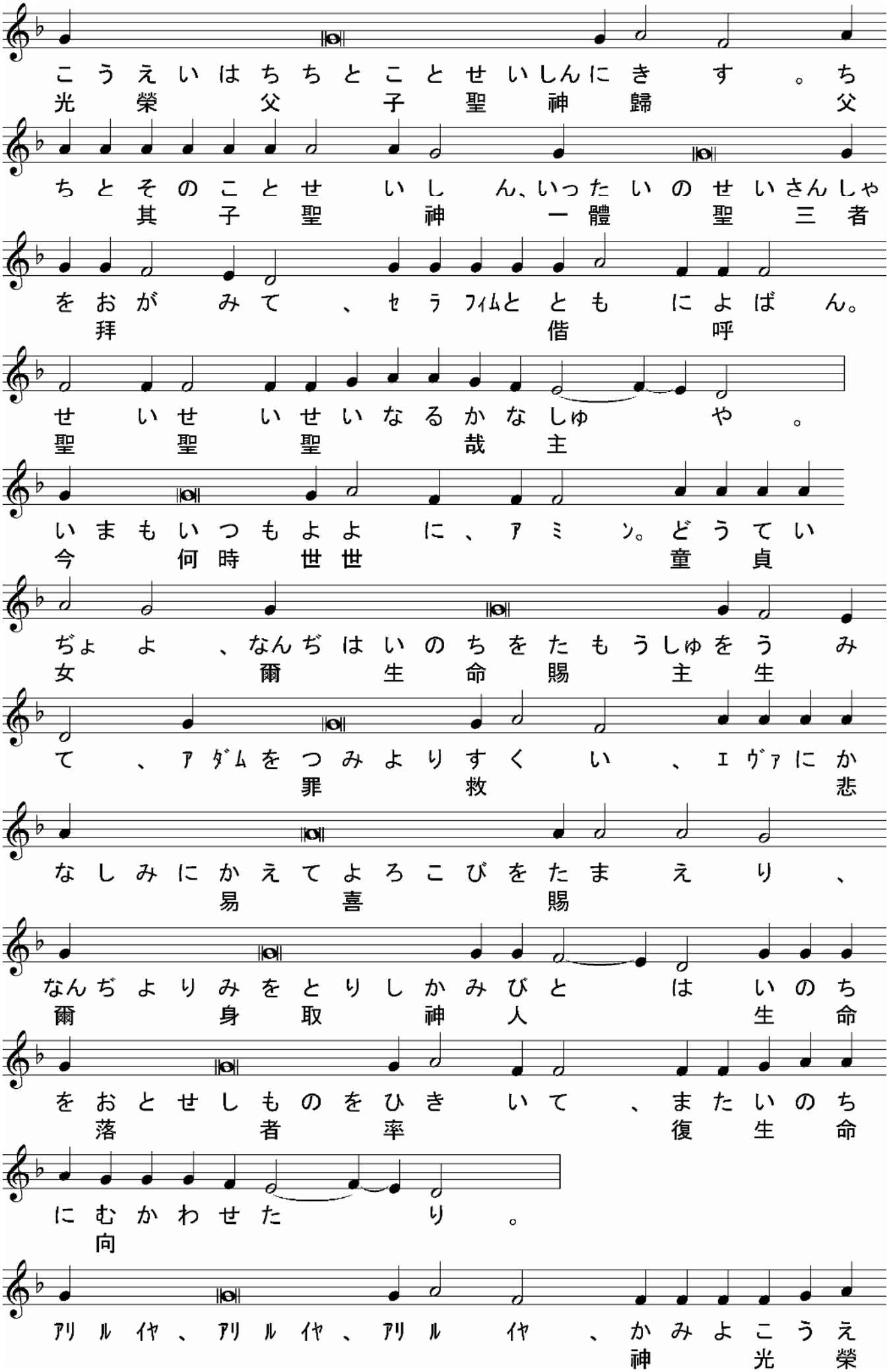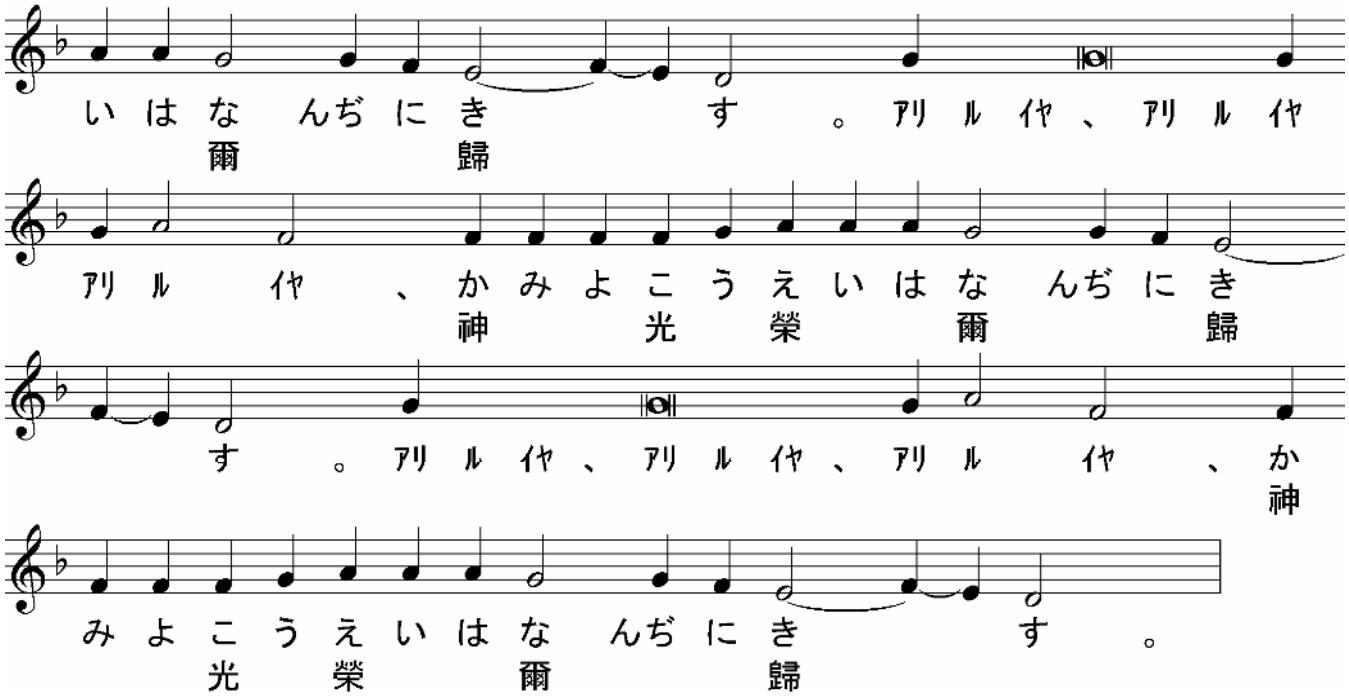




【 復活のエフロジタリア（ネポロチニ、主よ爾は崇め讃めらる） 第５調 】




しゅうをぢごくよりすくいたまいしをみ
衆地獄救給見
ておどろけり。
驚
しゅよ、なんぢはあがめほめらる、なんぢ
主爾崇讃爾
のいましめをわれにおしえたまえ。はか
誡我訓給墓
のうちにひかるてんしはけいこうぢょにい
中光天使攜香女謂
えり、おんなでしよ、なんぞこうりょう
女弟子何香料
をかなしみのなみだにまじうる、はかを
悲涙交墓
みてさとれよ、きゅうせいしゅははかよりふ
見悟救世主墓復
くかつせり。
活
しゅよ、なんぢはあがめほめらる、なんぢ
主爾崇讃爾
のいましめをわれにおしえたまえ。けい
誡我訓給攜
こうぢょはあさはやくなきてなんぢのはかに
香女朝早泣爾墓
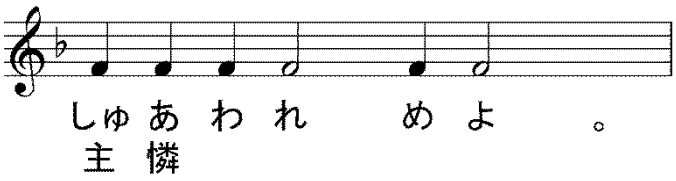

ゆきしに、てんしそのまえにたちていえ
往天使其前立云
り、なくときはすぎたり、なみだを
泣時過涙
とどめて、しとにふくかつをつぐべ
止使徒復活告
し。
しゅよ、なんぢはあがめほめらる、なんぢ
主爾崇讚爾
のいましめをわれにおしえたまえ。きゅう
誡我訓給救
せいしゅよ、けいこうぢょはこうりょうをたづ
世主攜香女香料攜
さえ、なんぢのはかにきたりてなきし
爾墓來泣
に、てんしこれにいえり、なんぞいけるも
天使之謂何生者
のをししゃのうちにありとおもう、か
死者中思彼
れはかみとしてはかよりふくかつせ
神墓復活
り。


こうえいはちちとことせいしんにきす。ち
光榮父子聖神歸父
ちとそのことせいしん、いったいのせいさんしゃ
其子聖神一體聖三者
をおがみて、セラフィムとともによばん。
拜偕呼
せいせいせいなるかなしゅや。
聖聖聖哉主
いまもいつもよよに、アミン。どうてい
今何時世世童貞
ぢょよ、なんぢはいのちをたもうしゅをうみ
女爾生命賜主生
て、アダムをつみよりすくい、エヴァにか
罪救悲
なしみにかえてよろこびをたまえり、
易喜賜
なんぢよりみをとりしかみびとはいのち
爾身取神人生命
をおとせしものをひきいて、またいのち
落者率復生命
にむかわせたり。
向
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよこうえ
神光榮

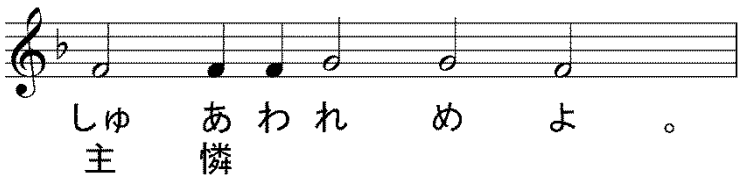


【　小聯禱　】
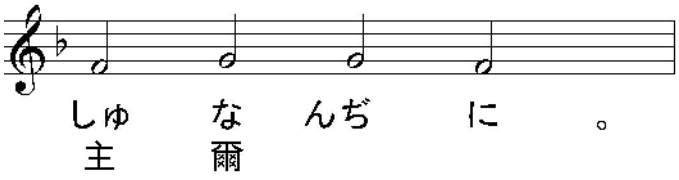
司祭）我等復又安和にして主に禱らん、
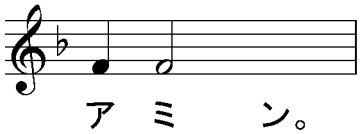


司祭）神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



司祭）至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭）蓋爾父と子と聖神の名は讃揚せられ、爾の國は讃榮せらる、今も何時も世世に、



【 應答歌（イパコイ） 第２調 】

誦經⑬ハリストス神よ、苦難の後、女等墓に往きて、爾の身に香料を傅らんとせしに、天使等を墓の中に見て驚けり、蓋彼等の言うを聽けり、主は復活して、世界に大なる憐を賜えり。

【 品第詞（ステペンナ） ※復唱は省略 第２調 第一倡和詞（アンティフォン） 】

誦經⑭ 救世主よ、我が心の目を天に爾に擧ぐ、爾の光照にて我を救い給え。

嗚呼吾がハリストスよ、時毎に多く爾に罪を犯せる我等を憐みて、終の前に爾に痛悔する法を與え給え。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

聖神には宰制し、聖を施し、造物を活動せしむること適う、父及び子と一性の神なればなり。

【 第二倡和詞（アンティフォン） 】

誦經⑬若し主我等の中にあらずば、誰か敵又殺人者より全うし護らるるに堪えん。

救世主よ、爾の僕を彼等の歯に付す勿れ、蓋我が敵は獅の如く我に向い進む。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

聖神には生命の泉及び尊榮は屬す、蓋神として、其力を以て、一切の造物を父の中に、子に因りて守る。

【 第三倡和詞（アンティフォン） 】

誦經⑭主を頼む者は聖山に似たり、敢て敵の攻撃に因りて動かざらん。

敬虔に生を送る者は己の手を不法に伸ぶべからず、蓋ハリストスは其嗣業の爲に杖を放たず。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

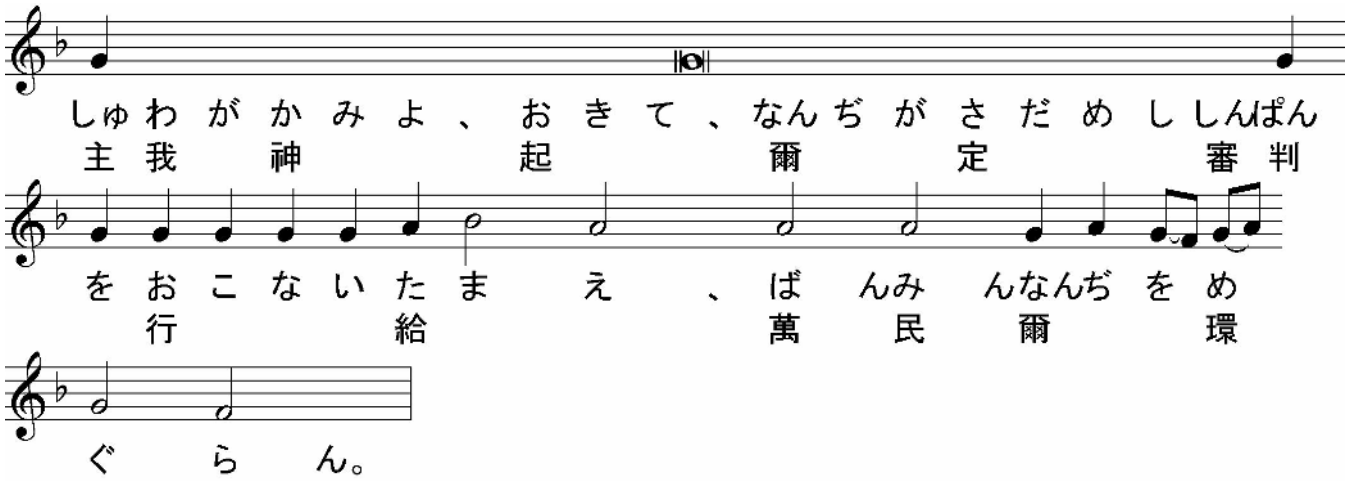
聖神にて一切の智慧は湧き出さる、是より使徒は恩寵を斟み、致命者は苦に因

りて榮冠を冠り、預言者は見る。

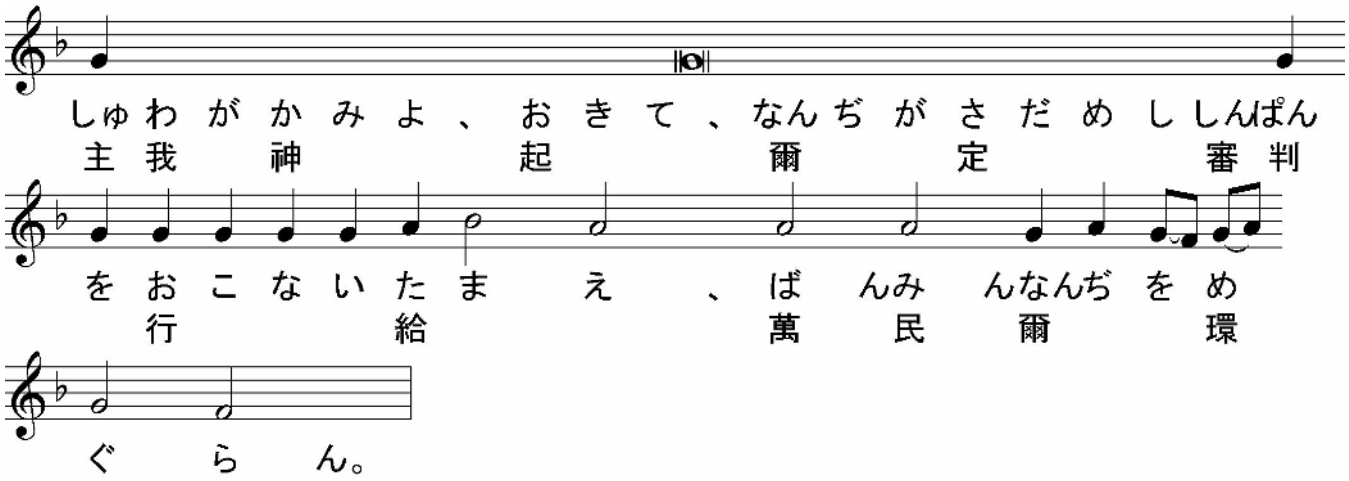
【 提綱（プロキメン） 第２調 】

司祭) 謹（つつし）みて聴（き）くべし
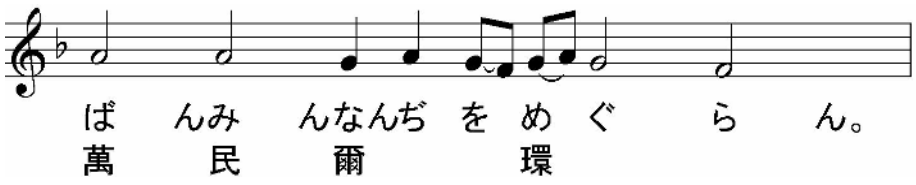
誦經⑮プロキメン、主我神（しゅわかみ）よ、起（お）きて、爾（なんぢ）が定（さだ）めし審判（しんぱん）を行（おこな）い給（たま）え、萬民爾（ばんみんなんぢ）を環（めぐ）らん。



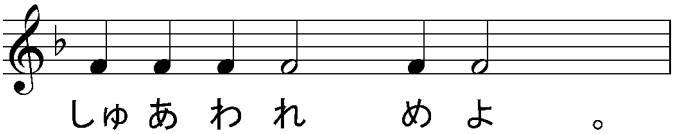
誦經⑮主我神（しゅわかみ）よ、我爾（われなんぢ）を頼（たの）む、我（われ）を救（すく）い給（たま）え。
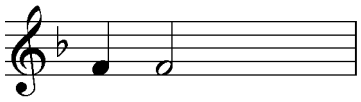


誦經⑮主我神（しゅわかみ）よ、起（お）きて、爾（なんぢ）が定（さだ）めし審判（しんぱん）を行（おこな）い給（たま）え、



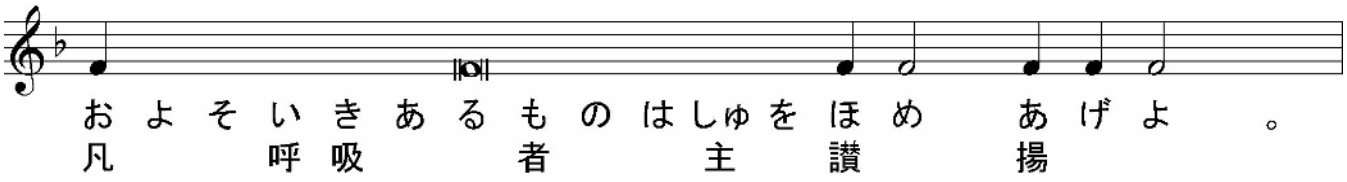
司祭) 主（しゅ）に禱（いの）らん、



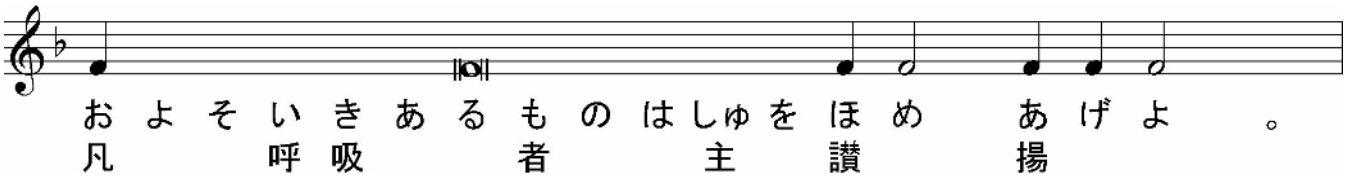
司祭) 蓋我が神よ、爾は聖にして聖なる者の中に居る、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



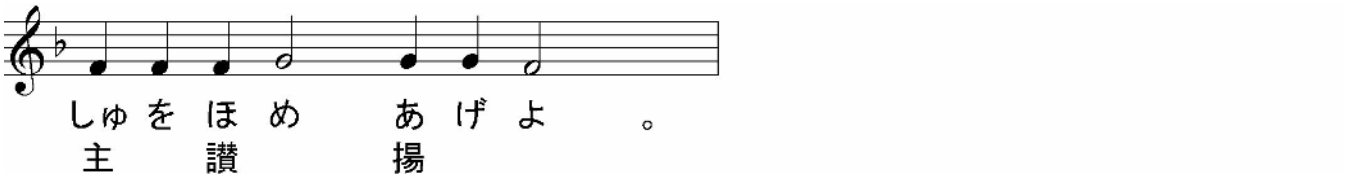
司祭) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、



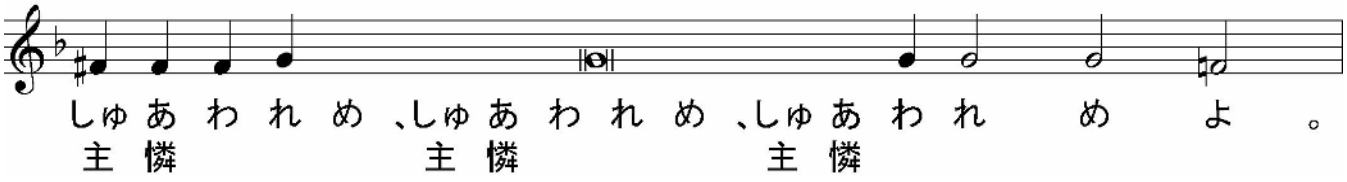
司祭) 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ、
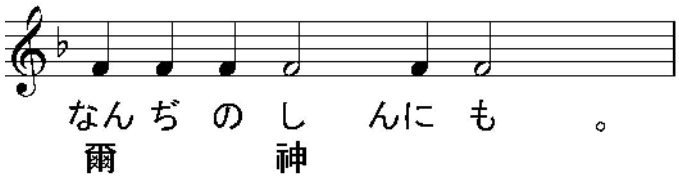


司祭) 凡そ呼吸ある者は、
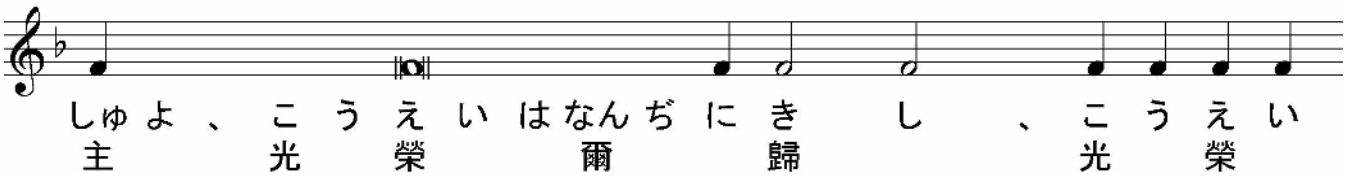


司祭) 我等に聖福音經を聽くを賜うを主・神に禱らん、
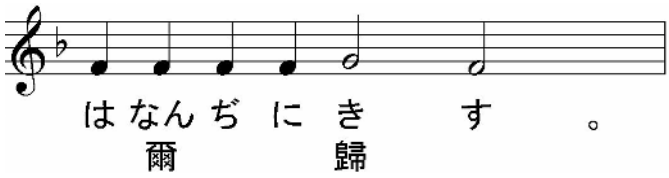


司祭) 睿智、粛みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、
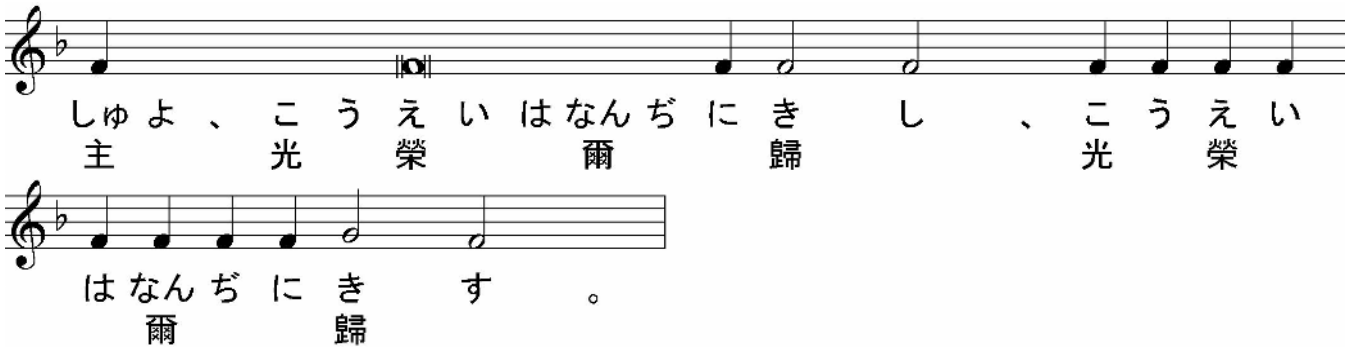


司祭) イオアン傳の聖福音經の讀、
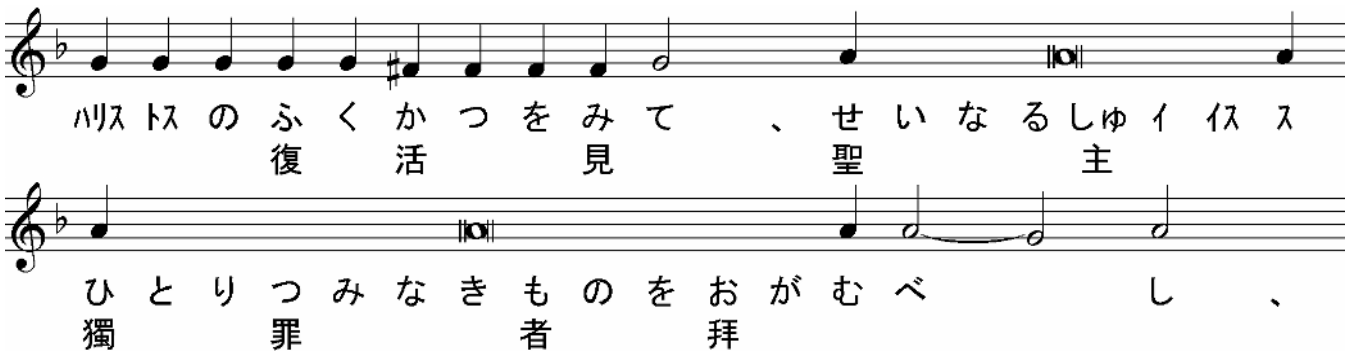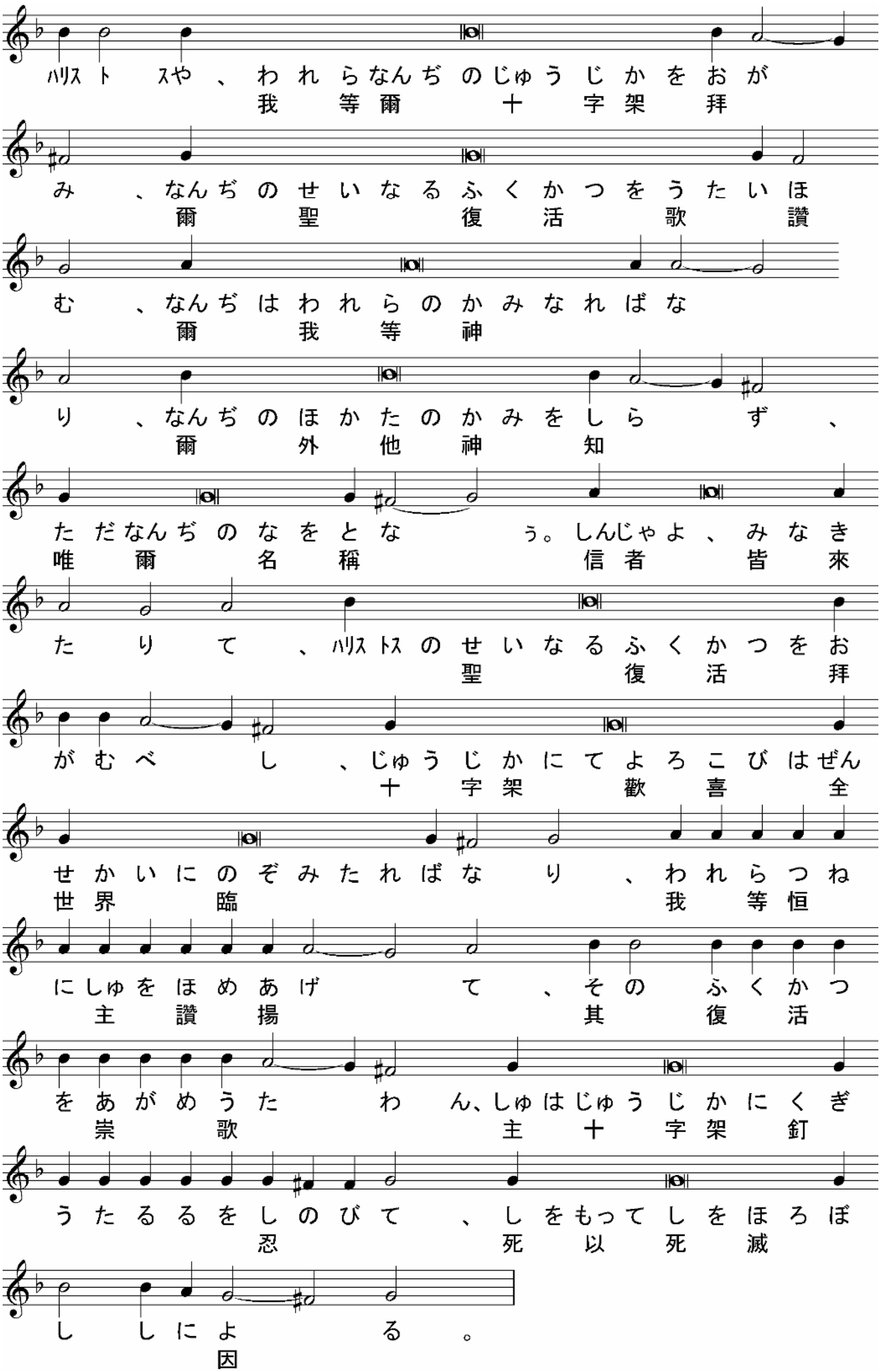




【　主日早課第八福音　イオアン福音書 64 端（20 章 11-18 節）　】

司祭）謹みて聽くべし、彼の時、マリヤは墓の外に立ちて哭けり。哭く時墓に俯して、二の天使が、白衣にしてイイススの屍の置かれし所に、一は首に一は足に坐せるを見る。彼等之に謂う、婦よ、何ぞ哭ける。彼曰く、人我が主を取れり、我其何處に彼を置きしを知らず。此を謂いて、顧みて、イイススの立てるを見る、然れども其イイススなるを知らざりき。イイスス彼に謂う、婦よ、何ぞ哭ける、誰を尋ぬるか。婦は園丁なりと意いて、之に謂う、君よ、若し爾彼を移ししならば、何處に置きしを我に告げよ、我彼を取らん。イイスス之に謂う、マリヤよ、婦顧みて、彼に謂う、「ラヴォニ」、譯すれば夫子なり。イイスス之に謂う、我に捫る勿れ、蓋我未だ我が父に升らざりき、乃往きて、我が兄弟に告げて曰え、我は我が父及び爾等の父、我が神及び爾等の神に升ると。マリヤ「マグダリナ」往きて、門徒に己が主を見しこと、及び其彼に之を謂いしことを告げたり。
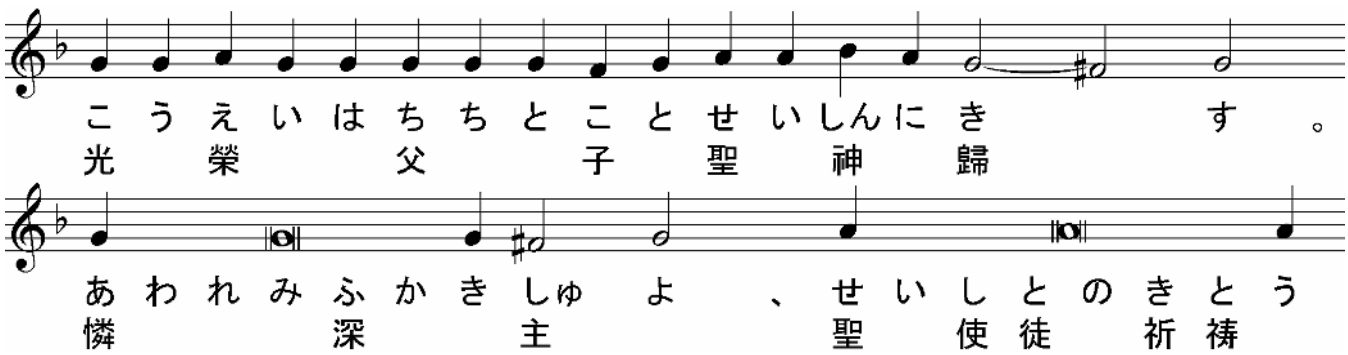


【　ハリストスの復活を見て　】
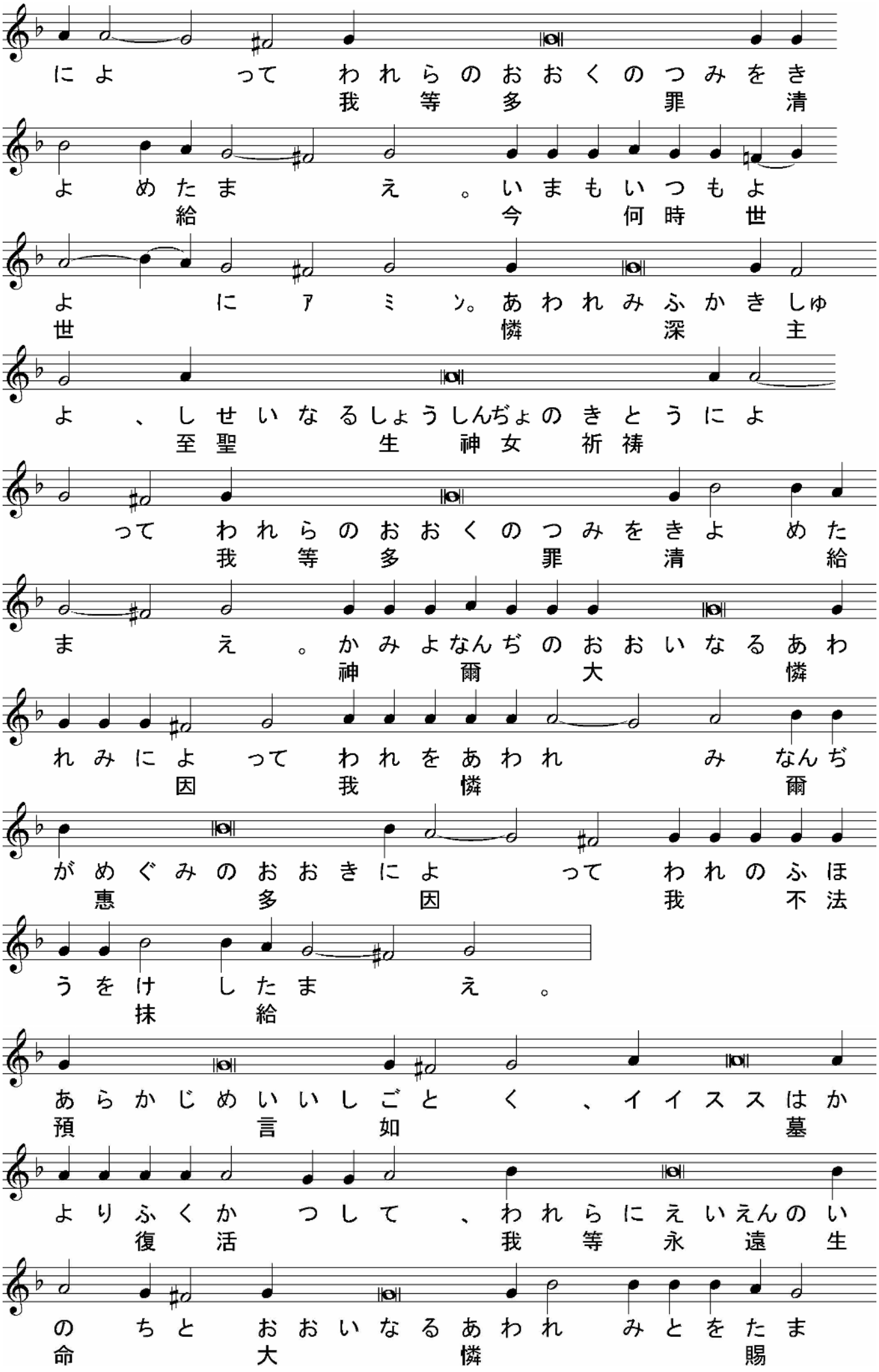


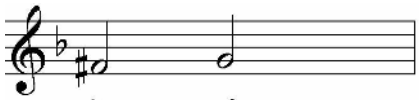

ハリスト スや、われらなんぢのじゅうじかをおが
我等爾十字架拜
み、なんぢのせいなるふくかつをうたいほ
爾聖復活歌讃
む、なんぢはわれらのかみなればな
爾我等神
り、なんぢのほかたのかみをしらず、
爾外他神知
ただなんぢのなをとなぅ。しんじゃよ、みなき
唯爾名稱信者皆來
たりて、ハリストスのせいなるふくかつをお
聖復活拜
がむべし、じゅうじかにてよろこびはぜん
十字架歡喜全
せかいにのぞみたればなり、われらつね
世界臨我等恒
にしゅをほめあげて、そのふくかつ
主讚揚其復活
をあがめうたわん、しゅはじゅうじかにくぎ
崇歌主十字架釘
うたるるをしのびて、しをもってしをほろぼ
忍死以死滅
ししによる。
因

【　第５０聖詠　伶長に歌わしむ。ダヴィドの詠。ダヴィド ヴィルサヴィヤに入りて後、預言者ナタンの彼に來りし時に此を作れり。　】
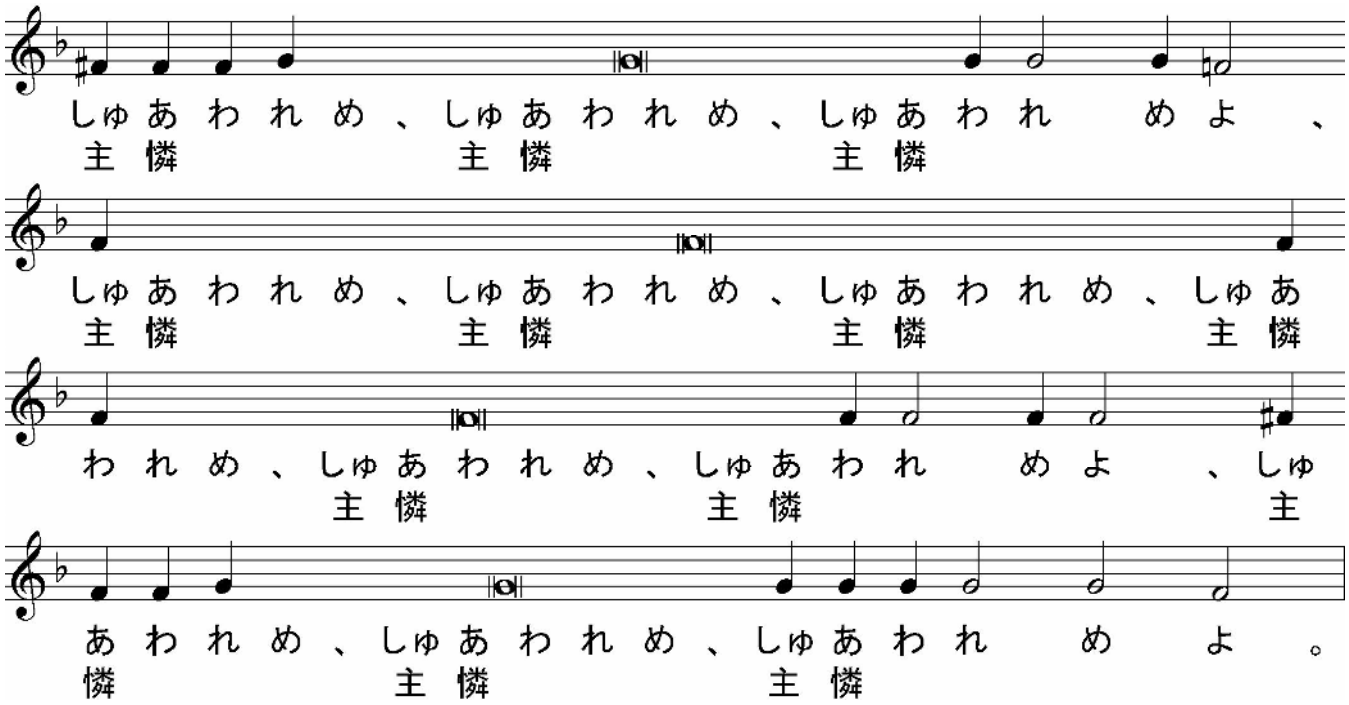
誦經⑯神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が惠の多きに因りて我の不法を抹し給え。屢我を我が不法より洗い、我を我が罪より淸め給え、蓋我は我が不法を知る、我の罪は常に我が前に在り。我は爾獨爾に罪を犯し、惡を爾の目の前に行えり、爾は爾の審斷に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾は心に眞實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。ヒソプを以て我に沃げ、然せば我潔くならん、我を滌え、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを聞かせ給え、然せば爾に折られし骨は悅ばん。爾の顏を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給え。神よ、潔き心を我に造れ、正しき靈を我の衷に改め給え。我を爾の顏より逐うこと毋れ、爾の聖神を我より取り上ぐること毋れ。爾が救の喜を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給え。我不法の者に爾の道を敎えん、不虔の者は爾に歸らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救い給え、然せば我が舌は爾の義を讚め揚げん。主よ、我が脣を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲せば我此を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給わず。主よ、爾の惠に因りて恩をシオンに垂れ、イェルサリムの城垣を建て給え。其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠えんとす。
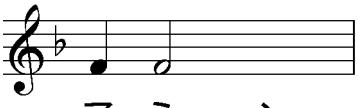



によ って われらのおおくのつみをき
我 等 多 罪 清
よ めたま え 。いまもいつもよ
給 今 何時 世
よ にァミン。あわれみふかきしゅ
世 憐 深 主
よ 、しせいなるしょうしんぢょのきとうによ
至聖 生 神女 祈祷
って われらのおおくのつみをきよ めた
我 等 多 罪 清 給
ま え 。かみよなんぢのおおいなるあわ
神 爾 大 憐
れみによ って われをあわれ み なんぢ
因 我 憐 爾
がめぐみのおおきによ って われのふほ
恵 多 因 我 不法
うをけ したま え 。
抹 給
あらかじめいいしごと く 、イイススはか
預 言 如 墓
よりふくか つして 、われらにえいえんのい
復 活 我 等 永 遠 生
のちと おおいなるあわれ みとをたま
命 大 憐 賜
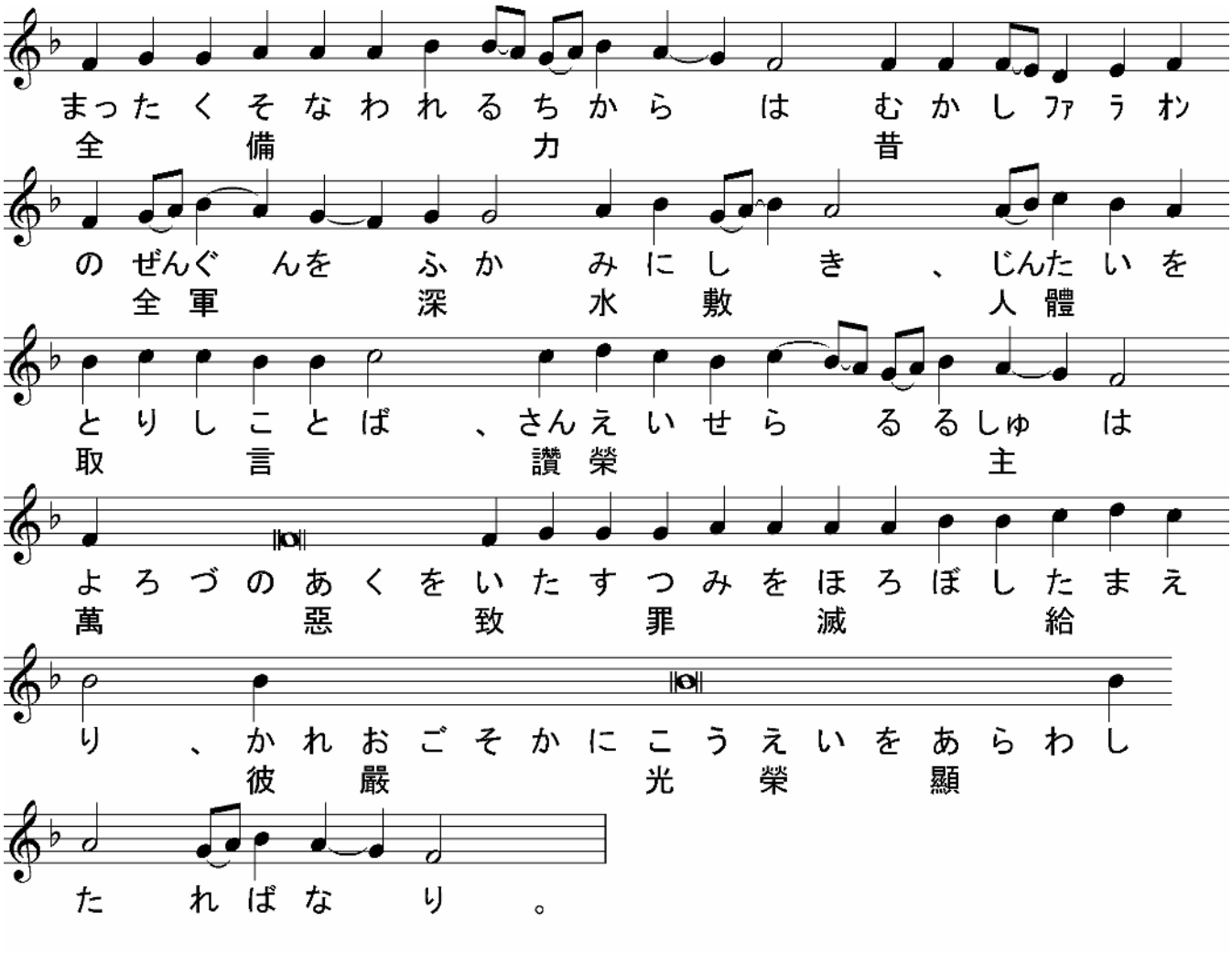


司祭) 神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し給え、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み、正教のハリスティアニン等の角を高うし、我等に爾の豐なる憐を垂れ給え、至淨なる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤの禱と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光榮なる尊き預言者・前驅・授洗イォアン、光榮にして讃美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者・大ヴァシリィ、神學者グリゴリイ、金口イォアン、我等の聖神父・ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父・日本の亜使徒・大主教ニコライ、光榮なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イォアキム及びアンナ、及び諸聖人の轉達に因りて、大仁慈の主よ、爾に求む、我等罪人爾に禱る者に聆き納れて、我等を憐めよ、



司祭) 爾が獨生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世世に、



【 規程（カノン） 第１歌頌 主日の規程（カノン） 第２調 】



誦經⑰ 主（しゅ）よ、光榮（こうえい）は爾（なんぢ）の聖（せい）なる復活（ふくかつ）に歸（き）す。

我等（われら）如何（いかん）ぞハリストスの全能（ぜんのう）の神性（しんせい）を奇（き）とせざらん、彼（かれ）は苦（くるしみ）より衆（しゅう）信者（しんじゃ）に苦（くるしみ）なきと朽（く）ちざるとを流（なが）し、聖（せい）なる脇（わき）より不死の泉（ふし いづみ）を滴（したた）らせ、墓（はか）より永遠（えいえん）の生命（いのち）を施（ほどこ）し給（たま）う。

主（しゅ）よ、光榮（こうえい）は爾（なんぢ）の聖（せい）なる復活（ふくかつ）に歸（き）す。

至善（しぜん）なる主（しゅ）よ、世の君（きみ）、我等（われら）が爾（なんぢ）の誡（いましめ）に背（そむ）きて服従（ふくじゅう）せし者（もの）は爾（なんぢ）の十字架（じゅうじか）にて定罪（ていざい）せられたり、蓋（けだし）死に屬（ぞく）する者（もの）と爲（な）して爾（なんぢ）に觸（ふ）れて、爾（なんぢ）の權能（けんのう）に由（よ）りて權（けん）を失（うしな）い、弱（よわ）き者（もの）と顯（あらわ）れたり。
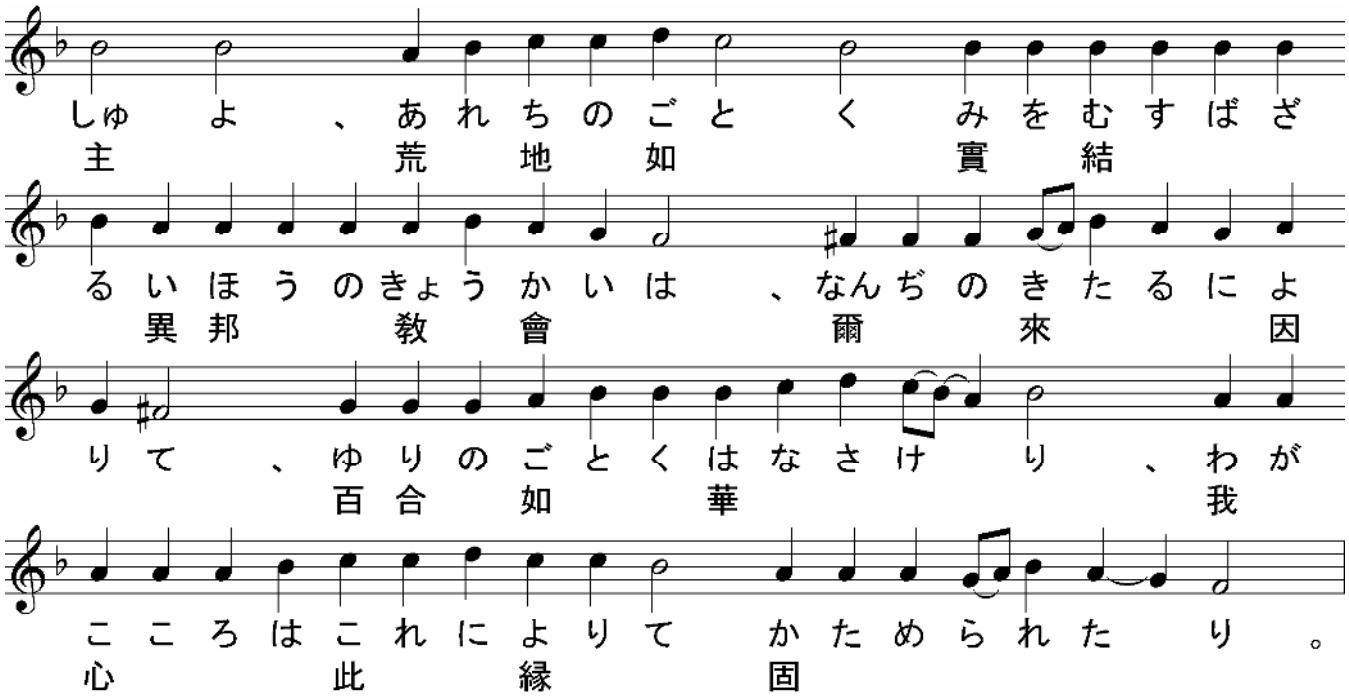
光榮（こうえい）は父と子と聖神（ちち こ せいしん）に歸（き）す。

爾は人類の贖罪主及び不朽の生命の首として世に來れり、蓋爾の復活を以て死の繫絏を断ち給えり。我等皆之を讃榮す、爾嚴に光榮を顯したればなり。

今も何時も世世に、アミン。

潔き永貞童女よ、爾は見ゆると見えざる一切の造物より至りて上なる者と顯れたり、造成主を生みたればなり、其爾の胎内に身を取らんと欲せしが如し。彼に勇敢を以て我が靈を救わんことを祈り給え。

【　第３歌頌　主日の規程（カノン）　】



誦經⑱主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

造物は爾の苦に因りて變じたり、爾神聖なる指麾を以て一切を基づけたる主が卑しき形に於て不法者より辱しめらるるを見たればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す。

ハリストスよ、爾は己の像に形りて、爾の手を以て我を塵より造り、復罪の爲に地の塵に還されし者を地獄に下りて、己と偕に復活せしめ給えり。
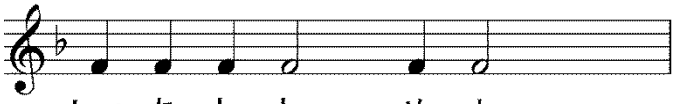
今も何時も世世に、アミン。

至淨なる者よ、爾の産に因りて天使の品位は驚き、人人の心は懼れたり、故

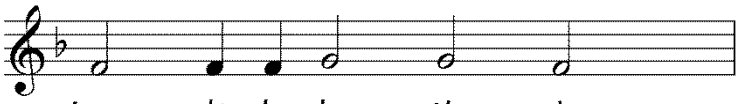
に我等信を以て爾を生神女と尊む。

【　小聯禱　】

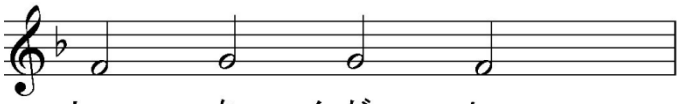
司祭）我等復又安和にして主に禱らん、
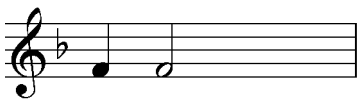


司祭）神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、
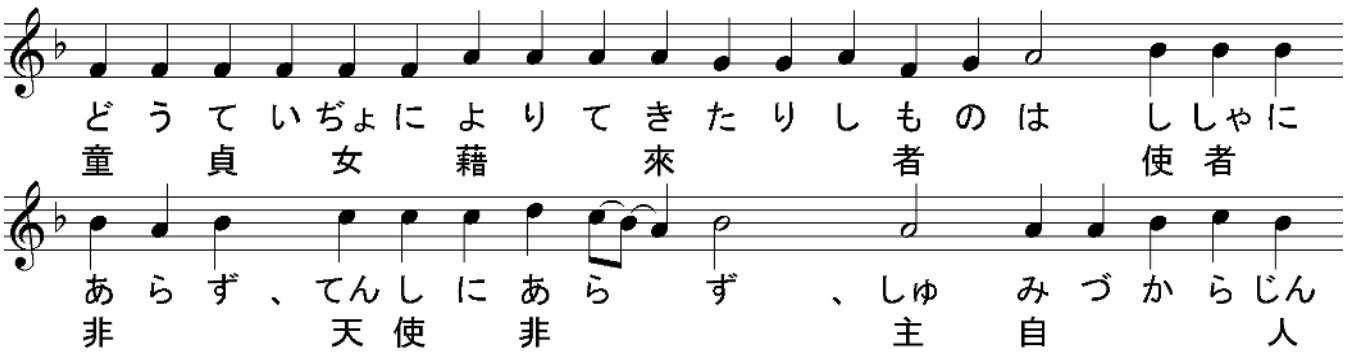


司祭）至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
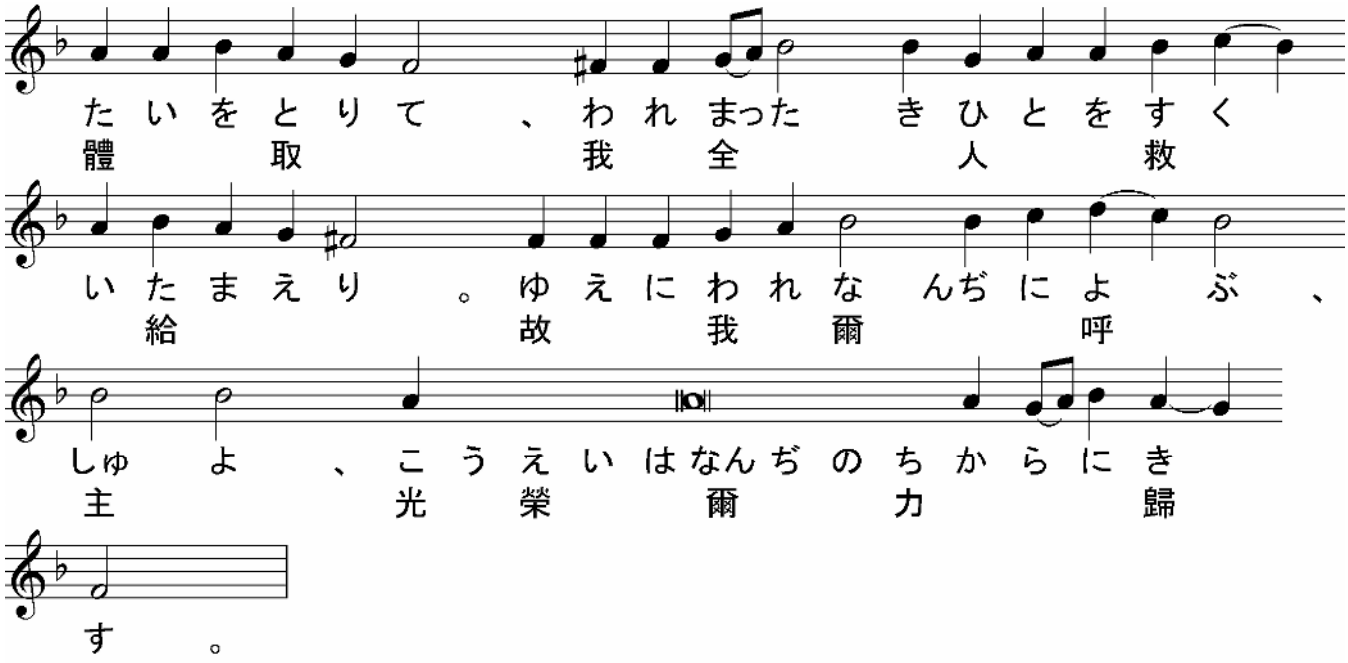


司祭）蓋爾は我等の神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



【　第４歌頌　主日の規程（カノン）　】





誦經⑲主(しゅ)よ、光榮(こうえい)は爾(なんぢ)の聖(せい)なる復活(ふくかつ)に歸(き)す。

我(わ)が神(かみ)、審判(しんぱん)を諸民(しょみん)に行(おこな)う主宰(しゅさい)よ、爾(なんぢ)は聲(こえ)を出(いだ)さずして、審判(しんぱん)せらるる者(もの)として審判座(しんぱんざ)の前(まえ)に立(た)つ。ハリストスよ、爾(なんぢ)は此(こ)の苦(くるしみ)にて世界(せかい)の爲(ため)に救(すくい)を立(た)て給(たま)えり。
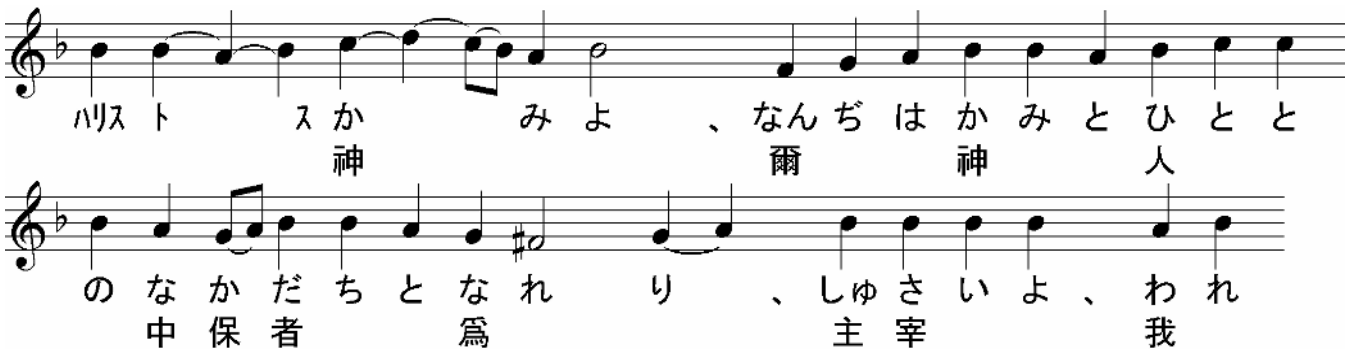
光榮(こうえい)は父(ちち)と子(こ)と聖神(せいしん)に歸(き)す。
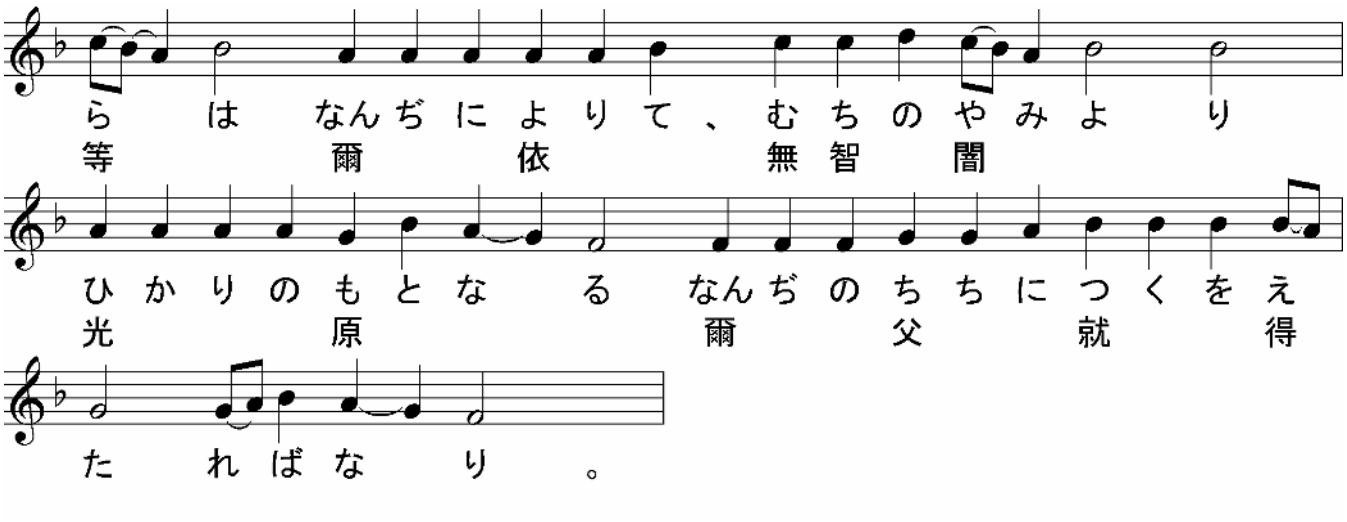
ハリストスよ、爾(なんぢ)の苦(くるしみ)に因(よ)りて敵(てき)には武器(ぶき)悉(ことごと)く盡(つ)き、爾(なんぢ)が地獄(ぢごく)に下(くだ)るに因(よ)りて仇(あだ)の城邑(まち)は毀(こぼ)たれ、苦(くる)しむる者(もの)の狂暴(きょうぼう)は壞(やぶ)られたり。

今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、アミン。

女宰生神女(ぢょさいしょうしんぢょ)よ、我等衆信者(われらしゅうしんじゃ)は爾(なんぢ)を救(すくい)の湊及(みなとおよ)び堅固(けんご)なる城(しろ)として知(し)る、爾(なんぢ)の祈禱(きとう)に因(よ)りて我等(われら)の靈(たましい)を危難(きなん)より脱(のが)れしめ給(たま)えばなり。

【　第５歌頌　主日の規程(カノン)　】





誦經⑳主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主宰ハリストスよ、爾は身にて甘じて松と黃楊樹と柏香木とに擧げられしに因りて、リバンの柏香木を摧く如く、諸民の驕を壞り給えり。
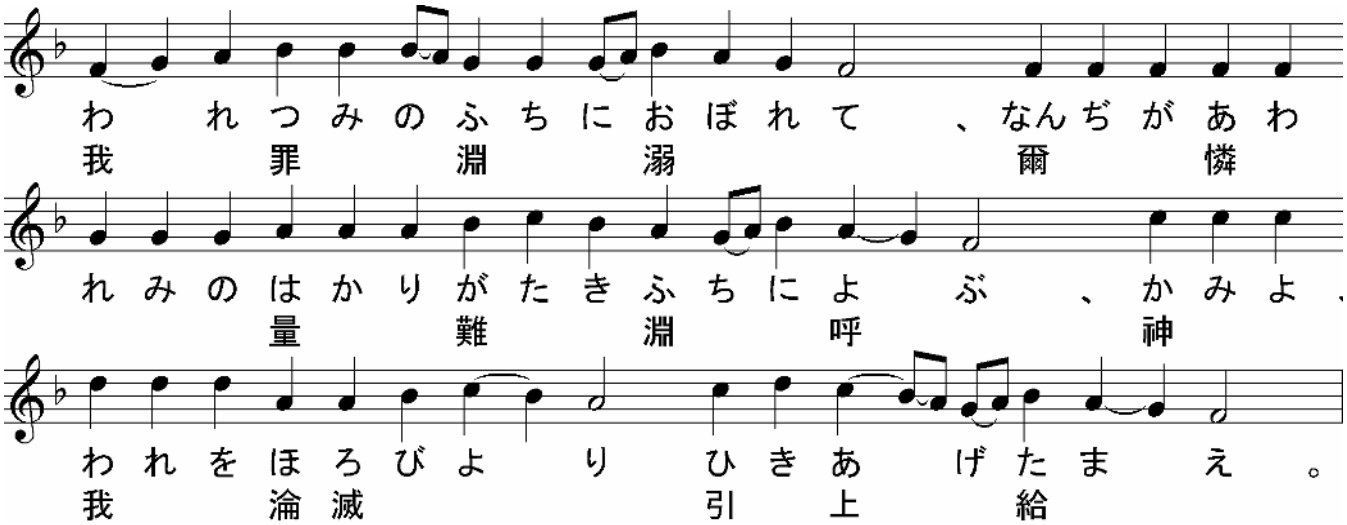
光榮は父と子と聖神に歸す。

ハリストスよ、彼等爾を氣息なき死者として最深き坎に置きたれども、爾は傷つけられて、爾の傷に因りて墓に寢ぬる遺れられたる死者を爾と偕に復活せしめ給えり。

今も何時も世世に、アミン。

潔き童貞女よ、爾を賴む者を諸敵の攻擊より護りて、之に平安を賜わんことを爾の子及び主に祈り給え。

【　第６歌頌　主日の規程（カノン）　】



誦經㉑主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

義者(ぎしゃ)は犯罪者(はんざいしゃ)の如(ごと)く定罪(ていざい)せられ、犯罪者(はんざいしゃ)と偕(とも)に木(き)に釘(てい)せられて、己(おのれ)の血(ち)に由(よ)りて罪過(ざいか)ある者(もの)に赦(ゆるし)を賜(たま)う。

光榮(こうえい)は父(ちち)と子(こ)と聖神(せいしん)に歸(き)す。
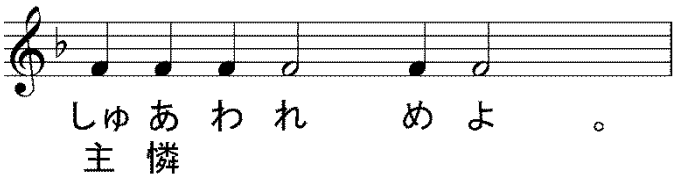
昔(むかし)一人(ひとり)のアダムに由(よ)りて死は世(よ)に入(し)り、又(よ)一人(ひとりかみ)神の子に由(こ)りて復活(ふくかつ)は顯(あらわ)れたり。

今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、アミン。
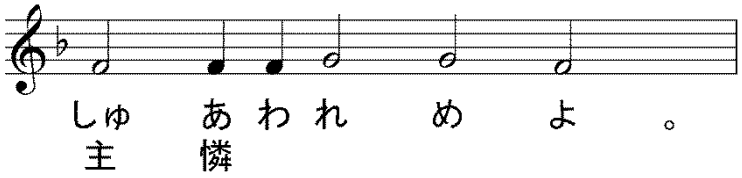
童貞女(どうていぢょ)よ、爾(なんぢ)は夫(おつと)を識(し)らずして生(う)み、又永遠(またえいえん)に童貞女(どうていぢょ)に止(とど)まりて、爾(なんぢ)の子及び神の眞(まこと)の神性(しんせい)の印象を顯(あらわ)す。

【　小聯禱　】
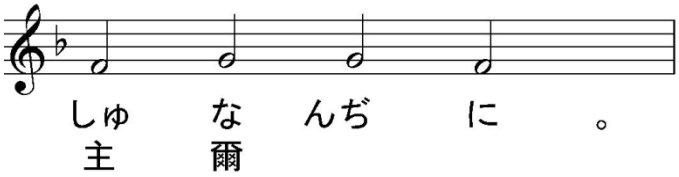
司祭) 我等復又安和(われらまたまたあんわ)にして主(しゅ)に禱(いの)らん、
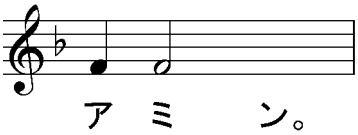


司祭) 神(かみ)よ、爾(なんぢ)の恩寵(おんちょう)を以(もつ)て、我等(われら)を佑(たす)け救(すく)い憐(あわれ)み護(まも)れよ、



司祭) 至聖至潔(しせいしけつ)にして至(いた)りて讃美(さんび)たる我等(われら)の光榮(こうえい)の女宰(ぢょさい)、生神女(しょうしんぢょ)、永貞童女(えいていどうぢょ)マリヤと、諸聖人(しょせいじん)を記憶(きおく)して、我等己(われらおのれ)の身及び互(みおよ)び互(たがい)に各(おのおの)の身を以(もつ)て、並(ならび)に悉(ことごと)くの我等の生命を以(もつ)て、ハリストス神(かみ)に委託(いたく)せん、



司祭) 蓋(けだし)爾(なんぢ)は平安(へいあん)の王及(おうおよ)び我(わ)が靈(たましい)の救主(きゅうしゅ)なり、我等光榮(われらこうえい)を爾(なんぢ)父(ちち)と子と聖神(せいしん)に獻(けん)ず、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、
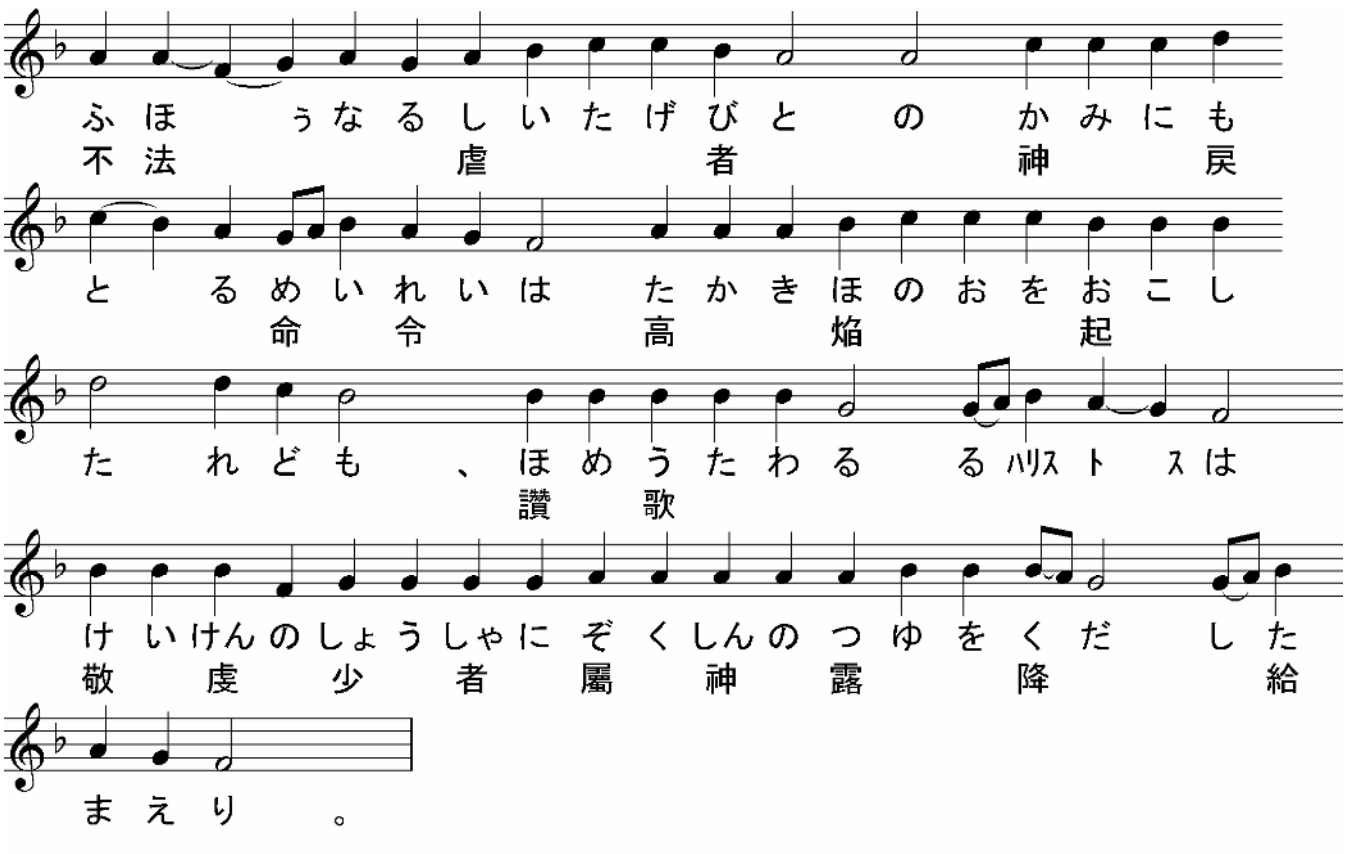


【　復活のコンダク　第２調　】

誦經㉒全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見て慄き、死者は起き、造物は見て爾と偕に喜び、アダムは共に樂しみ、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌う。

【 同讃詞（イコス） 】

救世主よ、爾は昧まされし者の光、爾は衆の復活、人人の生命なり。言よ、爾は死の權を滅し、地獄の門を破りて、衆を己と偕に復活せしめたり。人を愛する主よ、死者は奇跡を見て驚き、萬物は爾の復活の爲に喜ぶ。故に我等衆も爾の寛容を讃榮歌頌し、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌う。

【 第７歌頌　主日の規程（カノン） 】



誦經㉓主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主宰よ、爾は慈憐に由りて人の死に苦しめらるるを見るに忍びずして、人と爲り、來りて、爾の血を以て之を救い給えり、爾は我が先祖の讃美讃榮せらるる神なればなり。
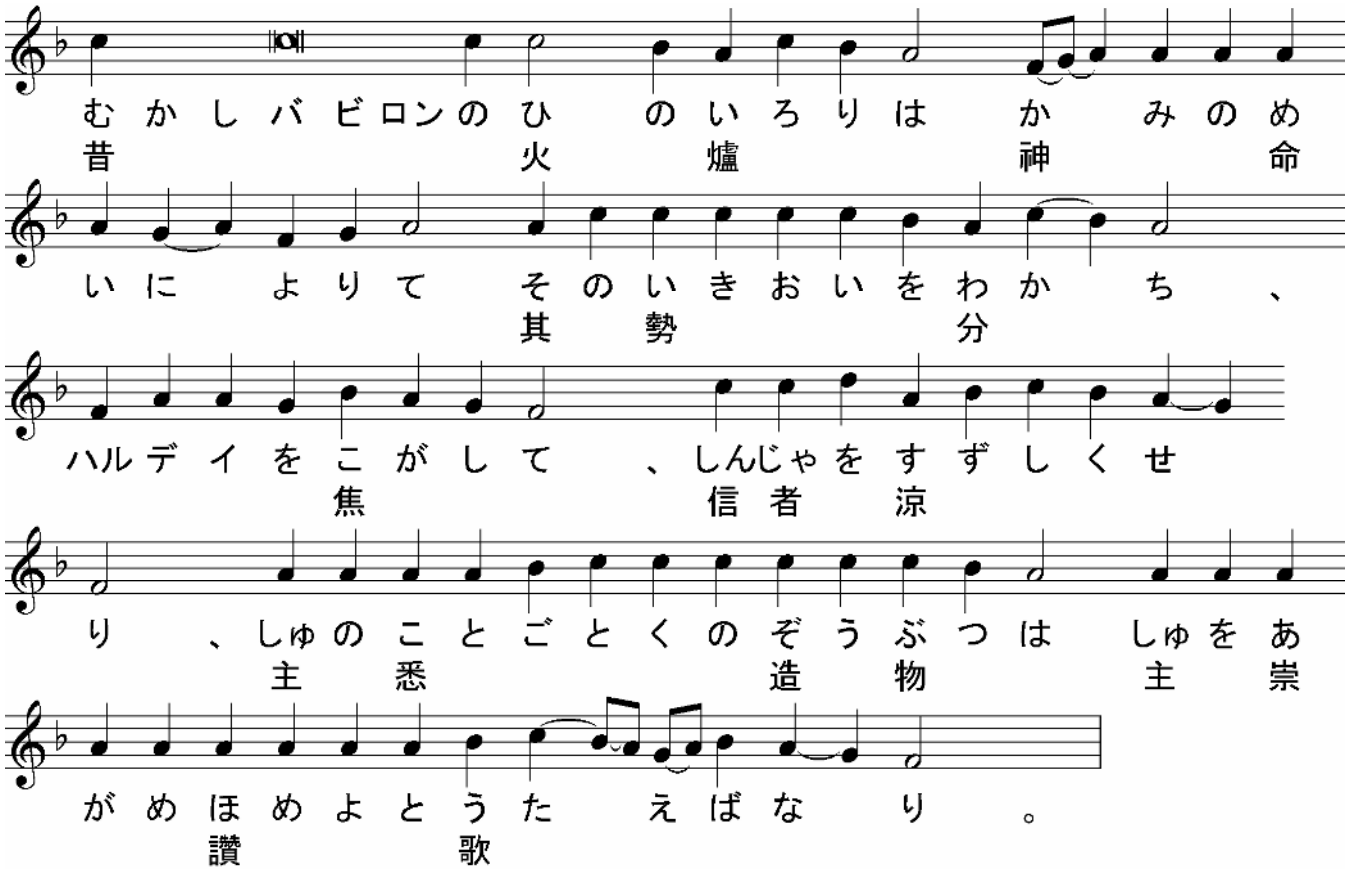
光榮は父と子と聖神に歸す。

ハリストスよ、地獄の門衛は爾が復讐の衣を衣たるを見て懼れたり、蓋爾主宰は狂暴の殘虐者たる奴隷を殺さん爲に來り給えり、爾は我が先祖の讃美讃榮せらるる神なればなり。

今も何時も世世に、アミン。

無玷なる童貞女、聘女ならぬ母よ、我等爾を獨變易なき神を生みし者として、聖者の中に至りて聖なる者なりと識る、蓋爾は神聖なる爾の産にて衆信者に不朽を流し給えり。

【　第８歌頌　主日の規程（カノン）　】



誦經㉔主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストスよ、天使の品位は爾の肉體の衣が爾の血にて赤みたるを見て慄き、爾の大なる寛忍に驚きて呼べり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

我等主なる父と子と聖神とを崇め讃めん。

慈憐なるハリストスよ、爾は己の復活を以て我の死に屬する性に不死を衣給え

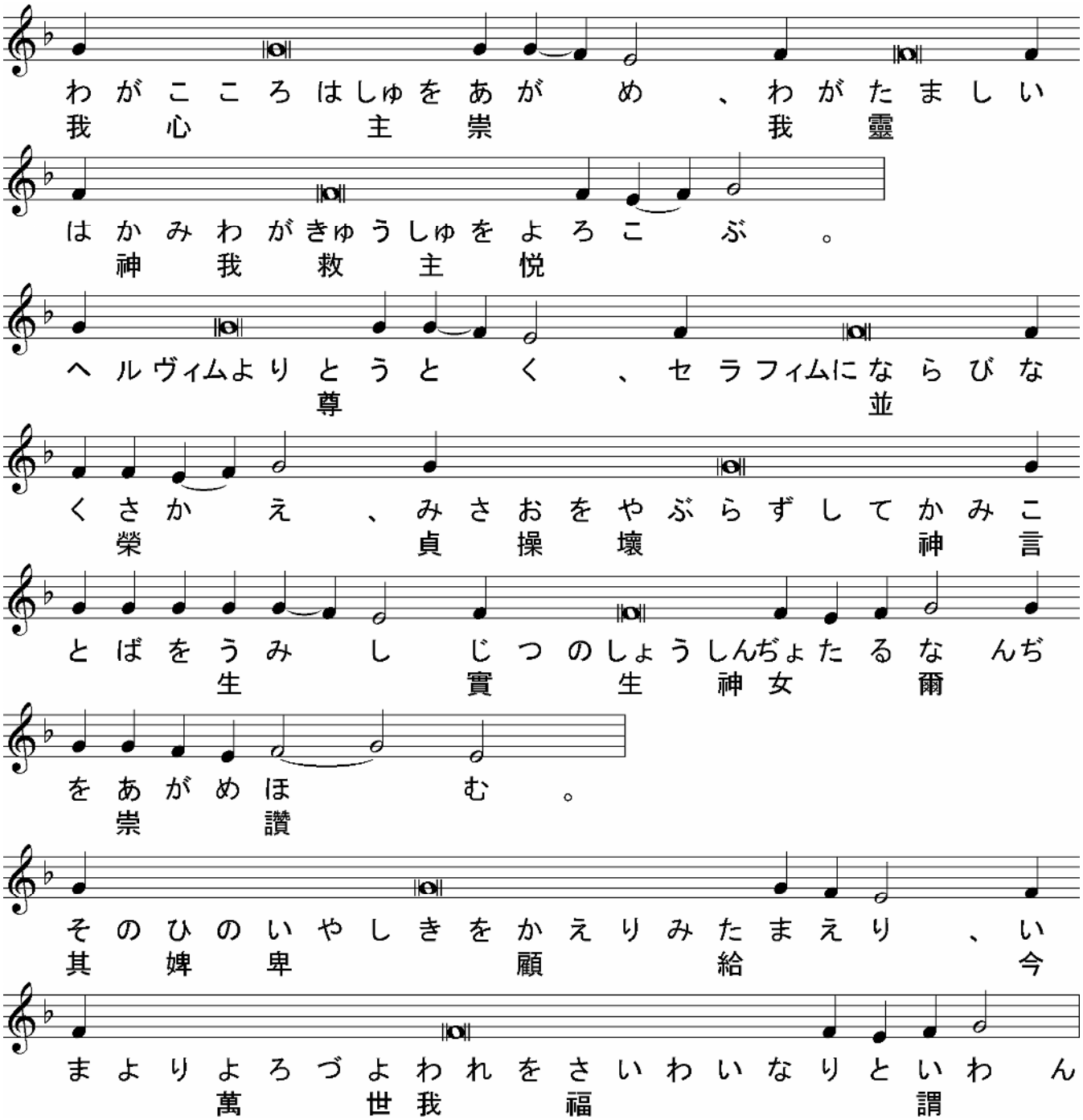
り。故に選を蒙りたる民は感謝して爾を讃め歌い、樂しみて爾に呼ぶ、實に死は勝に呑まれたり。
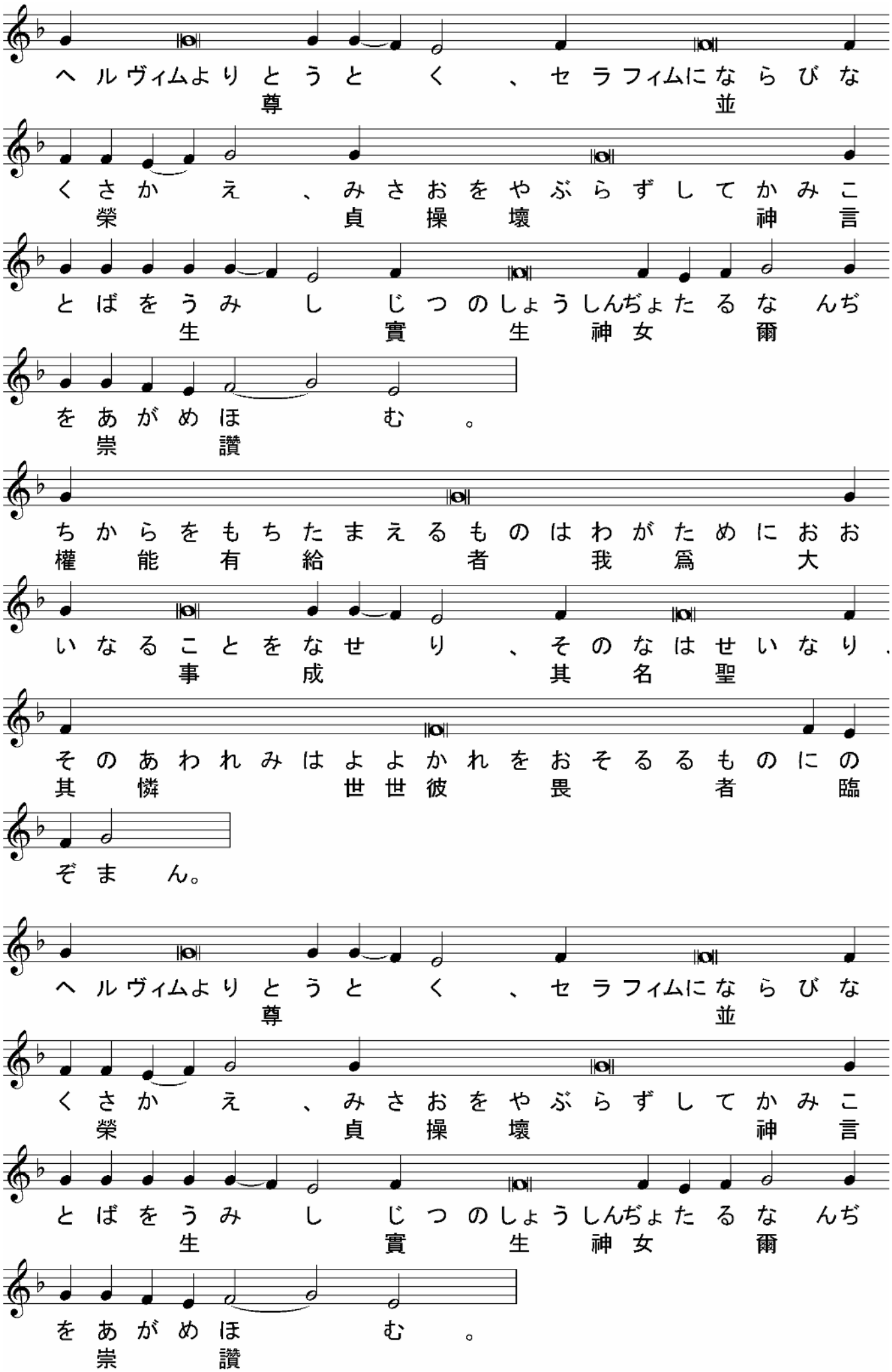
今も何時も世世に、アミン。
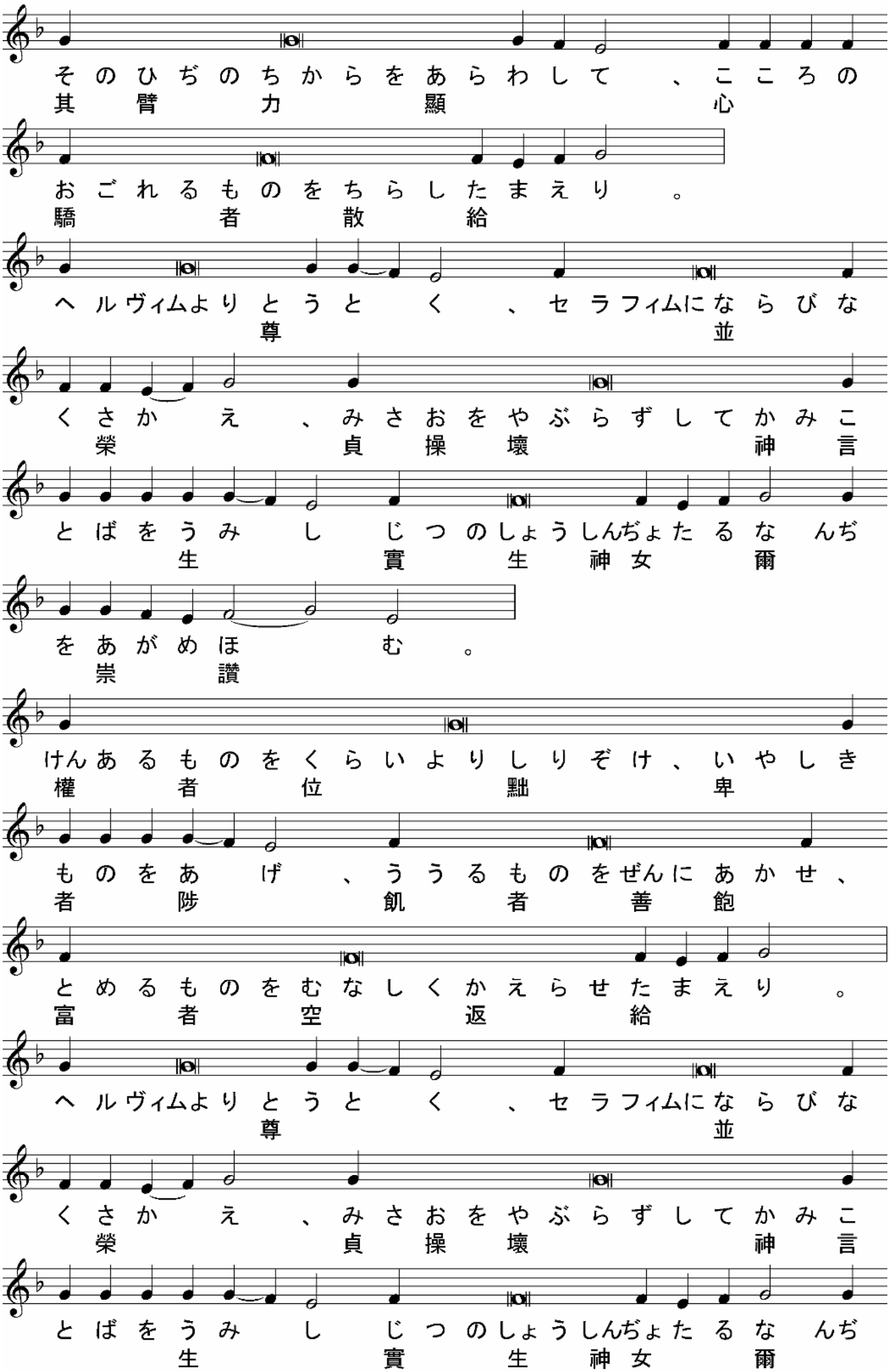
至淨なる神の母よ、爾は父に別れざる者を種なく胎内に孕みて、言い難く生み給えり。故に我等は爾を我衆の救と認む。
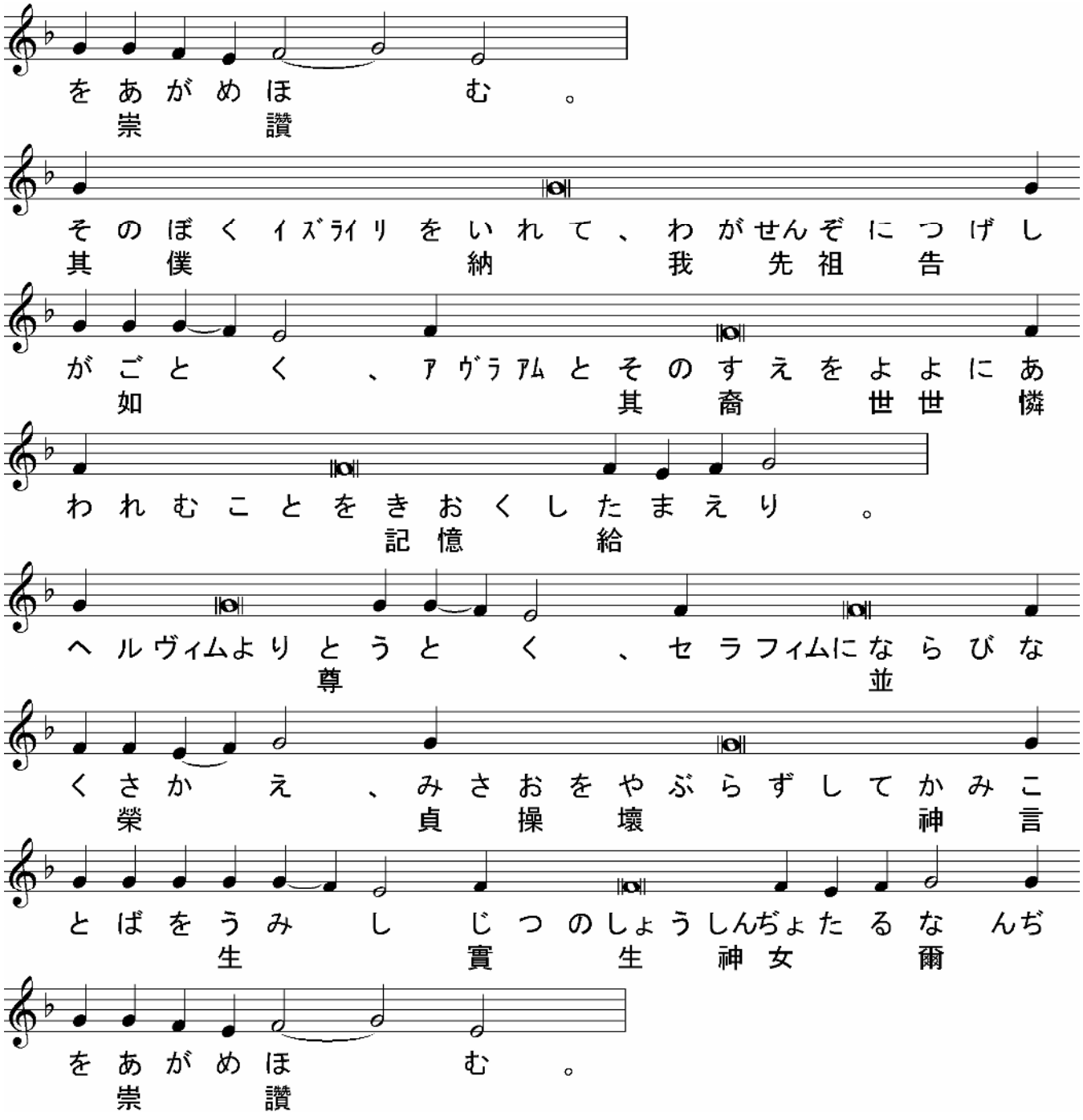
【　ヘルヴィムより尊く　】

司祭）　生神女、光の母を讃歌を以て讃め揚げん、
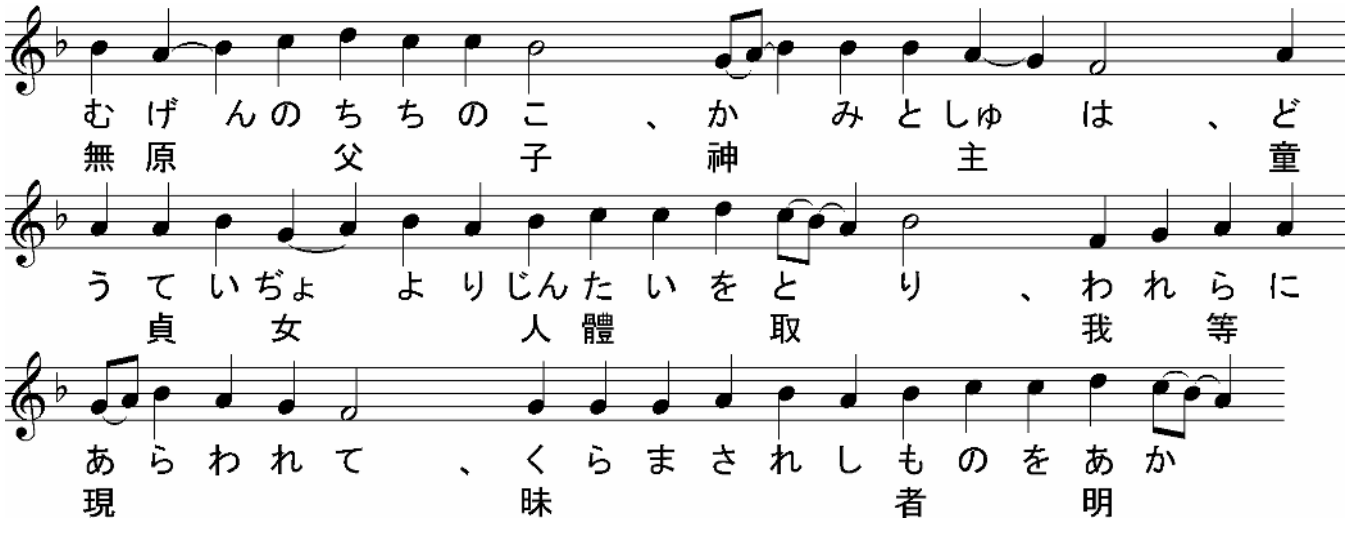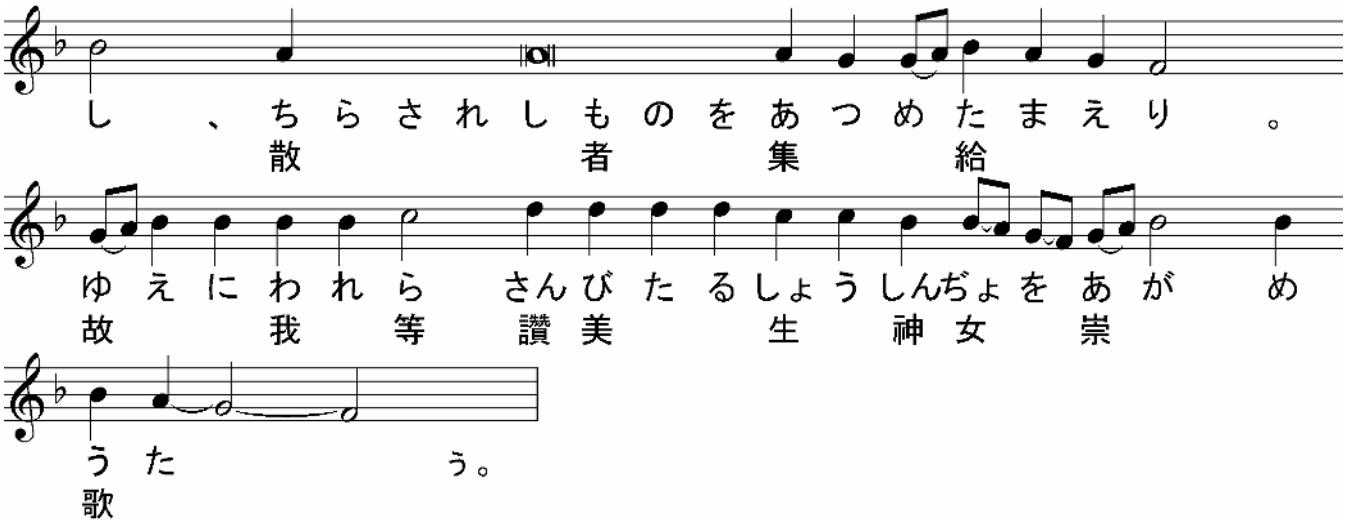



ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびな
尊 並
くさかえ、みさおをやぶらずしてかみこ
榮 貞操壞 神言
とばをうみしじつのしょうしんぢょたるなんぢ
生 實 生 神女 爾
をあがめほむ。
崇 讚
ちからをもちたまえるものはわがためにおお
權 能 有 給 者 我 爲 大
いなることをなせり、そのなはせいなり、
事 成 其 名 聖
そのあわれみはよよかれをおそるるものにの
其 憐 世世彼 畏 者 臨
ぞまん。
ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびな
尊 並
くさかえ、みさおをやぶらずしてかみこ
榮 貞操壞 神言
とばをうみしじつのしょうしんぢょたるなんぢ
生 實 生 神女 爾
をあがめほむ。
崇 讚


そのひぢのちからをあらわして、こころの
其臂力顯心
おごれるものをちらしたまえり。
驕者散給
ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびな
尊並
くさかえ、みさおをやぶらずしてかみこ
榮貞操壞神言
とばをうみしじつのしょうしんぢょたるなんぢ
生實生神女爾
をあがめほむ。
崇讚
けんあるものをくらいよりしりぞけ、いやしき
權者位黜卑
ものをあげ、ううるものをぜんにあかせ、
者陟飢者善飽
とめるものをむなしくかえらせたまえり。
富者空返給
ヘルヴィムよりとうとく、セラフィムにならびな
尊並
くさかえ、みさおをやぶらずしてかみこ
榮貞操壞神言
とばをうみしじつのしょうしんぢょたるなんぢ
生實生神女爾



【　第９歌頌　主日の規程（カノン）　】





誦經㉕主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストス救世主よ、爾の至淨なる十字架の三重に尊貴なる木は地堂に於けるが如く髑髏の處に植えられ、神聖なる泉よりするが如く爾の脅の神聖なる血と水とに濕されて、我等の爲に生命を生じたり。

光榮は父と子と聖神に歸す。
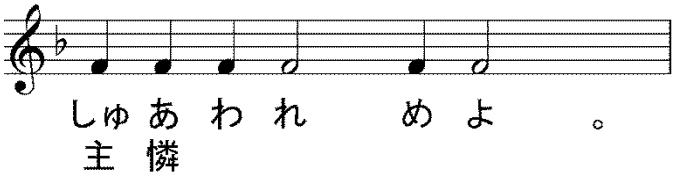
全能者よ、爾は十字架に上げられて、有權者を墜し、下に堅固なる地獄に伏したる人の性を擧げて、父の寶座に坐せしめたり。我等父と偕に爾還來らんとする主に伏拜して崇め歌う。

今も何時も世世に、アミン。

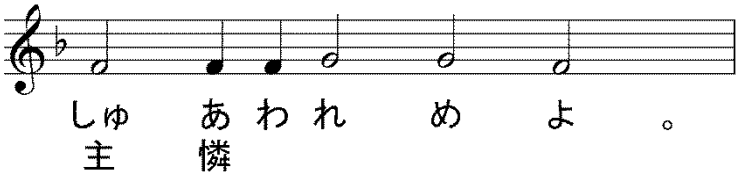
我等信者は三位なる惟一者、一性の三者を眞正に歌いて、分れざる至聖なる性體、三妙の暮れざる日、獨一永在にして、光を我等に輝かしし神を讃榮す。

【 小聯禱 】
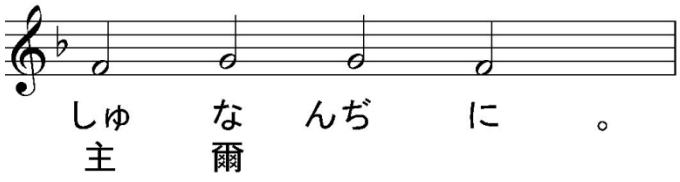
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、
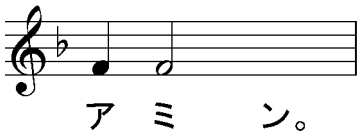


司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



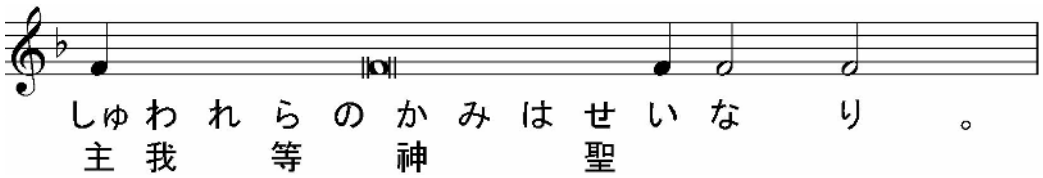
司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



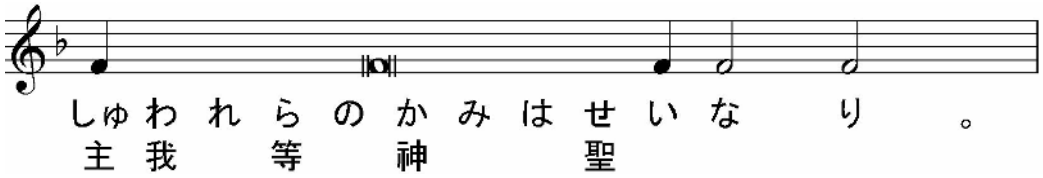
司祭) 蓋天の衆軍爾を讃揚す、我等も光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



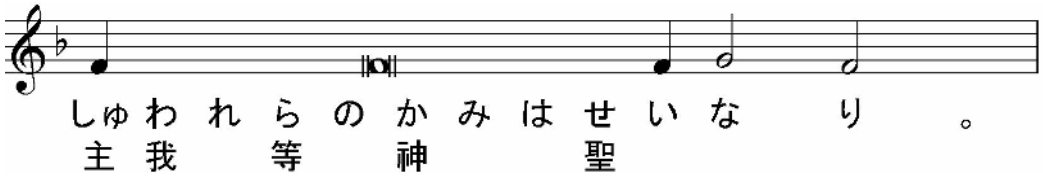
司祭) 主我等の神は聖なり、



司祭) 主はシオンに於て大なり、



司祭) 主は高く衆民の上に在り、



【 差遣詞（エクサポスティラリ） 主日の第８の 】
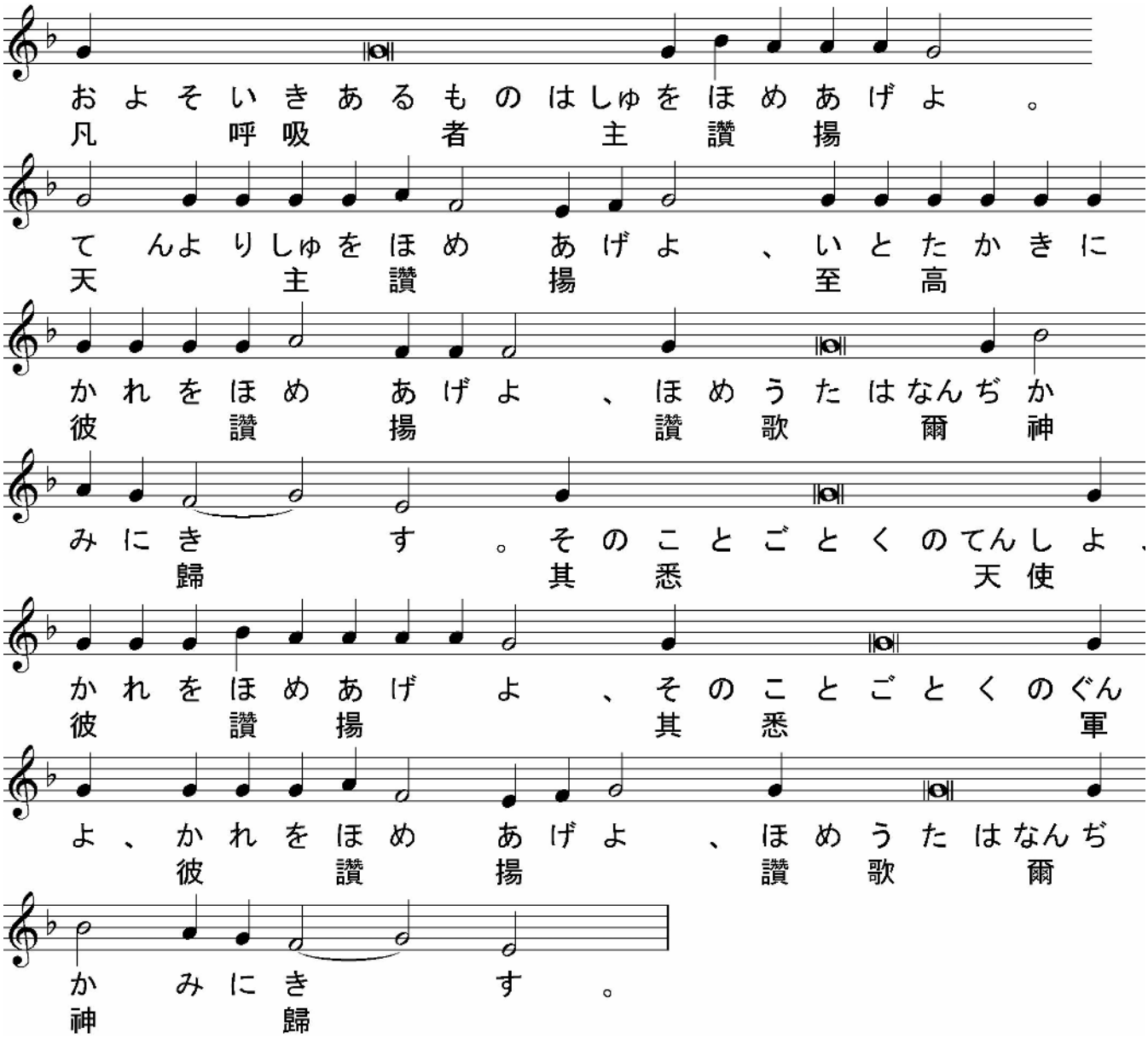
誦經㉖マリヤは二の天使を墓の中に見て驚けり、又ハリストスなるを知らずして、園丁なりと意いて、主よ、爾は我がイイススの屍を何處に置きたると問えり。然れども其呼ぶ聲に因りて救世主親なりと知りて、聞けり、我に捫る勿れ、我父に升ると我が兄弟に告げよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

【　生神女讃詞　】

童貞女よ、爾は言い難く聖三者の一を生み給えり、彼は二の性と二の行動とを有つ一位なる主なり。女宰生神女よ、常に彼に信を以て爾に伏拜する者を凡の敵の悪謀より救わんことを祈り給え、我等皆今爾に趨り附けばなり。

【　讃揚歌　（凡そ呼吸ある者　第148、149、150聖詠）　】



誦經㉗彼等の爲に記されし審判を行わん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。

誦經㉘主よ、凡そ呼吸ある者及び悉くの造物は爾を讃榮す、蓋爾は十字架にて死を空しくせり、人人に爾の死よりの復活を顯さん爲なり、獨人を慈む主なればなり。

誦経㉗神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

誦経㉘イウデヤの人言うべし、如何ぞ王を守る兵卒は之を失いたる、何ぞ石は生命の石を守らざりし。或は葬られし者を與うべし、或は復活せし者に伏拜して、我等と偕に云うべし、吾が救世主よ、光榮は爾の大なる惠に歸す、光榮は爾に歸す。

誦経㉗其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

誦経㉘人人よ、喜び樂しめよ、墓の石に坐する天使は我等に福音して云えり、ハリスト・世界の救主は死より復活して、萬有に馨しき香氣を滿て給えり。人人よ、喜び樂しめよ。

誦経㉗角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

誦経㉘主よ、天使は爾が未だ孕まれざる先に、恩寵を蒙れる者に慶べよと報じ、天使は又爾の復活の時に、爾が光榮なる墓の石を移せり。彼は悲に代えて樂の徵を示し、此は死に代えて我等に生を施す主宰を傳えたり。故に我等爾に呼ぶ、萬有の恩者なる主よ、光榮は爾に歸す。

誦経㉗鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

誦経㉘女等は涙と共に香料を爾の墓に注ぎしに、彼等の口は、ハリストス復活せりと言う時、歡喜に滿てられたり。

誦経㉗和聲の鈸を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鈸を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

誦経㉘諸族諸民はハリストス我等の神、甘じて我等の爲に十字架を忍びて、地獄に三日在りし主を讃め揚げて、其死よりの復活、世界の四極を照しし者に伏拜すべし。

誦経㉗主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる毋れ。

誦経㉘ハリストスよ、爾は望みし如く、十字架に釘せられ、葬られたり、神及び主宰として、死を滅し、光榮の中に復活して、世界に永遠の生命と大なる憐とを賜えり。

誦経㉗主よ、我心を盡くして爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳えん。
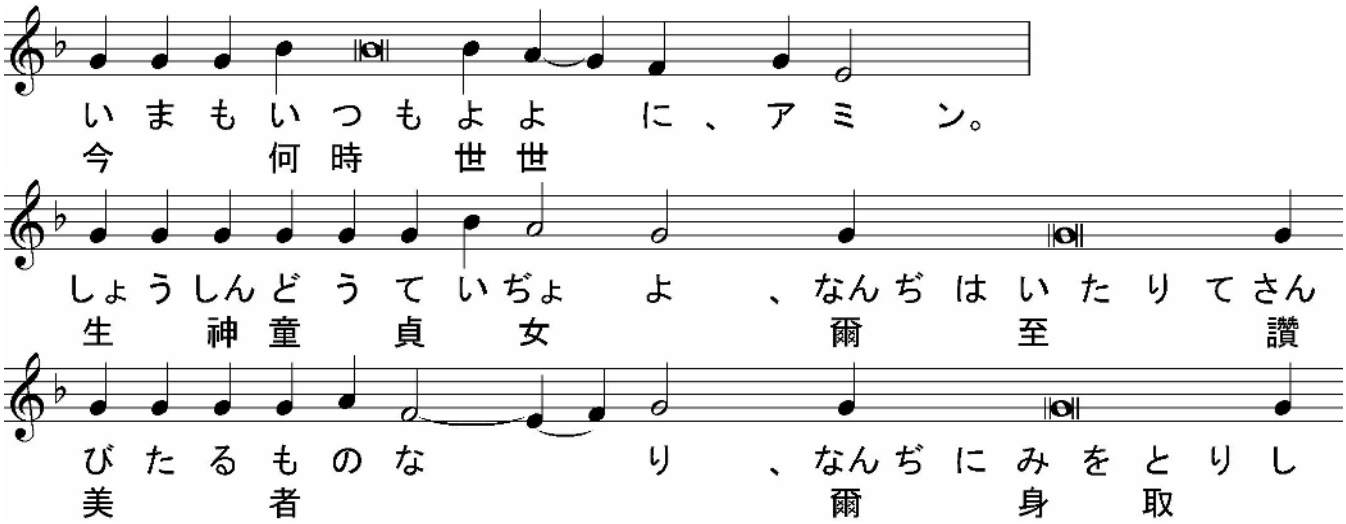
誦経㉘嗚呼石に封印せし不法者は實に我等に更に多くの奇跡を見るを得しめたり。番兵は今彼が墓より出でたるを知れるに、之に謂う、告ぐべし、我等が寝ねたる時、其門徒來りて、彼を竊めりと。誰か死者、殊に裸體なる者を竊まん、彼親ら神として、己の權を以て復活して、墓の中に其斂葬の衣を遺せり。イウデヤ人よ、來りて、觀よ、死を滅し、人類に永遠の生命と大なる憐とを賜いし者は如何にして封印を破らざりし。
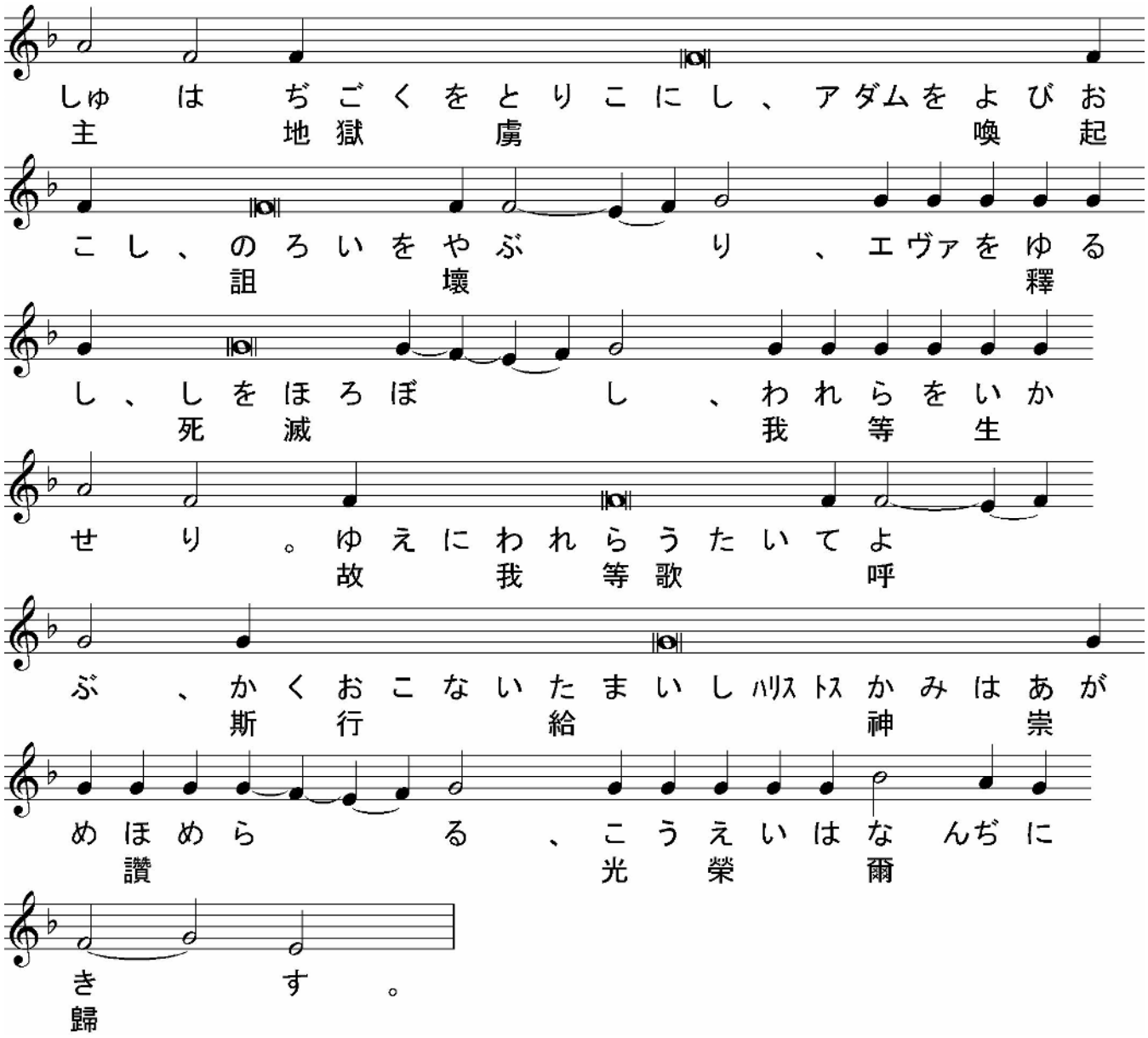
誦経㉗光榮は父と子と聖神に歸す。

【　福音の讃頌　第６調　】

誦経㉘マリヤの熱き涙の注がるるは徒然にあらず、蓋視よ、教うる天使に遇い、イイススの親を見るを獲たり、然れども弱き女として、亦地上の事を思う、故にハリストスに捫るを許されず。唯傳教女として爾の門徒に遣されて之に福音を攜え、爾が父の嗣業に升るを告ぐ。主宰主よ、彼と偕に我等をも爾の顯見に勝えさせ給え。
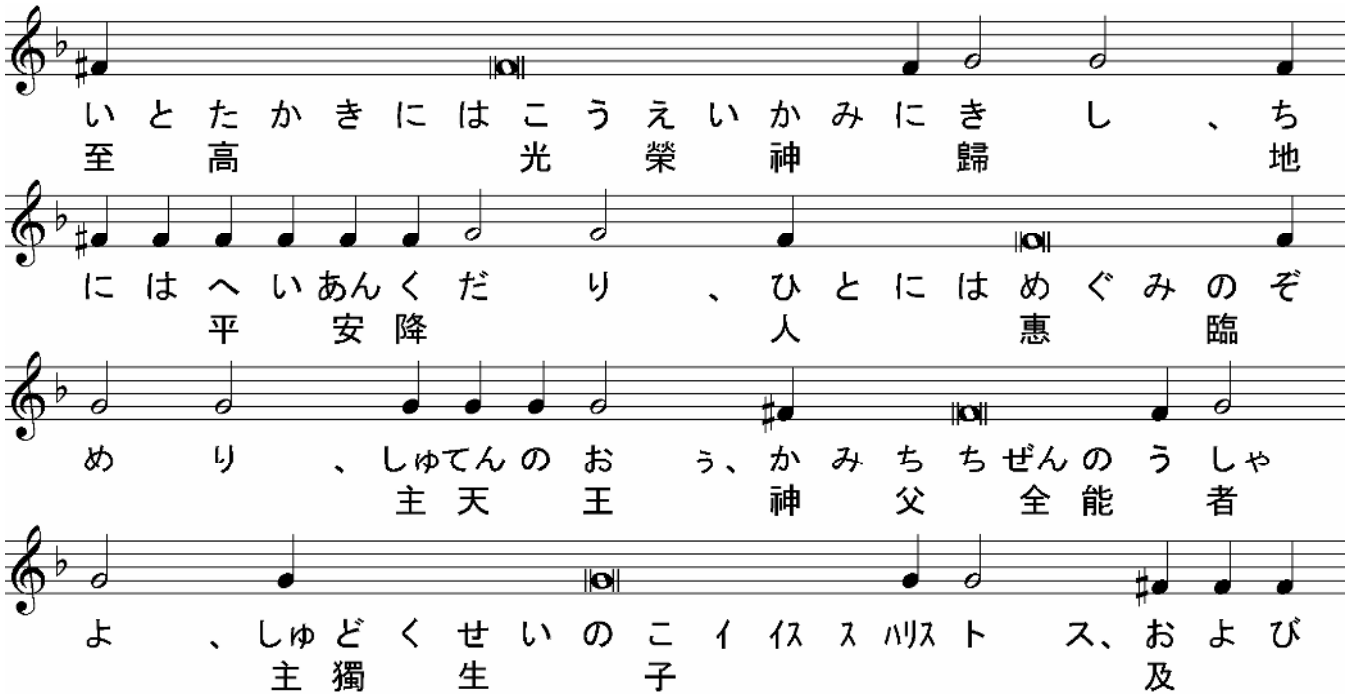
【　生神女讃詞　第２調　】
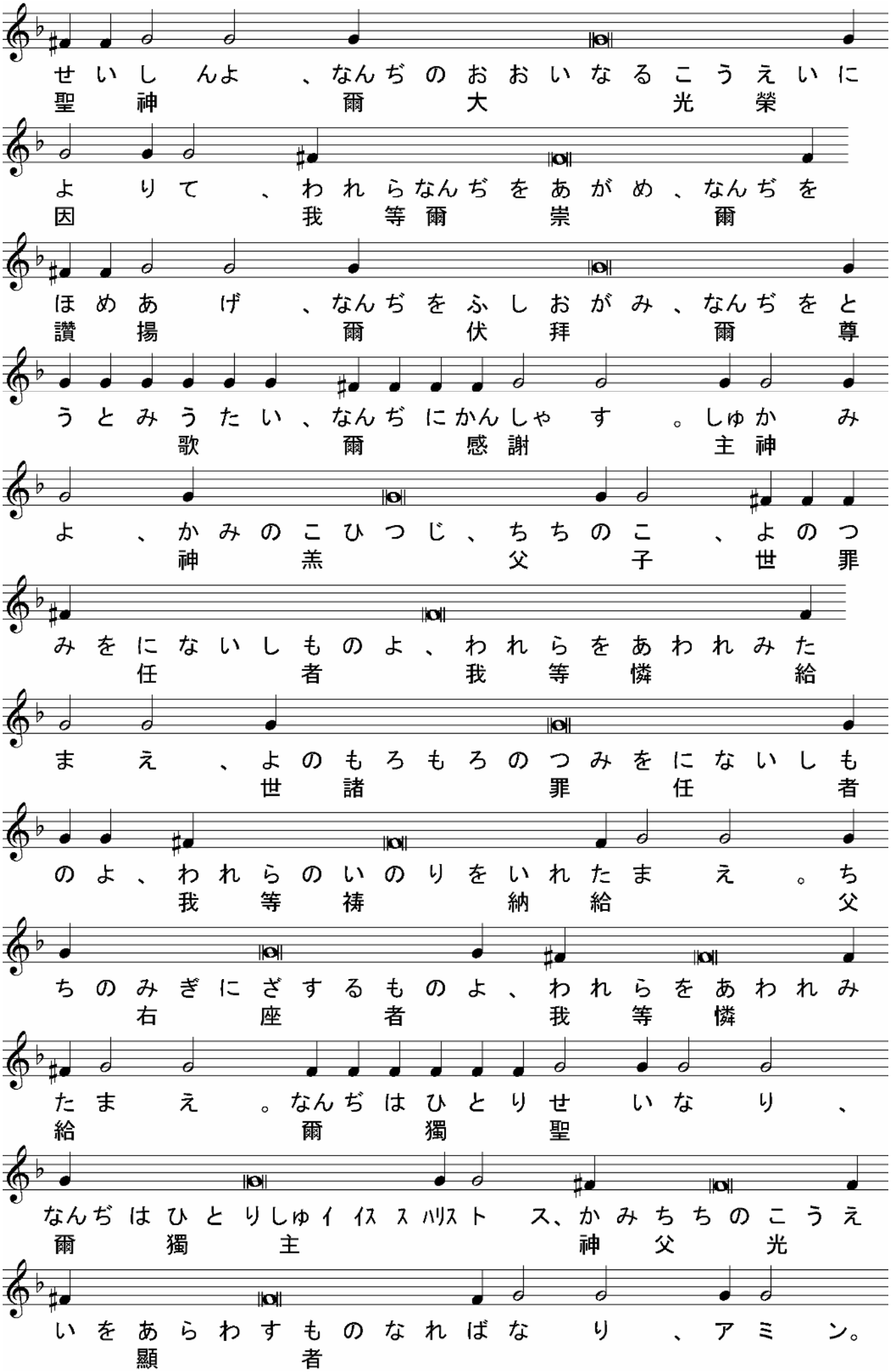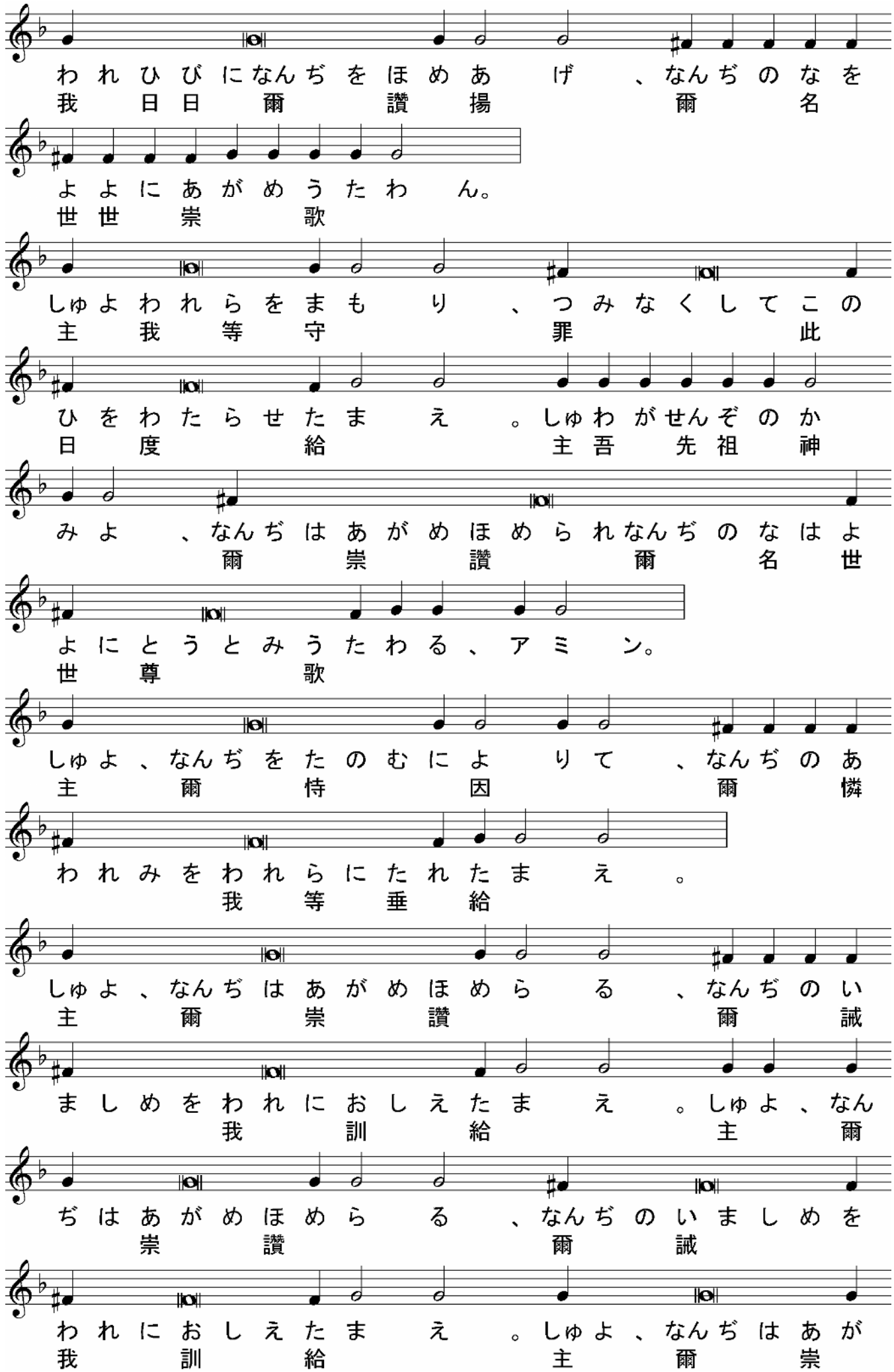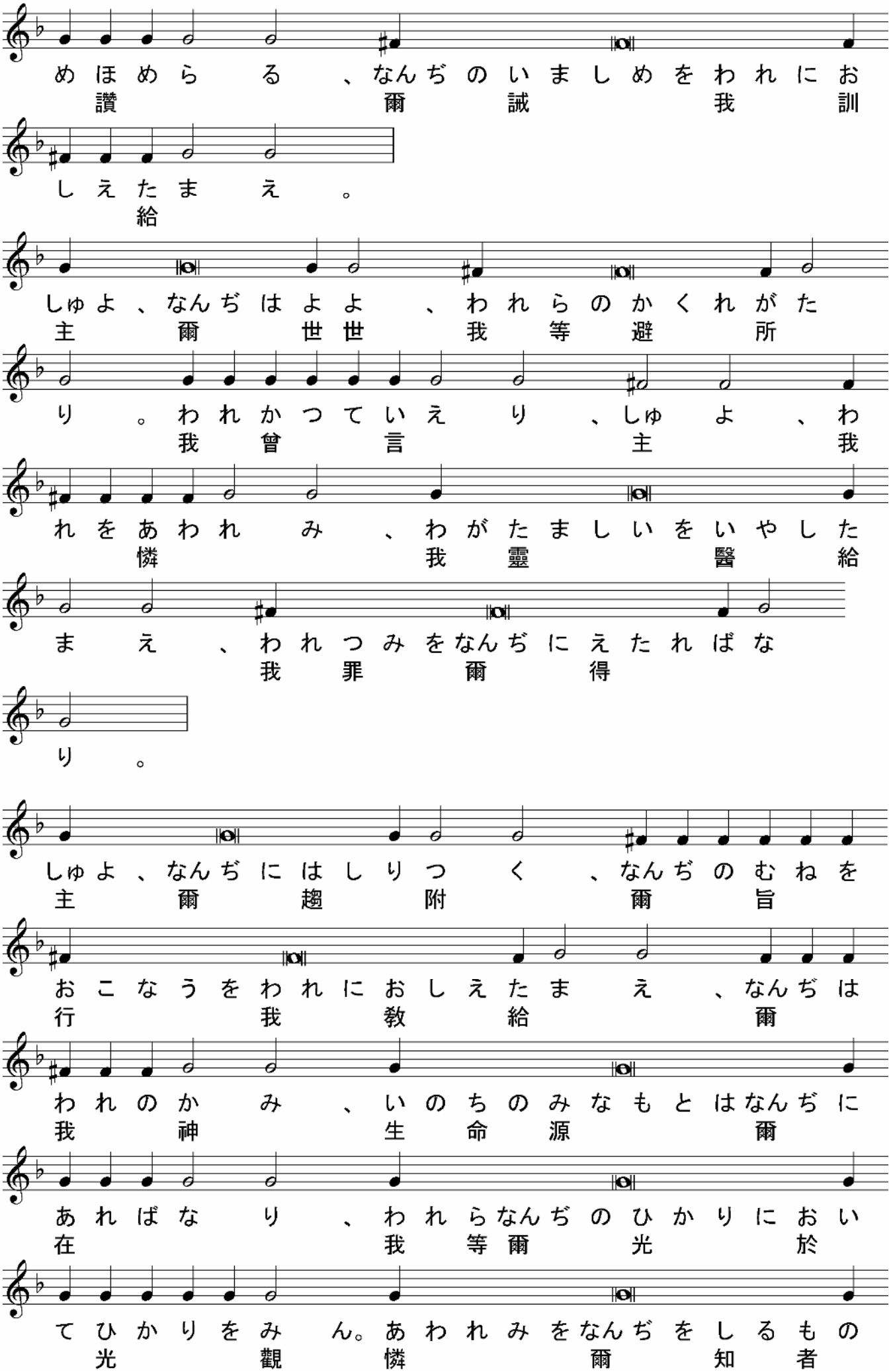




【　大詠頌　】
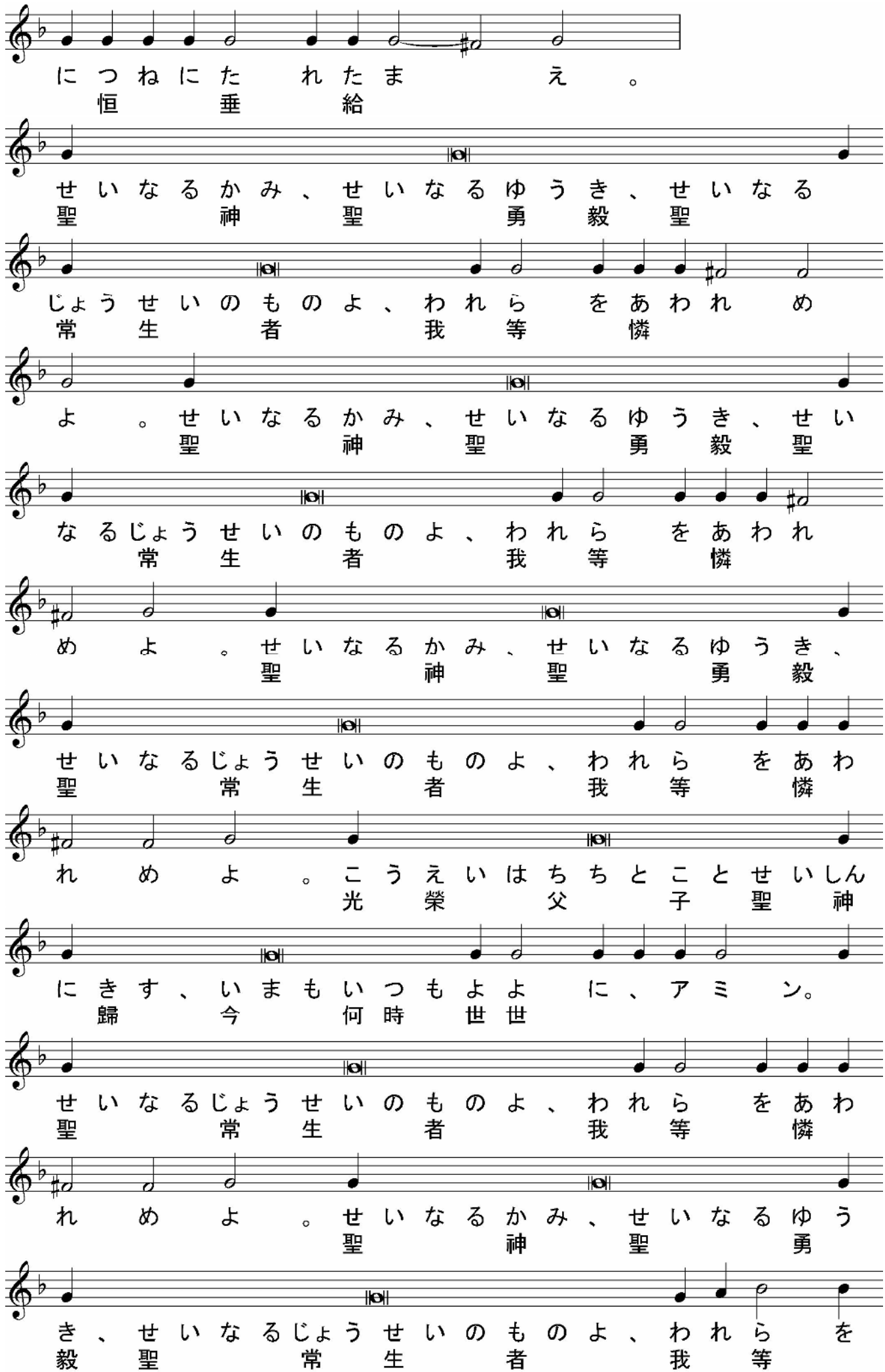
司祭）光榮(こうえい)は爾(なんぢ)、我等(われら)に光(ひかり)を顯(あらわ)せる主(しゅ)に歸(き)す、

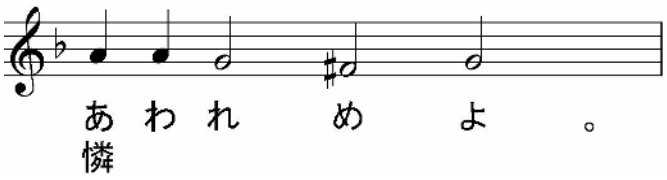



せいしんよ、なんぢのおおいなるこうえいに
聖神爾大光榮
より て、われらなんぢをあがめ、なんぢを
因我等爾崇爾
ほめあげ、なんぢをふしおがみ、なんぢをと
讃揚爾伏拜爾尊
うとみうたい、なんぢにかんしゃす。しゅかみ
歌爾感謝主神
よ、かみのこひつじ、ちちのこ、よのつ
神羔父子世罪
みをにないしものよ、われらをあわれみた
任者我等憐給
まえ、よのもろもろのつみをにないしも
世諸罪任者
のよ、われらのいのりをいれたまえ。ち
我等祷納給父
ちのみぎにざするものよ、われらをあわれみ
右座者我等憐
たまえ。なんぢはひとりせいなり、
給爾獨聖
なんぢはひとりしゅイイススハリストス、かみちちのこうえ
爾獨主神父光
いをあらわすものなればなり、アミン。
顯者
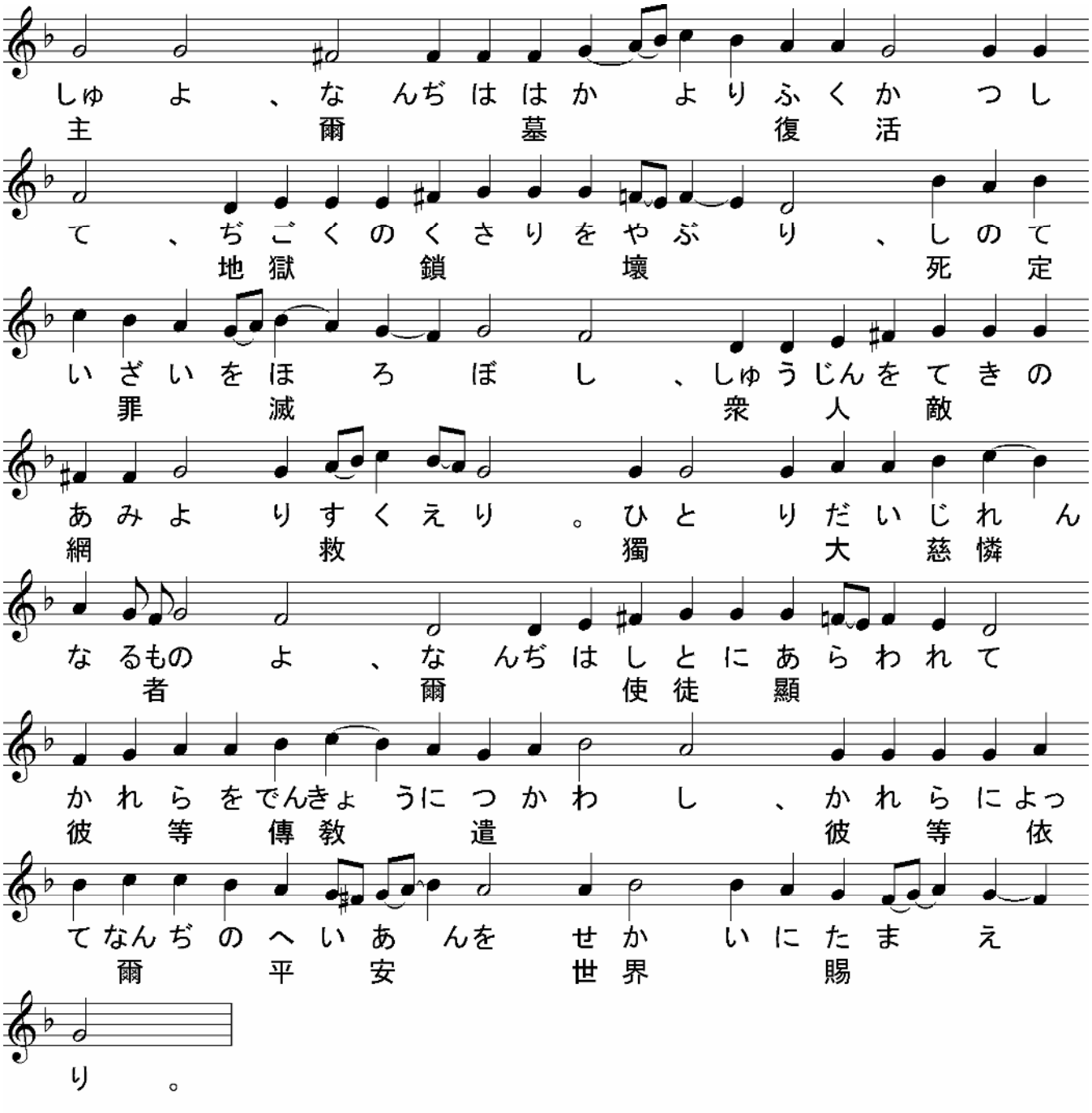

われひびになんぢをほめあげ、なんぢのなを
我日日爾讃揚爾名
よよにあがめうたわん。
世世崇歌
しゅよわれらをまもり、つみなくしてこの
主我等守罪此
ひをわたらせたまえ。しゅわがせんぞのか
日度給主吾先祖神
みよ、なんぢはあがめほめられなんぢのなはよ
爾崇讃爾名世
よにとうとみうたわる、アミン。
世尊歌
しゅよ、なんぢをたのむによりて、なんぢのあ
主爾恃因爾憐
われみをわれらにたれたまえ。
我等垂給
しゅよ、なんぢはあがめほめらる、なんぢのい
主爾崇讃爾誡
ましめをわれにおしえたまえ。しゅよ、なん
我訓給主爾
ぢはあがめほめらる、なんぢのいましめを
崇讃爾誡
われにおしえたまえ。しゅよ、なんぢはあが
我訓給主爾崇


めほめら る 、なんぢのいましめをわれにお
讃 爾 誡 我 訓
しえたま え 。
給
しゅよ 、なんぢはよよ 、われらのかくれがた
主 爾 世世 我等 避 所
り 。われかつていえり 、しゅよ 、わ
我 曾 言 主 我
れをあわれみ 、わがたましいをいやした
憐 我 靈 醫 給
まえ 、われつみをなんぢにえたればな
我 罪 爾 得
り 。
しゅよ 、なんぢにはしりつく 、なんぢのむねを
主 爾 趨 附 爾 旨
おこなうをわれにおしえたまえ 、なんぢは
行 我 教 給 爾
われのかみ 、いのちのみなもとはなんぢに
我 神 生 命 源 爾
あればなり 、われらなんぢのひかりにおい
在 我 等 爾 光 於
てひかりをみん。あわれみをなんぢをしるもの
光 觀 憐 爾 知 者


につねにたれたまえ。
恒垂給
せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖神聖勇毅聖
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常生者我等憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖神聖勇毅聖
なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常生者我等憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖神聖勇毅
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖常生者我等憐
れめよ。こうえいはちちとこせいしん
光榮父子聖神
にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸今何時世世
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖常生者我等憐
れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
聖神聖勇
き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
毅聖常生者我等
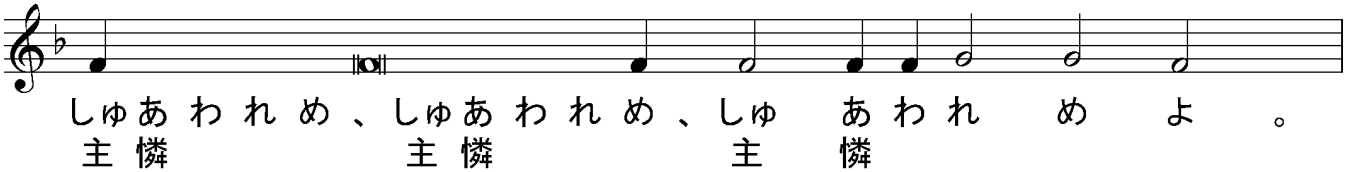


【　定規の復活の讃詞　第２調　】



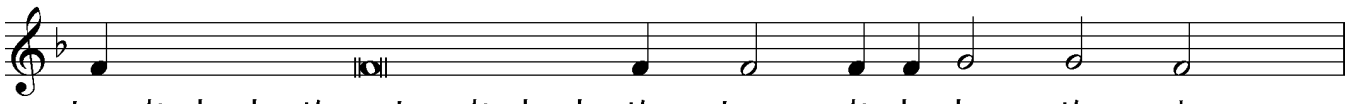
【　重聯禱　】

司祭）神(かみ)よ、爾(なんぢ)の大(おおい)なる憐(あわれみ)に因(よ)りて我等(われら)を憐(あわれ)めよ、爾(なんぢ)に禱(いの)る、聆(き)き納(い)れて憐(あわれ)めよ

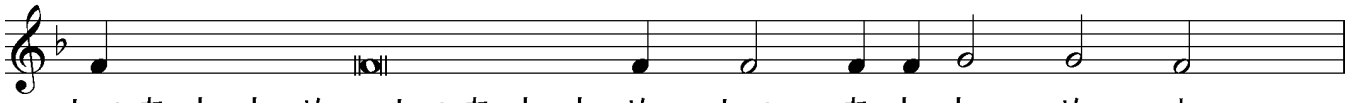
、



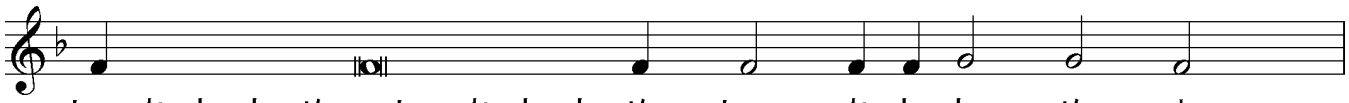
司祭) 又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



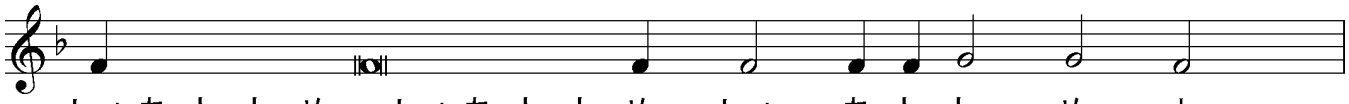
司祭) 又教曾を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



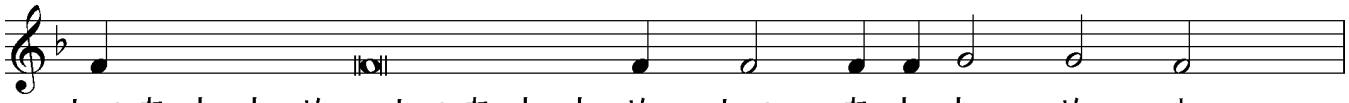
司祭) 又恒に記憶せらるる福たる此の聖堂の建立者、及び既に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に禱る、
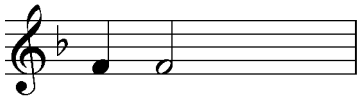


司祭) 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐、生命、平安、壮健、救贖、眷顧、寛宥、及び諸罪の赦を賜わんが爲に禱る、



司祭) 又此の聖堂に物を獻り、善業を行い、之に労し、之に歌い、及び此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、
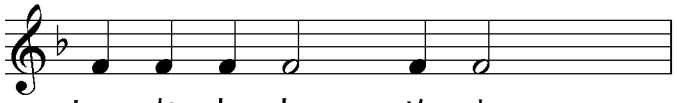


司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、
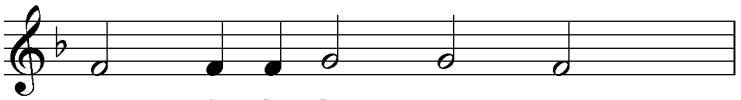


【　增聯禱　】

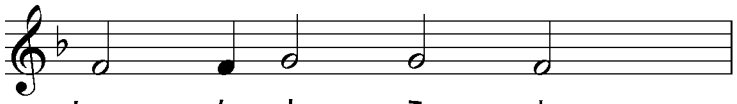
司祭）我等主の前に吾が朝の 禱 を增し加えん、
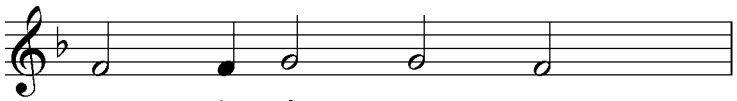


司祭）神よ、 爾 の恩 寵 を以て、我等を佑け救い 憐 み護れよ、
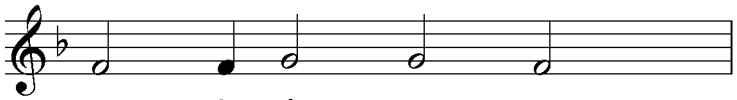


司祭）此の晩の 純 全・成 聖・平 安・無罪ならんことを主に求む、
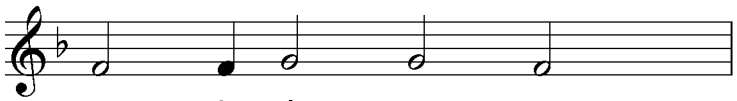


司祭）平 安の天使、正しき 教 導師、吾が靈 體の守護者を賜わんことを主に求む、
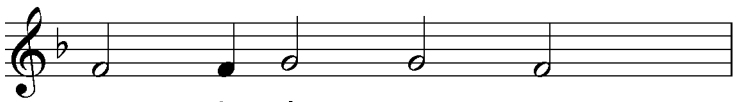


司祭）我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭）我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平 安を賜わんことを主に求む、
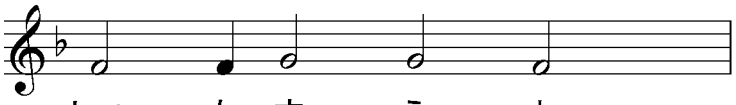


司祭）我等の生命の餘日を平 安と痛 悔とを以て終らんことを主に求む、
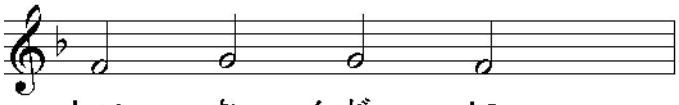


司祭）我等の生命の 終 がハリスティアニンに適い、 疾 なく、恥なく、平 安なること、及び
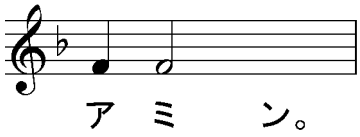
ハリストスの畏る可き審 判に於て宜しき 對 をなすを賜わんことを求む、



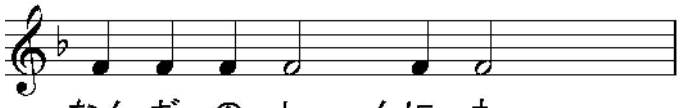
司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
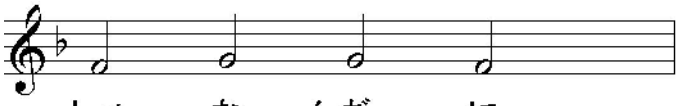


司祭) 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



司祭) 衆人に平安、
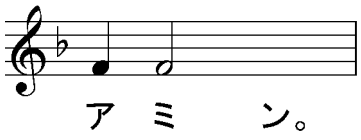


司祭) 我等の首を主に屈めん、
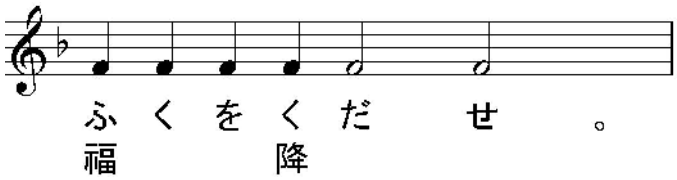


司祭) (默誦：聖なる主、高きに居り卑きを臨み、爾が見ざる所なき目にて萬物を鑒る者よ、我等心と體との項を爾の前に屈めて爾に禱る、爾が見えざる手を爾が聖なる住居より伸べて、我等衆人に福を降し給え、我等に自由或は自由ならずして犯しし罪あらば、爾善にして人を愛する神なるに依りて之を赦して、我等に今世來世の諸善を與え給え、)
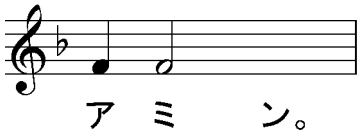
蓋 我が神よ、我等を 憐 みて救うこと 爾 に歸す、我等光 榮を 爾 父と子と聖 神
に獻ず、今も何時も世世に、
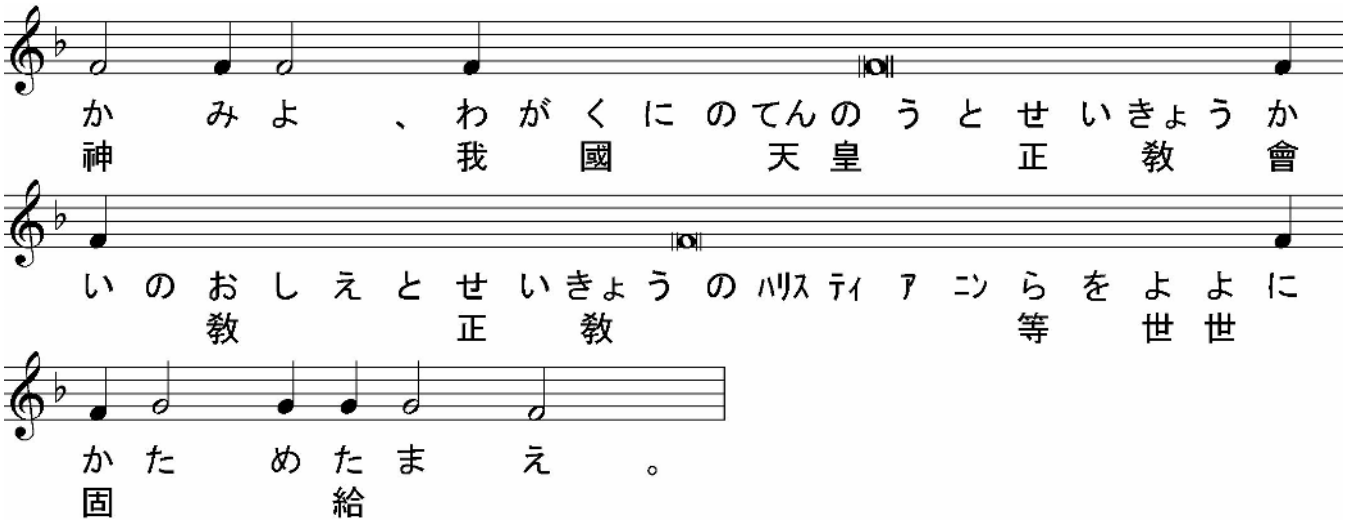


司祭) 睿智、
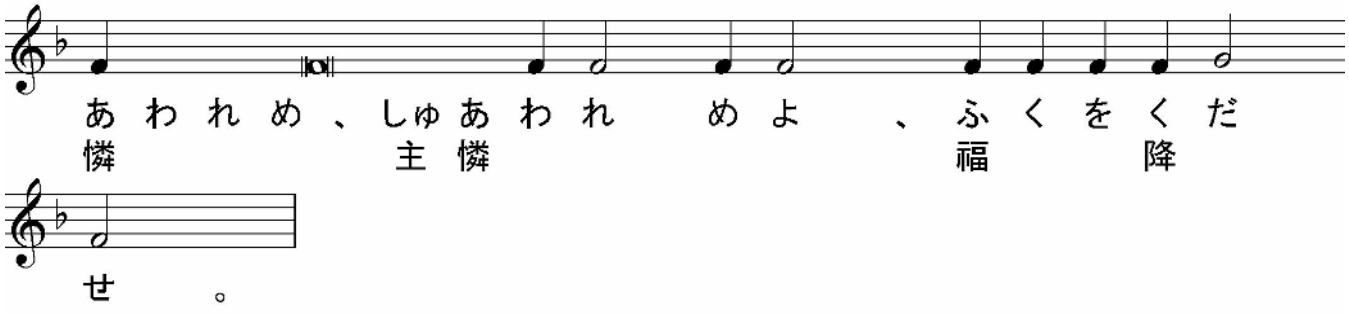


司祭) 永 在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、
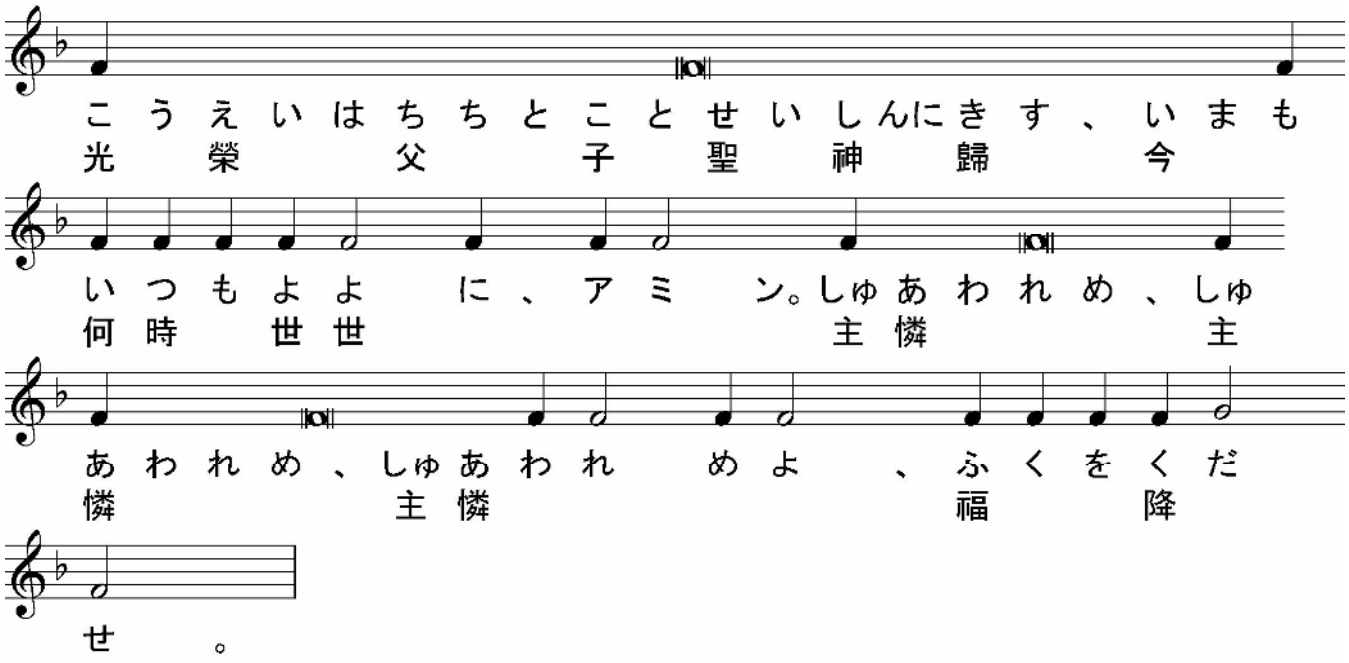




司祭) 至聖なる 生 神 女よ、我等を救い給え、
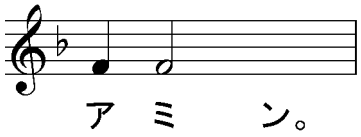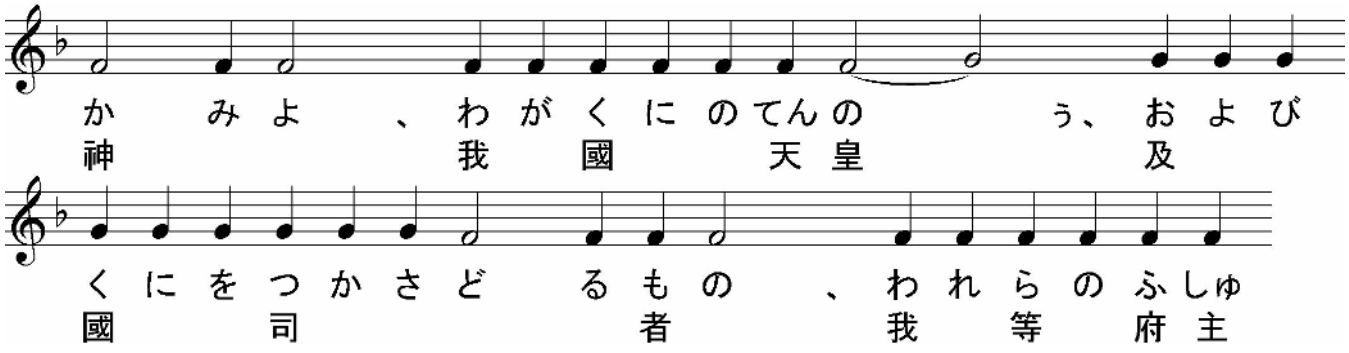




司祭) ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、
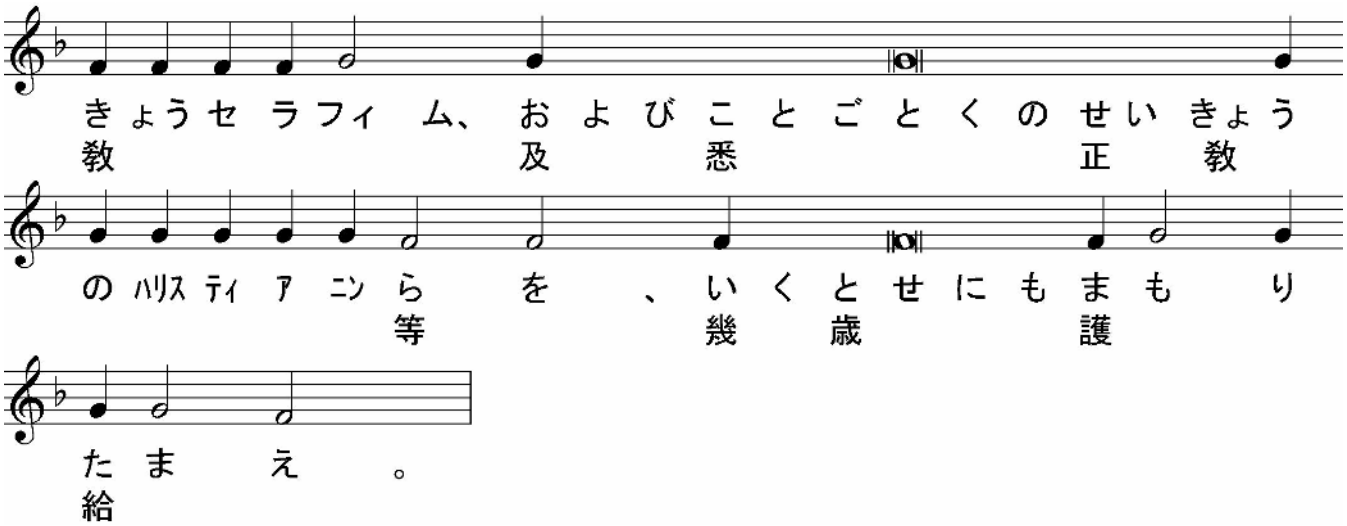


司祭) 死より復活せしハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母、光榮にして讃美たる聖使徒、（ 聖 某 ）及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん。彼は善にして人を愛する主なればなり、



【 萬壽詞 】




きょうセラフィム、およびことごとくのせいきょう
教及悪正教
のﾊﾘｽﾃｨｱﾆﾝらを、いくとせにもまもり
等幾歳護
たまえ。
給

【　第一時課　】

誦經㉙來れ、我等の王・神に叩拜せん。

來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん。

來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

【　第５聖詠　伶長に簫を以て和せしむ。ダヴィドの詠。】

主よ、我が言を聽き、我が思を悟れ。我が王我が神よ、我が呼ぶ聲を聽き納れ給え、我爾に祈ればなり。主よ、晨に我が聲を聽き給え、我晨に爾の前に立ちて待たん。蓋爾は不法を喜ばざる神なり、惡人は爾に居るを得ず、不虔の者は爾が目の前に止らざらん、爾は凡そ不法を行う者を憎む、爾は謊を言う者を滅さん、殘忍詭譎の者は主之を惡む。惟我爾が憐の多きに倚りて爾の家に入り、爾を畏れて爾が聖堂に伏拜せん。主よ、我が敵の爲に我を爾の義に導き、我が前に爾の道を平にせよ。蓋彼等の口には眞實なく、彼等の心は惡逆、彼等の喉は開けたる柩、其舌にて媚び諂う。神よ彼等の罪を定め、彼等に其謀を以て自ら敗れしめ、彼等が不虔の甚しきに依りて之を逐い給え、彼等爾に逆らえばなり。凡そ爾を賴む者は喜びて永く樂み、爾は彼等を庇い護らん、爾の名を愛する者は爾を以て自ら詡らんとす。蓋主よ、爾は義人に福を降し、惠を以て盾の如く彼を環らし衞ればなり。

【　第８９聖詠　神の人モイセイの祈禱　】

主よ、爾は世世に我等の避所たり。山未だ生ぜず、爾未だ地と全世界とを造らざる先、且世より世までも爾は神なり。爾人を塵に歸らしめて曰う、人の子よ、歸れと。蓋爾が目の前には、千年は過ぎし昨日の如く、夜間の更の如し。爾は大水の如く彼等を流す、彼等は夢の如く、朝に生うる草の如し、朝には花さきて且青し、暮には刈られて稿る。蓋我等は爾の怒に因りて消え、爾の憤に因りて惶れ惑う。爾は我等の不法を爾の前に置き、我等の隱れたる事を爾が顔の

光の前に置けり。我等が悉くの日は爾が怒の中に過ぎ、我等は我が歳を失うこと音の如し。我が歳の數は七十年、或は健なれば八十年なり、其間の壮なる時も、劬勞と疾病あり、蓋其過ぐること速にして、我等飛び去る。誰か爾が怒の力を知り、又爾を畏るる度に依りて爾の憤を識らん。願わくは我等に我が日を算うることを教えて、智慧の心を獲しめ給え。主よ、面を回せ、何の時に至るか、爾の僕を憐み給え。夙に爾の憐みを以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歓び樂まん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭いし年に代えて、我等を樂ましめ給え。願わくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其の諸子に著れん、願わくは主吾が神の恵は我等に在らん、願わくは我が手の工作を我等に助け給え、我が手の工作を助け給え。

【 第１００聖詠　ダヴィドの詠 】

我憐と審判とを歌わん、主よ、爾に歌を奉らん。我玷なき道を思わん、爾何の時我に至るか、我玷なき心を以て我が家の中を行かん。我が目の前には邪なる物を置かざらん、法に背く行は我之を疾む、其れ必ず我に附かざらん。壊れし心は我に遠ざかり、惡しき者は我之を識らざらん。隠に己の隣を謗る者は我之を逐い、目傲り、心高ぶる者は我之を容れざらん。我が目は斯の地の忠信なる者を顧みて、彼等を我が傍に居らしめん、玷なき道を行く者は我に事えん。貳心を行う者は我が家に居るを得ず、謊を言う者は我が目の前に止らざらん。晨に我此の地の悉くの不虔者を滅して、凡そ不法を行う者を主の城邑より絶たれしめん。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す、

誦経㉚主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、光 榮は父と子と聖 神に歸す、

【 主日の復活讃詞（トロパリ） 第２調 】

死せざる生命よ、 爾 死に降りし時、神の性の 光 にて地獄を殺せり。死せし者を地下より復 活せしめし時、天 軍 皆呼びて曰えり、生命を賜う主ハリストス吾が神よ、光 榮は 爾 に歸す。

今も何時も世世に、アミン。

嗚呼恩 寵 に滿たさるる者よ、我等何を以て 爾 を 稱 せんか、天とせん、 爾 義の日を照したればなり、樂 園とせん、 爾 枯れざる花を開きたればなり、童 貞 女とせん、 爾 貞操を壞らざればなり、淨き母とせん、 爾 聖なる 懐 に萬 物の神たる子を抱きたればなり、彼に我等の 靈 の救われんことを祈り給え。

我が足を 爾 の 言 に固め給え、 諸 の不法の我を制するを許す毋れ。我を人の迫 害より救い給え、然せば我 爾 の命を守らん。 爾 が 顔 の 光 にて 爾 の僕を照し、 爾 の 律 を我に誨え給え。主よ、願わくは我が口は讃 美に滿てられて、我 爾 の光 榮を歌い、日日に 爾 の威 嚴を歌わん。

聖なる神、聖なる勇 毅、聖なる 常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

聖なる神、聖なる勇 毅、聖なる 常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

聖なる神、聖なる勇 毅、聖なる 常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

至聖 三 者よ、我等を 憐 め。主よ、我等の罪を 潔 くせよ。主 宰よ、我等の 愆 を赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の 病 を癒し給え。 悉 く 爾 の名に因る。

主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。

光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

天に在す我等の父よ、願わくは 爾 の名は聖とせられ、 爾 の國は來り、 爾 の旨は天に 行 わるるが如く、地にも 行 われん。我が日 用の糧を今 日 我等に與え給え。我

等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救い給え。

司祭) 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經㉚アミン。

【 主日の復活コンダク 第２調 】

誦經㉛全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見て慄き、死者は起き、造物は見て爾と偕に喜び、アダムは共に樂しみ、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌う。

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、
主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、
何の日何の時にも、天にも地にも叩拜讃榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誡に向わしめ給え、我等の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救い、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其園に衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給え、蓋爾は世世に崇め讃めらる、アミン。

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ヘルヴィムより尊く、セラフィムに並なく榮え、貞操を壞らずして神言を生みし實の生神女たる爾を崇め讃む。
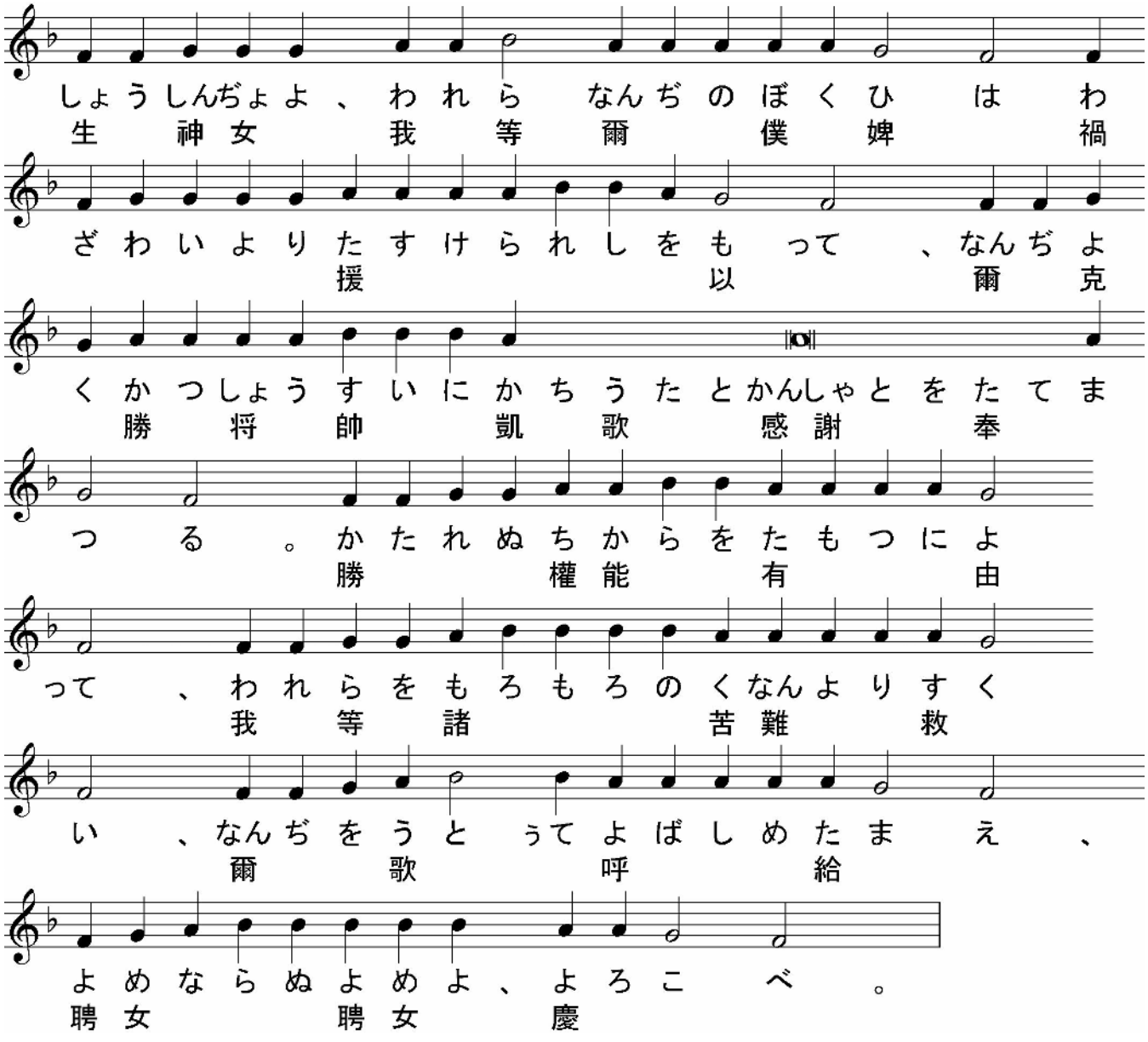
神父よ、主の名を以て福を降せ、

司祭) 神よ、我等に恩を被らし、我等に福を降し、爾が顔を以て我等を照し、並に我等を憐み給え、

誦経㉛アミン。
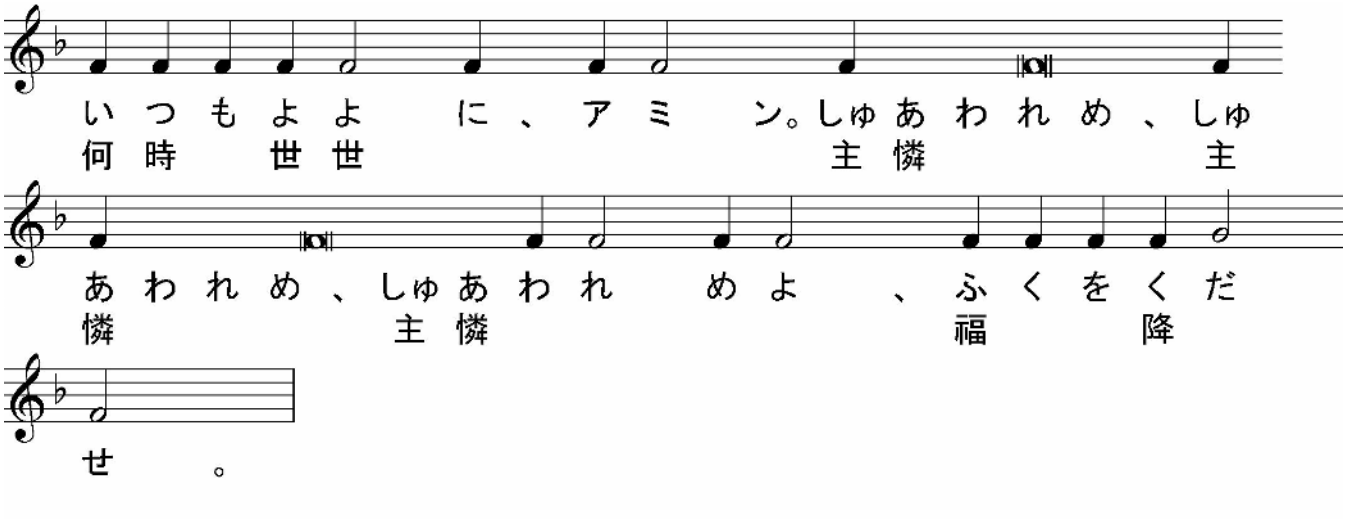
司祭）眞の光なるハリストス、凡そ世に來る人を照し且聖にする者よ、願わくは爾が顔の光は我等に輝き、我等は是に依りて近づき難き光を見るを得ん、願わくは爾が至淨の母と、爾が諸聖人の祈禱に因りて、我等の足を爾の戒を行うに向わしめ給え、アミン。

【　生神女コンダク　】
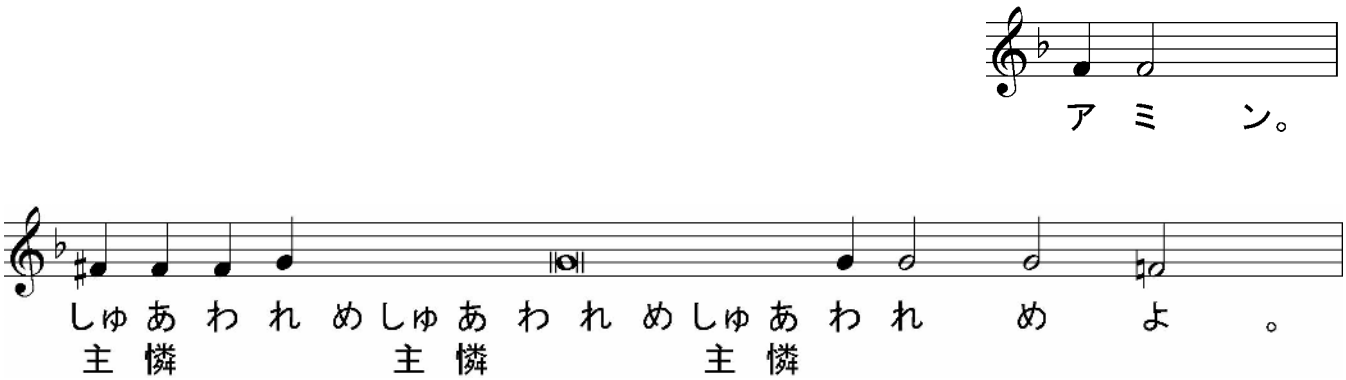


司祭）ハリストス・神・我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、





司祭) 死より復活せしハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母、克肖捧神なる吾が諸神父、及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、



2026 年 9 月 11 日　聖歌研修会用に編集